

平成20年度 文部科学省委託事業  
「総合的な放課後対策推進のための調査研究」

# 放課後子ども教室 全国研究大会

## 事業報告書

平成21年3月20日

株式会社キャリアリンク

### 目次

I. 放課後子ども教室全国研究大会 要綱	P.2
II. 全体総括	P.4
III. 平成19年度放課後子ども教室 実施状況	P.11
IV. 放課後子ども教室全国研究大会 開催意図	P.14
V. 事例紹介	P.15
VI. 基調講演	P.23
VII. 講義	P.32
VIII. 分科会	P.43
IX. 激励講演	P.55
アンケート集計	P.69

# I 放課後子ども教室全国研究大会 要綱

## 1. 主旨

放課後子ども教室の全国的な普及、活動内容の充実、活性化のための情報提供の場として研究大会を実施。参加者は、都道府県・市町村教育委員会等事業関係者、コーディネーター等の事業関係者、地域ボランティア等が想定されるため、“現場での課題解決の糸口が具体的に理解できる”課題解決型のワークショップを取り入れた研究大会形式とする。

## 2. 日時

平成 21 年 2 月 25 日(水) 12:30 開場 13:00—17:50

平成 21 年 2 月 26 日(木) 9:00 開場 9:30—15:30

## 3. 研究大会参加予定者

	自治体関係者	教室関係者	合計
25日	101名	59名	160名
26日	81名	50名	131名

## 4. 会場：パナソニックセンター東京

東京都江東区有明 2 丁目 5 番 18 号

電話 03-3599-2600

交通 りんかい線「国際展示場駅」徒歩 2 分、ゆりかもめ「有明駅」徒歩 3 分

### (参考情報) 第一回放課後子ども教室推進表彰式

#### [背景]

文部科学省では、平成 19 年度から全国の市町村が実施主体となり、放課後や週末等の子どもたちの安全・安心な活動拠点(居場所)を設け、子どもたちに様々な活動を行う機会を提供する取組を「放課後子ども教室推進事業」として支援。そこで優れた活動を行っており、他の模範と認められる放課後子ども教室に対して、このたび文部科学省生涯学習政策局長より表彰状を授与することといたしました。表彰式は、「第一回放課後子ども教室全国研究大会」の冒頭で実施します。

#### [表彰要件]

「放課後子ども教室事業」の国庫補助金を受けている放課後子ども教室のうち、優れた取組をおこなっており、他の模範と認められる放課後子ども教室であり、平成 19 年度において 200 日以上実施、平成 20 年度において 200 日以上の実施を予定していること。但し、特段の理由がある場合は、開催日数が 200 日未満の場合でも推薦できる。

#### [表彰教室]

区分	自治体数	表彰教室数	平均開催日数 (H19 20 平均)
都道府県(47)	43	47	209.9
政令市(17)	6	15	269.0
中核市(39)	4	4	203.0
合計	53	66	222.9

## 5. 研究大会プログラム

1 日 目	13:00-14:10	表彰式	放課後子ども教室推進表彰式	ホール
	14:10-14:30	休憩		
	14:30-14:35	挨拶	研究大会主旨説明	ホール
	14:35-15:30	事例紹介	① <u>都市型事例</u> 大阪市 粉浜小学校取組事例 ② <u>地方型事例</u> 宮崎県 五ヶ瀬町風の子自然学校事例	ホール
	15:30-16:30	基調講演	「地域の教育力とは何か ～放課後子ども教室事業から考える～」 財団法人さわやか福祉財団理事長 弁護士 堀田 力 氏	ホール
	16:30-16:50	休憩		
	16:50-17:50	講義	「教育の可能性を広げるしくみづくり ～教育プラットフォームの あり方～」 NPOスクール・アドバイス・ネット ワーク 理事長 生重 幸恵 氏	ホール
	「地域とつながるプログラムが 子どもたちにもたらす価値」 上智大学総合人間科学部教育学科 教授 奈須 正裕 氏		3F 会議室	
	18:15-19:30	情報交換会		
2 日 目	9:30-12:30	分科会	テーマ①『人材確保について』	2Fブリッジ
			テーマ②『他事業との連携について』	ホール
			テーマ③『効果的なプログラムについて』	3F会議室
	12:30-13:30	休憩		
	13:30-14:30	分科会全体会	各分科会代表者より各分科会で問題提起された 内容、活動報告を行う	ホール
14:30-15:30	激励講演	「今、なぜ地域との連携が必要なのか ～公教育に求められるつなげる力～」 前・杉並区立和田中学校校長 大阪府知事特別顧問 藤原 和博 氏	ホール	

## ■文部科学省委託事業「放課後子ども教室全国研究大会」実施実績

□参加者数 2日間のべ 254名

	自治体関係者	教室関係者	合計
25日	69名	80名	149名
26日	61名	44名	105名

「放課後子ども教室全国研究大会」は、放課後子ども教室の全国的な普及、活動内容の充実、活性化のための情報提供の場として実施した。

本研究大会を実施するにあたっては、全国の実践傾向を理解し、参加者にとってより適切なテーマを選定すると同時に参加者の意識を高めるために、事前アンケートを配布・集計した。その結果、67の都道府県・政令市・中核市より申込があり、25日は160名、26日は131名、のべ約300名の参加予定となった。

実際の参加は25日が149名、26日が105名、のべ254名で、対申込出席率が約87%と高くなったのは、大会開催日までの意向アンケート等の取組みが功を奏したものと考えられる。

参加者の属性で見ると、25日は自治体関係者が約46%、教室関係者が約54%であったのに対し、26日は自治体関係者が約58%、教室関係者が約42%と、参加者比率が逆転した。これは、25日の表彰式には出席したものの、26日には出席しない教室関係者が多かったことが要因といえる。

## ■文部科学省委託事業「放課後子ども教室全国研究大会」実施成果

「放課後子ども教室」関係者が、本事業の意義を再認識することと全国での様々な事例や手法の入手により、日々の活動の充実・発展への一助となることを目標として次のプログラムで研究に取り組んだ。

- ①**現状理解**:平成19年度「放課後子どもプラン実施状況調査」による全国の実践傾向を理解する
- ②**事例理解**:事例紹介により、放課後子ども教室の展開例や事業運営手法を理解する
- ③**事業理解**:基調講演により、放課後子ども教室事業の意図と意義を理解する
- ④**情報収集**:テーマ別の講義により、課題に関する具体的解決の糸口を得る
- ⑤**課題解決**:分科会形式のワークショップにより、知恵の交流を図りながら個々の課題解決のための具体案を策定する
- ⑥**手法理解**:激励講演により、本事業での一連の取組をふりかえり、各自が現場で活用できる情報を得る

二日間の研究大会プログラム構成と内容については、アンケート調査結果から、行政関係者、事業関係者の異なる対象かつ、経験度合いの異なる参加者に対して一定の効果を得たといえる。中でも、大会の1日目（堀田力氏）と2日目（藤原和博氏）にそれぞれ設定した全参加者対象の2つの講演は、目論見通り“事業意義の再確認”と“活動方策の理解”の点から高い評価であり、その成果が確認できた。

同様に全体で共有した事例紹介についても、大都市型（大阪市）と地方型（宮崎県五ヶ瀬町）の2つの極端な事例からの学びが多く、多様な地域背景を持つ参加者にとっての参考事例として有効であったと言える。

また、行政向けと事業関係者向けに設定した2つの講義については、特に「地域とつながるプログラム」について、非常によかったとの評価が高かった。学校教育と社会教育の連携の必要性を事業実施者立場にたった、理論的かつ具体的な事例提示により、各自の状況に応じた新たな取組の視点を提供できたと考える。

ワークショップ型の3つの分科会では、全国での様々な事例や手法の入手により、日々の活動の充実・発展に役立てることをねらいとしていたが、参加者同士の情報交換や情報（課題）についての情報共有は行われたが、時間的な制限もあり、個々の課題解決のための具体案策定には至っていない。分散した評価結果からも当初の目標は達せられなかったと言わざるを得ない。

特に分科会②の「他事業との連携について」の教室関係者の評価は、‘非常によかった’から‘あまり良くなかった’までの4段階に各25%ずつの割合であることから、それぞれの分科会に、対象が混在していたことと参加者の経験度合いの違いによることや、ワークショップ型の活動スタイルへの馴染みのなさもその要因であると考えられる。

最後に本研究大会の成果は、本研究大会の一連のプログラムを通して、放課後子ども教室事業の本質的な意義理解や事業の充実・発展のためのノウハウを参加者が得たことである。このことは「放課後子ども教室事業」での活用にとどまらず、他の放課後対策事業をはじめとした学校・地域・家庭連携事業に応用されるべきものであり、参加者が主体的かつ、効果的なマネジメント視点を持つことで「放課後子ども教室事業」の発展に寄与するものと思われる。

分科会での課題解決のための具体案策定に課題は残ったものの、事例紹介、基調講演、激励公演といった参加者への情報提供は評価が高く、当初の目的であった“知恵の交流”を図ることができ、今後につながる研究大会となった。

## ■文部科学省委託事業「放課後子ども教室全国研究大会」プログラム概要

本研究大会は、放課後子ども教室の全国的な普及、活動内容の充実、活性化のために、

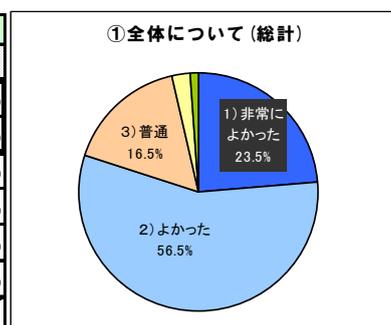
- 「事例紹介」「基調講演」「激励講演」による情報提供
- 参加者が直面する“現場での課題”について情報共有

という2つの柱で構成されており、それらの相乗効果によって効率よく知恵の交流が図られるのが、プログラムの企画意図であった。

そして知恵の交流によって得られた情報とともに、分科会形式のワークショップにより、参加者が個々の課題に対して具体的な解決策を策定し、大会後の取組に活かすことをねらいとした。

研究大会全体を通しては、肯定意見が80.0%で、おおむね満足いただけた。自由記述にも、「全国レベルで放課後子ども教室についての情報を入手できた」「自分に必要な知識や情報を得られた」(P70～参照)などの記述があり、参加者の満足感を裏づけている。また、来年度の実施を希望する意見や、参加者同士の交流に意義を見出す感想など、参加者の研究大会への期待がうかがえた。

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常に良かった	10	18.9%	8	28.6%	1	100.0%	1	33.3%	20	23.5%
2)よかった	30	56.6%	16	57.1%	0	0.0%	2	66.7%	48	56.5%
3)普通	11	20.8%	3	10.7%	0	0.0%	0	0.0%	14	16.5%
4)あまりよくなかった	2	3.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	2.4%
5)非常によくなかった	0	0.0%	1	3.6%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.2%
総計	53	100.0%	28	100.0%	1	100.0%	3	100.0%	85	100.0%
無記入、欠席	1		0		0		1		2	



ただ、この結果が示しているのは、今回の2本立ての構成のうち、「事例紹介」「基調講演」「激励講演」による情報提供への評価によるところが大きく、もうひとつの構成要素である「参加者が直面する“現場での課題”について情報共有」は、参加者のプログラムに対する期待も高く、「もっと話したい」という要望が課題として残ったことから、効果的であったと言い難い。

参加者同士の情報共有の場として用意された分科会では、その課題が顕著に現れた。分科会では、参加者がテーマによって分かれ、ワークショップ形式で課題解決に取り組み、テーマごとに課題解決の概論について確認し、その後の全体会でテーマ間の情報共有も達成できたが、当初の目的であった「参加者個々の課題解決」につながる情報共有には至らず、その原因としては、

- ・参加者の特性（立場、活動内容、年齢、研究大会への要望、参加意識など）が多様すぎた
- ・自己紹介および現状把握（課題の共有など）に時間をかけすぎた
- ・当日のグループ分のため、メンバー構成が適切でなかったことと、手法に不慣れな参加者も多く、グループディスカッションが深まらなかった。

これらの改善策として、プログラム編成の再検討は言うまでもないが、大会開催日までの取組を今回以上に充実させる必要があると思われる。具体的には、

- ・ 事前調査で、参加者の特性と課題を抽出する
  - ・ 課題や解決方法については、具体的な解決方法事例等を提示する
  - ・ 参加者特性や個別の課題を考慮して、グルーピングする（所属や経験等）
- といったことが考えられる。

今後の展開として、引き続き実践者間の知恵の交流を深めるためにも、下記の点から次年度以降の継続的な研究大会の開催が求められる。

- ・ 参加者は研究大会の開催参加に意義を感じており、参加者からの要望が高い
- ・ 情報提供、情報共有を行う場として有用である
- ・ 単発的な開催では、知の交流による課題解決手法のノウハウが定着しない

### 事例理解

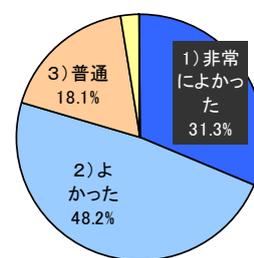
事例紹介により、放課後子ども教室の展開例や事業運営手法を理解する

事例紹介は、都市型の事例として大阪市の粉浜小学校の取組を、地方型として宮崎県の五ヶ瀬町風の子自然学校の取組を、それぞれ紹介した。いずれも、活動の詳細と具体的なプログラムを写真を提示しながら説明いただいたので、参加者にとってイメージしやすく、よい参考になったと思われる。

アンケート結果は、肯定意見が 79.5%で、都市型・地方型に分けた両事例の紹介は、参加者にとって身近で参考になったとの声も多く、それぞれの規模の教室の実情理解につながった（P73～参照）。

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常によかった	19	36.5%	6	22.2%	1	100.0%	0	0.0%	26	31.3%
2) よかった	22	42.3%	16	59.3%	0	0.0%	2	66.7%	40	48.2%
3) 普通	9	17.3%	5	18.5%	0	0.0%	1	33.3%	15	18.1%
4) あまりよくなかった	2	3.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	2.4%
5) 非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	52	100.0%	27	100.0%	1	100.0%	3	100.0%	83	100.0%
無記入、欠席	2		1		0		1		4	

②事例紹介について(総計)



## 事業理解

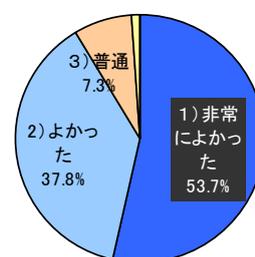
基調講演により、放課後子ども教室事業の意図と意義を理解する

基調講演は、財団法人さわやか福祉財団の理事長であり弁護士の堀田力氏に、「地域の教育力とは何か～放課後子ども教室事業から考える～」と題してご講演いただいた。ご自身のご経験を織り交ぜながら、昔と今を比較し、‘考える子どもの育成’の一翼を担う機能として放課後子ども教室事業が期待されるという内容であった。

アンケート結果は、肯定意見が91.5%と高く、具体的で分かりやすかった、放課後子ども教室の必要性を再認識できたという声から（P75～参照）、本事業の意義を理解し、取組意識を高めるという実施主旨に合っていたと判断できる。

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常によかった	24	47.1%	17	63.0%	0	0.0%	3	100.0%	44	53.7%
2) よかった	21	41.2%	9	33.3%	1	100.0%	0	0.0%	31	37.8%
3) 普通	5	9.8%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	6	7.3%
4) あまりよくなかった	1	2.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.2%
5) 非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	51	100.0%	27	100.0%	1	100.0%	3	100.0%	82	100.0%
無記入、欠席	3		1		0		1		5	

③基調講演について（総計）



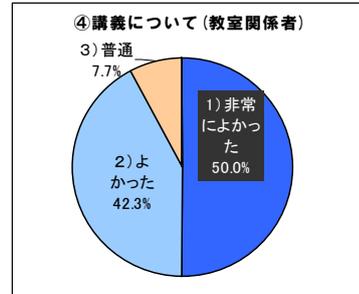
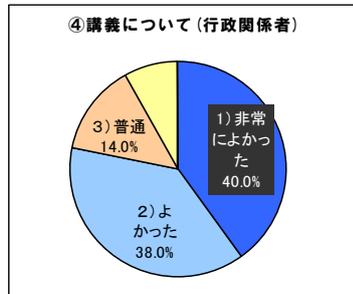
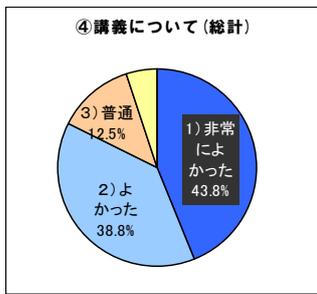
## 情報収集

テーマ別の講義により、課題に関する具体的解決の糸口を得る

講義は、2会場に分かれて実施した。1階ホールでは、現場関係者向けに、上智大学総合人間科学部教育学科 教授の奈須正裕氏に、「地域とつながるプログラムが子どもたちにもたらす価値」と題してご講義いただき、3階会議室では、行政関係者向けに、NPO スクール・アドバイス・ネットワーク 理事長の生重幸恵氏に、「教育の可能性を広げるしくみづくり～教育プラットフォームのあり方～」と題してご講義いただいた。両者とも、それぞれの立場からの見識とご経験をもとに、それぞれの対象者の課題に関する具体的解決のヒントとなる内容であった。

行政関係者の78.0%、現場関係者の92.3%が肯定的な評価をしており、‘悩んでいた考え方に整理をつけるいいヒントになった’といった感想からも、それぞれの立場のニーズに合ったテーマ設定、プログラムだったといえる。

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常によかった	20	40.0%	13	50.0%	0	0.0%	2	66.7%	35	43.8%
2) よかった	19	38.0%	11	42.3%	1	100.0%	0	0.0%	31	38.8%
3) 普通	7	14.0%	2	7.7%	0	0.0%	1	33.3%	10	12.5%
4) あまりよくなかった	4	8.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	4	5.0%
5) 非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	50	100.0%	26	100.0%	1	100.0%	3	100.0%	80	100.0%
無記入、欠席	4		2		0		1		7	

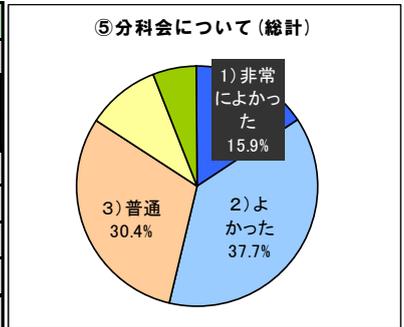


**課題解決** 分科会形式のワークショップにより、知恵の交流を図りながら個々の課題解決のための具体案を策定する

分科会は、3会場に分かれて実施した。会場ごとにテーマが異なり、1階ホールでは「他事業との連携について」、2階特設会場では「人材確保について」、3階会議室では「効果的なプログラムについて」が、それぞれ実施された。参加者に積極的に取り組んでいただくワークショップ形式で、知恵の交流を図りながら個々の課題解決のための具体策を策定するねらいで行われた。

肯定意見は 53.6%にとどまり、他のプログラムと比較しても低く、参加者を満足させられたとは言えない結果となった。

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常に良かった	7	16.7%	3	13.0%	0	0.0%	1	33.3%	11	15.9%
2) よかった	13	31.0%	11	47.8%	1	100.0%	1	33.3%	26	37.7%
3) 普通	14	33.3%	7	30.4%	0	0.0%	0	0.0%	21	30.4%
4) あまりよくなかった	6	14.3%	1	4.3%	0	0.0%	0	0.0%	7	10.1%
5) 非常によくなかった	2	4.8%	1	4.3%	0	0.0%	1	33.3%	4	5.8%
総計	42	100.0%	23	100.0%	1	100.0%	3	100.0%	69	100.0%
無記入、欠席	12		5		0		1		18	



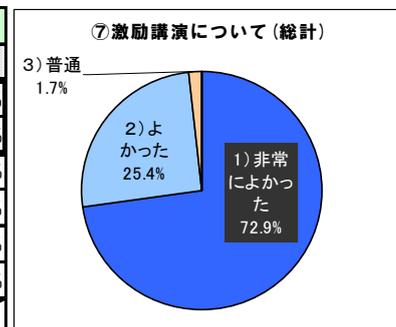
分科会全体会は、分科会ごとに、コーディネーターと参加者が協働で発表を行った。それによって参加者は、自分の参加していない分科会でどのような意見交換がなされたのかを知ることができた。参加者からは、時間を拡大しての内容の実実を求める声が聞かれ、分科会全体会による知の共有という目的は達成された。

**手法理解** 激励講演により、本事業での一連の取組をふりかえり、各自が現場で活用できる情報を得る

激励講演は、前・杉並区立和田中学校校長で大阪府知事特別顧問の藤原和博氏に、「今、なぜ地域との連携が必要なのか～公教育に求められるつなげる力～」と題してご講演いただいた。和田中学校での校長をはじめとするさまざまなご経験をもとに学校現場の現状と、自らが開発された[よのなか]科をご紹介いただき、多くの参加者にとって刺激的で、文字通り‘激励’の講演となった。

アンケート結果は、肯定意見が 98.3%と極めて高く、元気が出たという声が多数あり（P87～参照）、参加者がそれぞれに課題や解決策を持ち帰ろうとする中、本事業の意義や自らの経験を再確認し、研究大会終了後の活動意欲を高めるねらいが達成できた。

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常に良かった	26	74.3%	14	66.7%	1	100.0%	2	100.0%	43	72.9%
2) よかった	8	22.9%	7	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	15	25.4%
3) 普通	1	2.9%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.7%
4) あまりよくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5) 非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	35	100.0%	21	100.0%	1	100.0%	2	100.0%	59	100.0%
無記入、欠席	54		28		1		4		87	

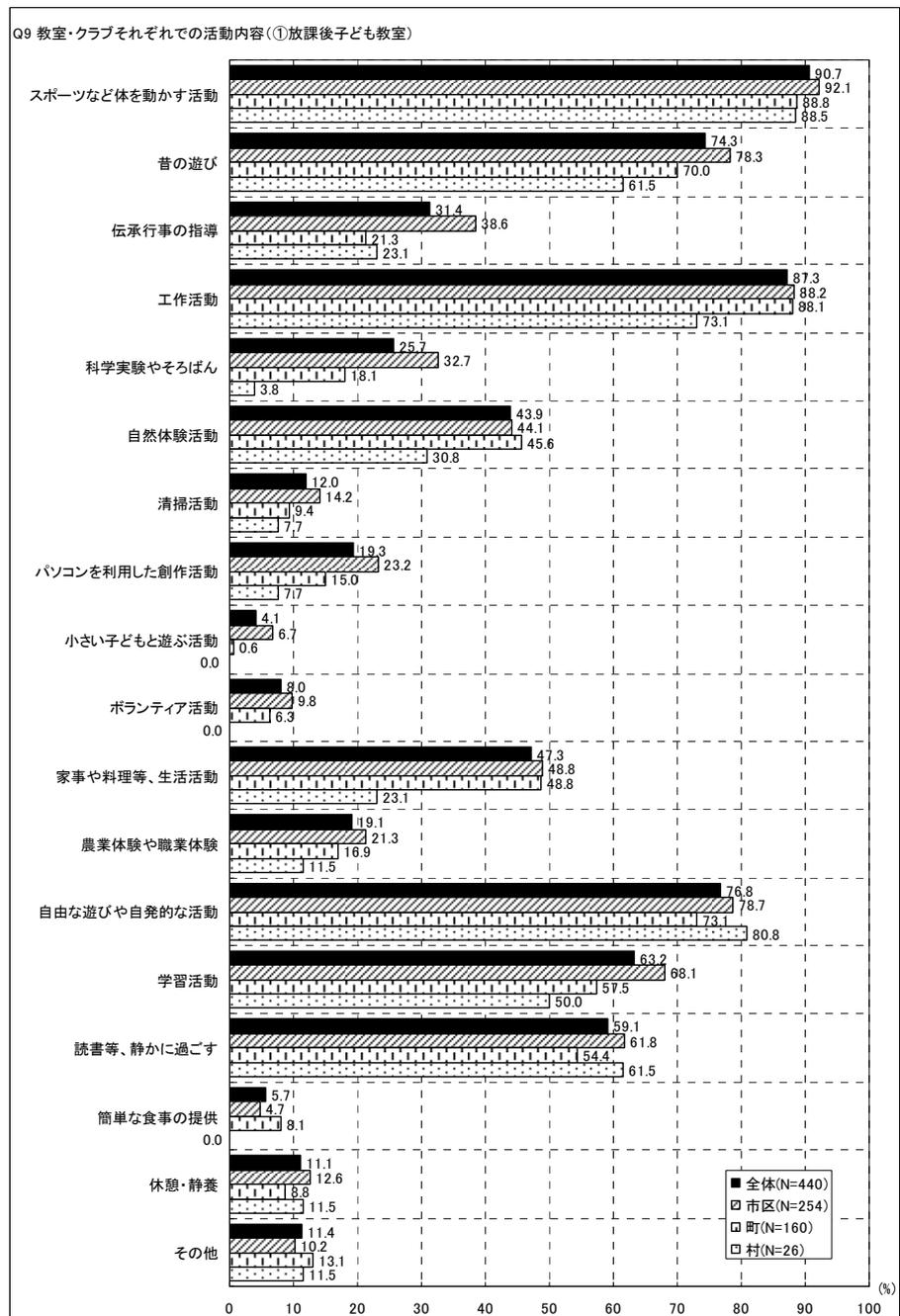


1. 放課後子ども教室での活動状況

- ◆ 政令指定都市などの都心部では、住居環境や親の就労環境等の状況から年間活動日数が300日を超える教室もみられる一方、地方都市では100日以下の活動日数の教室も少なくない。また地域によっては週1、2回の活動で年間30～50日の活動にとどまる教室もあり、全国での活動平均日数は約123日で、その実態は地域によりさまざまである。

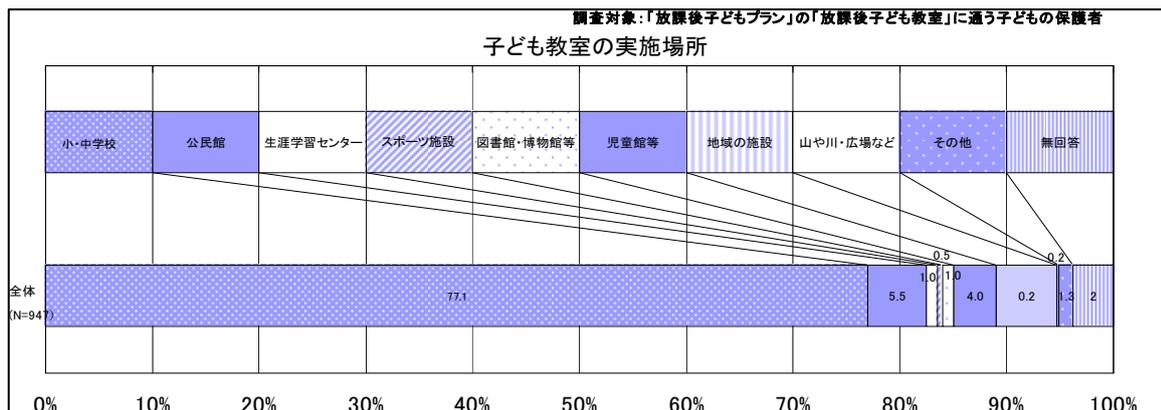
2. 放課後子ども教室での活動内容

- ◆ 子ども教室ではスポーツなど体を動かす活動(90.7%)や工作活動(87.3%)、自由な遊びや自発的な活動(76.8%)、昔の遊び(74.3%)などが活動の中心となっている。また、学習活動も63.2%と多くみられる。



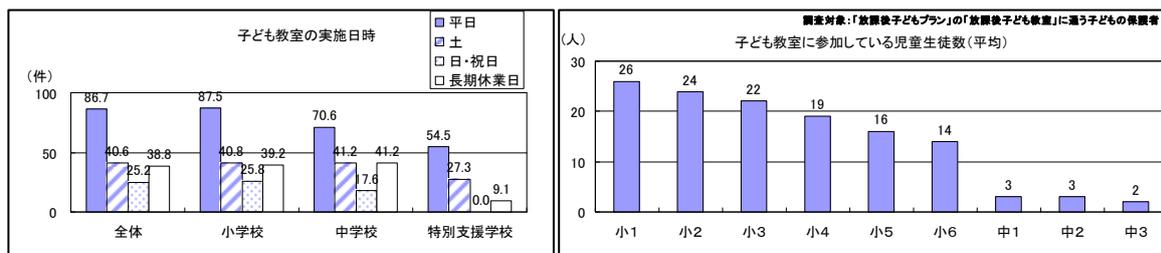
### 3. 「放課後子ども教室」の実施場所

- ◆ 子ども教室の実施場所は、8割近くが「小・中学校」となっている。



### 4. 実施日時と参加人数

- ◆ 子ども教室の実施率については、平日が 86.7%と高く日曜祝日は 25.2%となっているが、土曜日、長期休業日では 40%前後の割合となっている。
- ◆ 1学校平均の参加人数は、小学校低学年は 24 人前後、高学年は 15 人前後であり、中学生の参加はほとんど見られない。



### 5. 配置されているコーディネーター等の実人数

- ◆ 回答団体において配置されているコーディネーター等の実人数をみると、コーディネーターは回答団体全体で 1,361 人配置されており、1 団体平均約 2 名となっている。
- ◆ 安全管理員は約 14,500 人、学習アドバイザーは約 5,000 人が配置されており、子ども教室としては約 2 万人の人材が回答団体において確保・配置されていることが分かる。なお 1 団体平均でみると、安全管理員は約 20 名、学習アドバイザーは約 7 名である。
- ◆ なお、ボランティアについてみると、1 団体平均約 10 人のボランティアの協力がみられる。

配置されているコーディネーターや指導者等の実人数と1団体あたり平均配置数(単位:人)

N=781	コーディネーター	安全管理員	学習アドバイザー	ボランティア	
				うち教室	うちクラブ
実人数計	1361	14456	5179	7437	3215
1団体平均	2	19	7	10	4

平成 19 年度「総合的な放課後対策推進のための調査研究」

「放課後子どもプラン実施状況調査」より

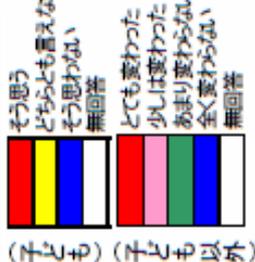
# 放課後子どもプランの推進(放課後子ども教室推進事業)

(20年度予算額 7,765百万円)  
 21年度予算額(委託事業分) 127百万円  
 21年度予算額(補助事業分) 14,261百万円の内数

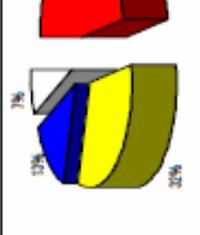
○学校の余裕教室や家庭等を活用し、地域の大人の協力を得て、子どもたちの安全で安心な活動拠点(居場所)を整備  
 ○放課後や週末等に、子どもたちに学習活動やスポーツ・文化芸術活動、地域住民との交流活動等を実施

<p>都道府県 ＜推進委員会＞</p>  <p>○域内の総合的な放課後 対策事業の在り方検討 ○研修の実施</p>	<p>市町村 ＜運営委員会＞</p>  <p>○教室の実施 ○活動内容、運営方法検討</p>	<p>コーディネーター (総合調整)</p>  <p>安全管理員 学習アドバイザー</p> 	<p>活動メニュー一例</p> <p>体験：野球、茶道、書道、伝統芸能 など                  交流：地域住民との異世代交流、異学年交流 など                  学び：宿題、補習、英会話、科学実験 など                  その他：昔遊び、地域行事への参加 など</p>	<p>補助率</p> <p>国 1/3                  都道府県 1/3                  市町村 1/3</p>
--	---	--	--	--

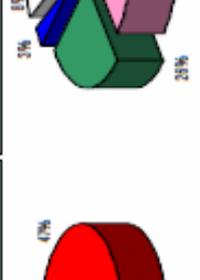
## 本事業の効果



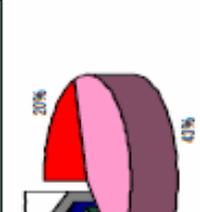
(子ども)  
 地域の大人の人と挨拶をしたり、話をしたりするようになった



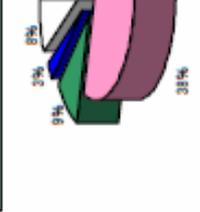
(子どもの保護者)  
 子どもが通う学年の友達とよく遊ぶようになった



(コーディネーター)  
 子どもの居場所づくりに関する各地の取組に対して、意識や関心が高くなった



(安全管理員、学習アドバイザー)  
 地域の子どもにも対する意識や関心が高くなった

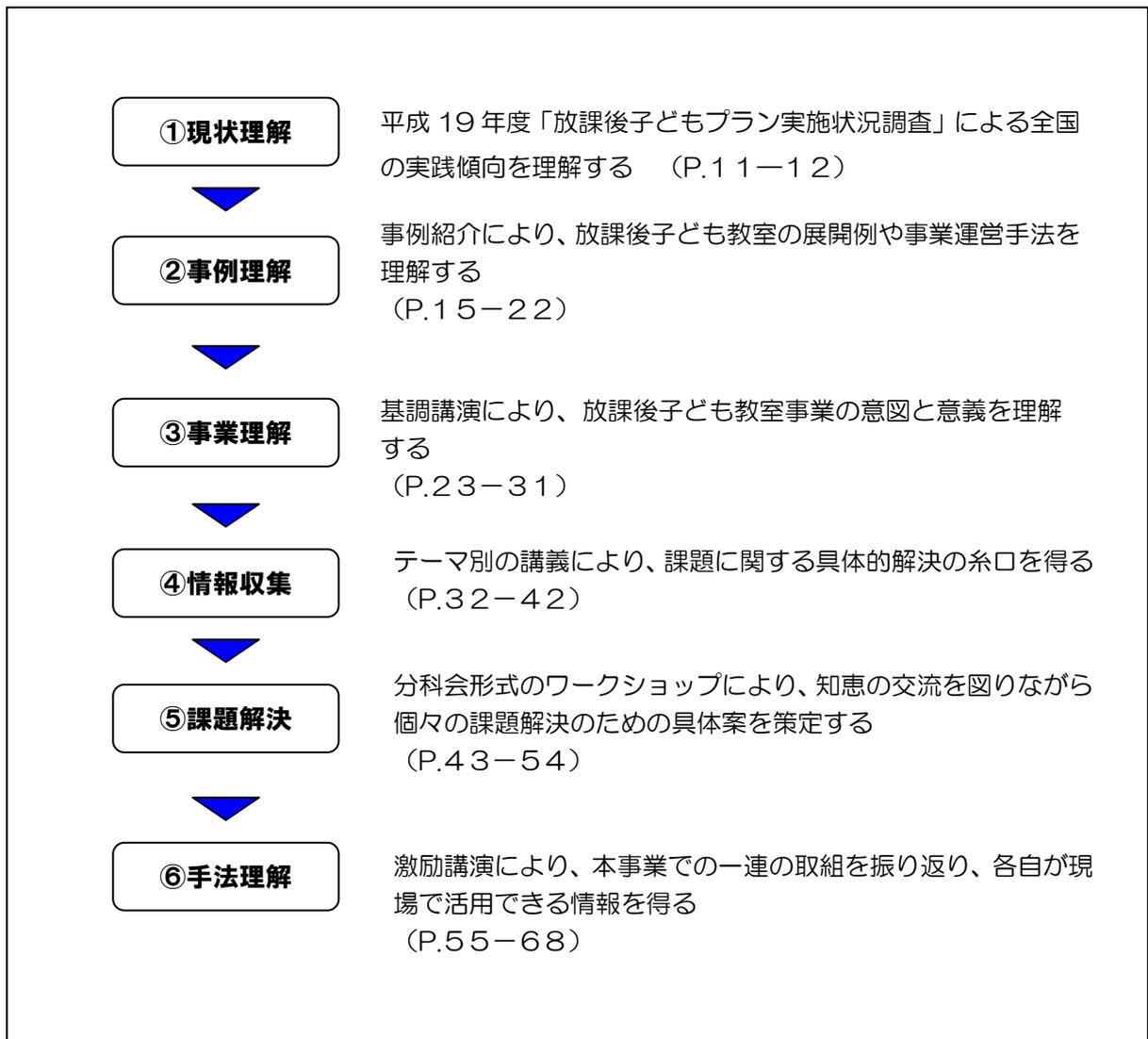


## 平成21年度予算額の主な内容

推進委員会の設置、放課後子どもプラン指導者研修 → 全都道府県・指定都市・中核市分	「運営委員会」の設置 → 全市町村分
実施箇所数 → 1万5千箇所分	安全管理員、学習アドバイザーの配置 → 1万5千箇所分
コーディネーターの配置 → 全小学校区分	開設備品費 → 1千箇所分
放課後子どもプラン推進アドバイザー → 300市町村分(新規)	民間団体を活用した放課後対策モデル事業 → 6箇所分(新規)

本研究大会は、放課後子ども教室の全国的な普及、活動内容の充実、活性化のための情報提供を目的として「基調講演」「事例紹介」「激励講演」と、参加者である、都道府県・市町村教育委員会事業関係者、コーディネーターなどの事業関係者、地域ボランティアの方々が直面する“現場での課題”について情報共有しながら、具体的な課題解決策を探るために「分科会」形式での課題解決型のワークショップで構成されています。

全国の放課後子ども教室関係者の経験と知恵の交流を図ることを最大の目標に、ワークブック（大会当日の配布資料）をガイドツールとして、下記プロセスでプログラムを展開します。



平成19年度の調査結果から、全国で運営される放課後子ども教室は以下のA～Jの10タイプに分類されており、今回の本研究大会の事例発表は両極にあるともいえる二つの事例を取り上げています。

<b>A 都市型</b>	<b>大都市</b>	<b>250人程度参加</b>	<b>250日以上開催</b>	<b>小学校拠点</b>
--------------	------------	-----------------	-----------------	--------------

<b>B 都市型</b>	<b>中都市</b>	<b>200人程度参加</b>	<b>150日程度開催</b>	<b>小学校拠点</b>
--------------	------------	-----------------	-----------------	--------------

<b>C 都市型</b>	<b>中都市</b>	<b>100人程度参加</b>	<b>200日以上開催</b>	<b>小学校拠点</b>
--------------	------------	-----------------	-----------------	--------------

<b>D 都市型</b>	<b>小都市</b>	<b>100人程度参加</b>	<b>250日以上開催</b>	<b>小学校拠点</b>
--------------	------------	-----------------	-----------------	--------------

<b>E 都市型</b>	<b>小都市</b>	<b>50人程度参加</b>	<b>150日程度開催</b>	<b>小学校拠点</b>
--------------	------------	----------------	-----------------	--------------

<b>F 地方型</b>	<b>中都市</b>	<b>100人程度参加</b>	<b>200日以上開催</b>	<b>小学校拠点</b>
--------------	------------	-----------------	-----------------	--------------

<b>G 地方型</b>	<b>小都市</b>	<b>50人程度参加</b>	<b>100日以上開催</b>	<b>小学校拠点</b>
--------------	------------	----------------	-----------------	--------------

<b>H 地方型</b>	<b>中町村</b>	<b>100人程度参加</b>	<b>200日以上開催</b>	<b>小学校拠点</b>
--------------	------------	-----------------	-----------------	--------------

<b>I 地方型</b>	<b>中町村</b>	<b>50人程度参加</b>	<b>100日程度開催</b>	<b>小学校拠点</b>
--------------	------------	----------------	-----------------	--------------

<b>J 地方型</b>	<b>小町村</b>	<b>50人程度参加</b>	<b>200日程度開催</b>	<b>社教施設拠点</b>
--------------	------------	----------------	-----------------	---------------

#### Aタイプの大阪府大阪市

政令指定都市 人口 265万3981人  
小学校数 299校

大阪市全体の本事業への取組みと今回の放課後子ども教室推進表彰教室で平成4年から独自の取組みをスタートさせてきた、大阪市立粉浜小学校の事例

#### Jタイプの宮崎県五ヶ瀬町

過疎の町 人口 4,498人  
小学校数 4校

遠方からの通学児童が多いことから、登下校時の送迎や安全管理、下校後の児童の交流機会設定等のニーズに応じて平成17年の放課後子ども教室事業を受けてスタート。社会教育施設を活用したNPOとの連携による、町ぐるみでの子ども教室事業への取組事例

# 都市型事例：大阪市「児童いきいき放課後事業」

事例発表者：大阪市子ども青少年局企画部 放課後事業

担当課長代理 青柳 毅 氏



放課後等における全ての児童の健全育成を目的として平成4年度から事業を開始し、平成12年度から市内の全市立小学校で実施している。

## 1. 事業主体と実施組織

- ・大阪市より、(財)大阪市教育振興公社に運營業務を委託し実施
- ・各「いきいき」活動には「実行委員会」を設け、年間の活動計画等を決定  
＜構成＞・学校を中心とする地域の諸団体より推薦を受けたもの(PTA 会長等)  
・学校代表(学校長) ・「いきいき」活動指導員

## 2. 実施場所

大阪市内の全市立小学校 298箇所(297校+1分校)

## 3. 参加対象となる児童

校区内に居住する小学生(1年～6年)で参加を希望する児童(登録制)

## 4. 活動時間

月曜日～金曜日 : 授業終了後～午後6時

短縮授業日 : 午後1時～午後6時

土曜日、長期休業日 : 午前9時～午後6時

※活動休止日 : 日曜日、国民の祝日に関する法律に規定する休日、  
年末年始(12月29日～1月3日) その他

## 5. 指導員

### (1) 嘱託指導員(コーディネーター)

元教員または元保育士の経験を持ち、各「いきいき」活動の責任者として、活動全般の指導に携わる。

### (2) 地域指導員(安全管理員)

地域で子育てを終えられた方や、教員志望の学生などから構成されており、嘱託指導員のもとで、こどもたちの遊び方のサポート、安全管理、障害のある児童の支援などに携わる。

#### ・各「いきいき」活動における指導体制

児童の参加状況に応じ、2名もしくは2名以上で指導を行う。

(うち1名は嘱託指導員が必ず携わる)

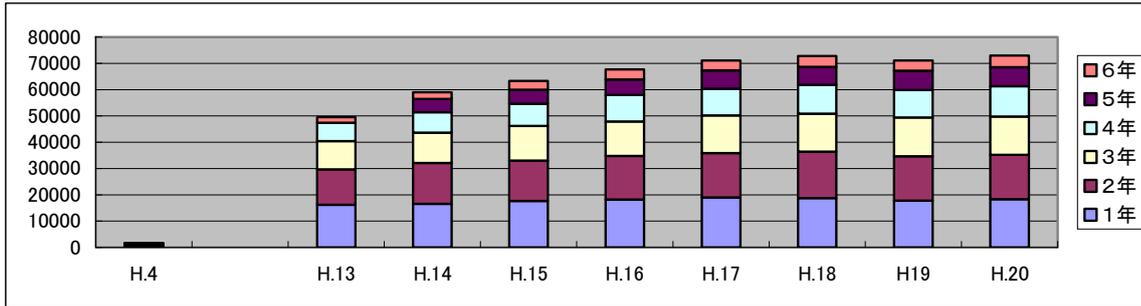
## 6. 活動場所

小学校内の余裕教室を「いきいき」活動室として利用するとともに、運動場、体育館(講堂)などを活用する。

## 7. 主な活動内容

- スポーツ的なもの : 各種ボール遊び、マット遊び、縄飛び、一輪車、ダンスなど
- 文化的なもの : 囲碁、将棋、オセロ、紙芝居、人形劇、積み木、読書、作文など
- 伝承遊び : けん玉、ビー玉、ケンパ、竹馬、折り紙、竹細工など
- 施設見学(長期休業日等を活用した校外活動): 博物館、美術館などの見学

## ■ 児童の登録状況の推移



## ■ 魅力ある事業の実践

実施している活動	特別プログラムの実施	いきいきパートナーとの交流活動の実施	児童作品展への出品	子ども体験プログラムへの参加	将棋教室への参加
実施校数	102	169	125	134	28
いきいき総数	298	298	298	298	298

特別プログラムの実施



いきいき児童作品展への出品



将棋教室への参加



いきいきパートナーとの交流



子ども体験プログラムへの参加

## ■ いきいきの現況

H.20.11月現在

(1)いきいき活動実施箇所数	298箇所
(2)大阪市在住児童数	123,765人
(3)いきいき活動登録児童数	74,666人
(4)登録率 (3)/(2)	59%
(5)1校あたり1日の平均参加児童数	69.5人



指導員研修大会における平松市長の子育て対談

# 大阪市 粉浜小学校いきいき活動 放課後子ども教室

## 1. 粉浜「いきいき」の概要

- ・平成4年度に活動を開始し、現在17年目。嘱託指導員2名、地域指導員19名が登録している。
- ・「いきいき」実行委員会は、PTA会長、地域のリーダーによって構成されている。青少年の健全育成に力を入れている地域との協力・連携を図っている。
- ・20年度の登録児童数は257名で、平均して毎日100名を超える児童の参加がある。学校施設に余裕がない中、校舎4階の1教室を活動室として使用している。限られたスペースを活用するため、円滑な集団活動に重点を置いている。
- ・新年度に向けた保護者への参加登録説明に際しては、説明会を平日の夜間と土曜日の2回実施し、活動内容を十分理解していただいたうえで申し込みを受け付けている。また、保護者アンケートを毎年12月に行い、活動に生かしている。

## 2. 粉浜「いきいき」の特色ある活動

- ・午後3時過ぎより、外遊びの前に全員が集まり、集団での取り組み（集団活動）を行っている。
- ・地域で行われる催しに、粉浜「いきいき」として参加し、交流を図っている。

### (1) 集団活動のねらい

- ・集団の意識を高める。マナーを養い、ルール遵守の意識を高める。特に、人の話を聞く態度を育成する。
- ・みんなで同じことに協力して取り組み、また新しいことに挑戦することで、知識や能力を高める。
- ・全員が集まる機会であり、連絡事項の伝達や諸注意を徹底して指導する。

#### ○ 集団活動例

- 事例1 「百人一首」・・・週替わりで一首を選び、詠む事から始めて暗誦にも挑戦している。手作りの大きな百人一首を数セット作成し活用している。
- 事例2 「歌」・・・地域の音楽交流で寄贈された電子ピアノを活用し、月替わりで曲を決め合唱に取り組んでいる。音楽を得意とする地域指導員が指導にあたる。
- 事例3 「本読み」・・・皆の前で児童が昔話や童話を音読する。進行はリーダー役の児童が務め、感想を児童に尋ねることで、読解力も育つ。11年間続く取り組みとなっており、地域、学校等から寄贈された約1,000冊の図書を活用している。
- 事例4 「紙芝居・お話」・・・いきいきパートナー（地域の高齢者ボランティア）により、週1回、紙芝居やお話の会を開いている。

### 地域との連携について（20年度の取り組み事例）

- ・5月18日（日）・・・地域の「粉浜まつり」の催しのコーナーで、「手作り百人一首」を出展し、一般の参加者と一緒に楽しんだ。また、「コマ回し」「けん玉」の演技を披露した。この催しには4年連続で参加している。



手作り百人一首を使って

- ・ 9月13日（土）・・・粉浜地域の「敬老の集い」に参加し、合唱を行った。平素から、地域の「こどもを守るパトロール隊」に老人会の方々が協力をしてくださっており、感謝のメッセージも発信した。
- ・ 12月25日（木）・・・地域の音楽サークルと連携し「クリスマス交流会」を実施した。



## (2) 集団活動の成果

- ・ 集団の意識が向上し、話を聴く態度が良くなっている。マナーも向上している様子が見え、ルールを守ろうとする意識の高まりと実践への意欲がみられる。
- ・ 上記の地域と連携した活動の際にも、マナーやルールを意識しながらスムーズに進行できるようになっており、地域から評価を得ることで、こどもたちの更なる意欲向上に繋がっている。

## 3. 今後について

指導員間での協力体制（日々の情報交換など）をより強固なものにしながら、地域と一体となり、こどもたちの健全な育成を図ることが大切である。



○毎月発行する「いきいきだより」は、「いきいき」と家庭をつなぐ重要なツール。活動の報告やお知らせなどを行う。

10月 No. 1  
初茨小学校いきいきだより  
平成20年10月

### 10月のいきいき活動

日	月	火	水	木	金	土
			①	②	③	4
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30	31	

10月11日(土) 土曜日のいきいき活動

10月13日(月) 体育の日(祝日)

10月22日(水) 学習参観、懇談会 時間外

あればいそいそ活動も参観してください

**地域 敬老の集い**

**いきいき活動のうたの出演**

**すぐ上手にうたえました!!**

9月13日(土)に粉浜地域 敬老の集い  
初茨小学校講堂にて午前9時30分  
から行われました。いきいき活動は昨年  
から、うたの出演をいたします。平素、地域で  
「子どもを守る安全パトロール隊」に協力  
をされており、老人会の方とも連携してお  
世話になつていので、感謝の気持ちを込  
めて、

10月11日(土) 敬老の集いに参加して、合唱を行いました。50人の希望をみとりました。次回のいきいき活動で8月の発表をしました。よく練習をしてください。当日は43人の子供も参加して、新入前に地域指導員の池田さん、次の方、あいつとしました。初茨小学校いきいき活動の意見が参加しています。故にあつてもなく、今日を迎えました。これもパトロール隊のおかげだと思っています。

今日の合唱では事前にあった子ども達も出演しました。夏休みの活動中も毎日、練習、とても上手に歌えるようになります。

- ・ 気球にのってどこまでも
- ・ 崖の上のポニョ
- ・ あしたははれる
- ・ 3曲、感謝の気持ちを込めて

# 地方型事例紹介：宮崎県五ヶ瀬町「放課後子ども教室推進事業」

事例発表者：NPO法人 五ヶ瀬自然学校

理事長 杉田 英治 氏



放課後等における、子どもたちの安全・安心な活動拠点を設け、地域の方々の参画を得て、子どもたちが心豊かで健やかに育まれる環境づくりを目的として、平成19年度から五ヶ瀬風の子自然学校において事業を開始した。平成20年度から新たに2校において事業を開始し、現在、3校の小学校で事業を実施している。

五ヶ瀬風の子自然学校においては、文部科学省による地域子ども教室を平成17年度から実施しており、本町における放課後子ども教室推進事業の実施におけるアドバイザーとして多大な貢献をいただいている。

## 1. 事業主体と実施組織

- ・事業主体である五ヶ瀬町より、各団体に運營業務を委託し実施

《委託団体》 NPO法人 五ヶ瀬自然学校（五ヶ瀬風の子自然学校）

任意団体 学び坂わくわく教室

任意団体 夕日の里にこここ教室

- ・教育委員会を事務局とし、放課後子どもプラン運営委員会を設置。事業計画の策定、安全管理、広報活動、人材確保、事業の検証等を行っている。

<構成> 教育委員会、住民福祉課、学校長、社会福祉協議会、コーディネーター等

## 2. 実施場所

五ヶ瀬町内の3小学校で実施。1校は未実施。

## 3. 参加対象となる児童

校区内に居住する小学生（1年～6年）で参加を希望する児童（登録制）

## 4. 活動時間

月曜日～金曜日 : 授業終了後～午後6時

長期休業日 : 午前9時～午後1時

活動休止日 : 土・日曜日、国民の祝日に関する法律に規定する休日、  
年末年始、その他

※各学校で土・日の実施有り

## 5. 指導員

### (1) コーディネーター

各学校の責任者として、活動全般の指導に携わる。

### (2) 安全管理員・学習アドバイザー

コーディネーターのもとで学習指導、子どもたちの遊び方のサポート、安全管理などに携わる。

#### ・各指導体制

児童の参加状況に応じ、3名以上で指導を行う。

## 6. 活動場所

五ヶ瀬風の子自然学校：元役場鞍岡支所、元鞍岡小学校跡地、  
近隣の農園など

学び坂わくわく教室：三ヶ所小学校

夕日の里にこここ教室：上組小学校



## 7. 主な活動内容

- スポーツ的なもの：バドミントン、サッカー、野球、カヌー、スキー
- 文化的なもの：英語教室、工作教室、木工教室、パソコン教室、  
絵画教室
- 伝承遊び：昔遊び全般（コマ、ベーゴマ、けん玉、竹馬など）
- その他：農業体験、自然体験



## 8. 児童の登録状況の推移

学校（教室）名	H19	H20
五ヶ瀬風の子自然学校	50	59
学び坂わくわく教室	—	65
夕日の里にこここ教室	—	53



## 9. 実施している主な活動やプログラム

宿題 → 戸外遊びもしくは行事

※各学校ともほとんどがこのパターン

五ヶ瀬自然学校は4年目で、様々な取り組みを行っている。

他の2校は1年目という事もあり、見守りが主となっている。



## 10. 事業全体の現状

- ・実施箇所数：3箇所
- ・五ヶ瀬町在住児童数：290人（平成21年2月現在）
- ・登録児童数：177人
- ・登録率：61%（未実施校を除いた場合：73%）
- ・1校あたりの1日平均参加児童数：26人（H19五ヶ瀬風の子自然学校）

# 宮崎県五ヶ瀬町 五ヶ瀬風の子自然学校

## 1. 事業の概要と目的

子どもが成長して行く上で必要な学習をいろいろ考え、地域の皆さんの力をお借りしながら実践して行きます。放課後の子ども達の安全を地域の大人が見守る。異年齢で学び遊ぶ事で思いやりの心を育む。子ども達のたくましく生きる力を育む。

## 2. 運営について

主な活動場所	元五ヶ瀬町役場鞍岡支所	平均参加人数	45人(登録者59人)
開設時間等	毎週 月～金(土・日開催有体験により)年(約 270 )回 午後2時～午後6時	対象学年	小学1年生～6年生
コーディネーター	活動内容 予定表・ブログの発行 指導者への連絡・指導 ( 1 )人		
安全管理員	活動内容 下校見守り活動・開催中の安全管理・利用者名簿管理 ( 3 )人		
学習アドバイザー	活動内容 宿題指導・挨拶・姿勢・生活指導(靴・手洗いなど) 体験学習の指導 ( 4 )人		

## 3. 活動紹介(特色等)

宿題教室、英語教室、工作教室、団体遊び、昔遊び、自然体験、パソコン教室、農業体験、交通安全教室、木工教室、カヌー教室、スキー教室

## 4. 参加者・保護者の感想・意見等

宿題を行えるので助かる。  
テレビを見る時間が減った。  
みんなと遊ぶので、夕食をしっかり食べて、よく寝るようになった。  
どうしても夕方まで子どもを見る家族がいないので、とても助かっている。

## 5. 事業全体の成果と課題

全学年一緒にできる遊びを子ども達で工夫してくれる。  
大人よりも子どものほうが順応して遊びを選択して楽しんでいる。  
参加児童の親およびおじいちゃんおばあちゃんを中心に多数の方にお手伝いをお願いできた。  
指導員が子どもを見ていられるところに配置する。  
昨年より参加人数が増している為スタッフの確保ができないか?(ボランティアなど)



元々の勉強部屋に入りきらず、ロッカーを机に代用して勉強している様子



高学年のお兄ちゃんが低学年の子どもにコマまわしをおしえている様子

## ～地域の教育力とは何か～

## 放課後子ども教室事業から考える

さわやか福祉財団理事長・弁護士

堀田 力 氏

現、さわやか福祉財団理事長・弁護士。高齢社会NGO連携協議会(高連協)代表、民間法制・税制調査会座長、社会保障審議会委員、中央教育審議会委員、認知症になっても安心して暮らせる町づくり100人会議発起人代表、東京の地域ケアを推進する会議委員長、日本プロサッカーリーグ裁定委員会委員長ほか。その他、教育課程審議会委員、医道審議会委員、中央社会福祉審議会委員、国民生活審議会委員、年齢にかかわらず働ける社会に関する有識者会議委員、神奈川県ボランティア活動推進基金審査会会長、高齢者介護研究会座長、政府税制調査会委員、東京都社会福祉協議会会長、子どもの居場所づくり推進委員会委員ほかを歴任。

さわやか福祉財団で平成20年度「放課後活動支援モデル事業」(放課後子ども教室推進事業)を受託。



## 略 歴 (抜粋)

昭和	9年	京都府生。33年 京大法学部卒業。
	40年	大阪地検検事(41年4月～特捜部入り、大阪タクシー汚職事件摘発)
	42年	法務省刑事局付検事(財政経済事件・公害事件担当)
	47年	在アメリカ合衆国日本国大使館一等書記官(ウォーターゲート事件フォロー)
	51年	東京地検特捜部検事(ロッキード事件担当)
	59年	法務大臣官房人事課長(司法改革に着手)
	63年	甲府地検検事正
平成	2年	法務大臣官房長
	3年	退職、弁護士登録、さわやか法律事務所及びさわやか福祉推進センター(7年4月さわやか福祉財団となる)開設

## 著 書 (抜粋)

「否認」「壁を破って進め」「少年魂」(講談社文庫)、「おごるな上司！」(日経ビジネス人文庫)、「心の復活」(PHP研究所)、「生きがい大国」(日本経済新聞社)、「心は上天気！」(三笠書房)、「中年よ、大志を抱け！」(PHP文庫)、「『人間力』の育て方」(集英社新書)「挑戦！」(東京新聞出版局)

【講演要約】

子どもたちが社会人になる 20 年、30 年先を見据えた視点での目標設定が必要であるという観点から、子どもの教育が抱えている課題は何か、それらの原因は何か、そしてその対策と放課後子ども教室事業をどのように関連づけて考えるかについてお話いただく。

数ある問題の中から、1 番目に最も基本的な問題として、‘生きる力の弱さ’を提示。かつては‘生きる力’という言葉はなかったが、みんなが持っていた。持っていないと生きられない時代であった。それが昨今では‘自分のことが嫌い’という子どもが多く、それは少年犯罪の変化にも現われている。過去の犯罪は、自己の欲求が強すぎるために犯した犯罪であることから、ある期間を経て世の中のことや生き方が分かるとそこで目覚めたが、近年の犯罪は、自己の欲求や意思が希薄で無機質であるとの示唆。

2 番目に大きな問題として、‘自分で自分の人生をつくることへの主体性の欠落’を提示。社会の変化に応じて自分で問題を発見し解決する能力が必要とされているにも関わらず、自分で考える力がない指示待ち人間が多い。1970 年代までの経済成長後、特に企業から人材不足の声があがっていることの事例を挙げ、‘それらの原因は少子化である’と持論を展開。かつて人の死は比較的身近に起こることであり、それによって否応なしに‘命の尊さ’を体得することができ、兄弟同士や地域の人間関係を保って普段の生活をする中で、‘生きる力’が身についていた。

少子化が進む中、意識的に子どもたちが仲間同士で遊ぶ環境をつくらなかったことがその大きな要因で、それは地域社会と教育を結びつけることに取り組まなかった大人の教育の失敗であると指摘。

少子化によって失われた教育環境をもう一度取り戻して、人間としての生きる力、幸せになる力をつけていくために最も必要なことは、子どもたちの自主性を尊重する環境をつくること。そのひとつの手法が‘縦割り’であり、それを実現しているのが放課後子ども教室である。大人が仕切らず、子どもが本来持っている‘自分たちで育つ力’を育む大切さを親たちに伝えながら、本事業がどんどん広がり大きな成果を上げることを願い、信じているとの力強いメッセージ。

## 【講演全文】

地域の教育力とは何かという、随分上段に構えたテーマを頂いておりますけれども、改めて、地域の放課後子ども教室の意味と、どういふふうに展開することが教育に最も適しているかということとを皆さんと一緒に考えて参りたいと思います。

話は非常に大きくなりますが、やっぱり子育て、あるいは子どもの教育というのは、今の五ヶ瀬の杉田さんの最後のほうの発言にもありましたけれども、20年先、30年先、子どもたちが社会人になったときに、本当に幸せに生きる社会人になっているか、そして社会に幸せをもたらす社会人になっているか、そういう先の目標を見て考えなきゃいけないだろうと思います。

それで、そういう観点で、子どもの教育が抱えております課題は何か、なぜそういう問題が起こっておるのか、それに対する対策は何か、その対策の中でこの放課後子ども教室をどういふふうに考えればいいのか、そういった流れで話を進めさせていただきます。

まず教育の課題は何かということでありまして、これはもう、安倍内閣のときからいろいろと課題が指摘されて、指導要領の改正という動きにまでつながっております。とらえ方を見て感じますのは、それが、大体大学の先生方、教授方のレベルで見た課題というのがかなり前面に出てきてしまっておる。視点が、いい大学生になってもらうには、小学あるいは中学、高校でどういふふうにして教育をやってきてもらうかと、そういう視点がかなり色濃く出ておるように思います。私はそれは違うと考えています。いい大学生になることが教育の目的ではありません。大学生は社会人になるための一つの過程に過ぎないわけでありまして、社会人としてどれだけ生きる力をもち、自分が幸せに、また、社会にも幸せをもたらすか、そういう力をもつ社会人になれるか、育てるか、これが基本の視点だろうというふうに思います。

そういう視点で、社会人としての育ち方を見てみますと、いろいろと問題はありますが、大きく2つ、一番基本的な問題は、やはり生きる力が弱い。社会に出たときに、自分で頑張ってこの道を開いていこうと、自分はどういうことをしようと、そういう、これは体の底から湧いてくる、そういう力をもっている青年たちが少ない。何となくおとなしく指示を待っておるといふ、そういう子どもたち、青年たちが増えてきておると。これはもう20年前辺りから段々顕著になってきておる現象であります。

一番典型的にそれが現れておりますのは、少年犯罪、それから青年犯罪の対応だろうというふうに思います。少年犯罪自体は、数からいけば昔のほうが多かった。ここ20年、10年、あるいはここ数年の間に増えているということはありません。ありませんけれども、その中身の質が随分変わってきています。昔の少年犯罪は非常にぎらぎらとしておりまして、この金が欲しい、これから遊びに行きたい、これで何か買って食べたい、その欲求が強すぎるために道を踏み外して犯してしまった犯罪、大体そういう犯罪が多くて、ですから、捕まえて調べてもガンガン刃向かってくる。非常に突っ張っておる。しかし、ある期間を経て、世の中のこと、生き方が分かると、ストーンと落ちて、ガラリと変わって、素晴らしく、目覚める、むしろ犯罪を犯してない子どもたちよりも強い、しっかりした倫理観をもった子に変わります。

基本的に、生きる力なんていう言葉は当時はありませんでした。こういうことが強調されるようになったのは、ここ20年ほどのことです。

生きる力なんて、もってなきゃ生きてられなかった、そういう時代なんですから、みんなが生きる力をもってぎらぎらしていました。もちろん中にはそういう少年犯罪もありますけれども、このところ年次をおって増えてきているのが、非常に無機質な、無差別殺人を起こしても、別に、どうでもいいというケースです。親殺し、これも昔からありました。昔の親殺しは親が悪かったんです。殺されてもしようがない親であった。そんなことを元検事が言うのはまずいんですけど、それはこの子が生きていくためには殺すしかなかったんだということが分かる、できれば執行猶予を付けたいと思うようなそういう事情があった。では最近の親殺しはというと、親は熱心ですね。この子にしっかりと資格を付けたい、いい大学に入れたい、いい学校に進ませたい、それで一生懸命やっておる。それで、子どももそれにこたえるべく一生懸命勉強しておる。それがあるとき、我慢できる限度、もう我慢に我慢を重ねて、よくここまで我慢しておるなあと思う



ぐらいに我慢して、これは子どもにとっては親は絶対ですから、何とか親が満足するように生きたいというので、頑張って頑張って、しかしそこまで要求されたらもう頑張れないと。遂にある時点で切れてしまって、自分は親の期待には添えない、そういう力がないとなって、そこでぷつりと切れてしまう。自分がどうでもよくなってしまふ。もう生きてることが嫌だ、だからリストカットしたり、そういう子が結構増えております。自分がどうでもよくなれば、自分が生きているということに何の意味も見いだせない。そういう意欲ももう使い果たして空っぽになってしまふ。そういう状態になってしまえば、世の中のことはどうでもいい。自分はいいのに世の中が大事、自分はどうでもいいのに親は大事ななんて子はいません。自分がどうでもよくなれば当然人はどうでもいい。親だってどうでもいい。できれば死んでしまいたい。だけど死ぬのは恐ろしい。生存本能がありますから。そういう中で、生きてる辛さに絶えきれず引きこもりになる。引きこもりになってもこれは辛い、自分にこの辛さをもたらしている世の中、その最前線にいるのが母親ですね。時には父親になりますが、大体母親のほうに矛先が向いてくる。この壁を破らないともう自分は絶えられないと。そういうふうになって殺す。だから、それはもう相手を人間として考えていない、自分を苦しめるものとしてしか考えていない。そんなものは要らないわけで、だからどう殺してもいい。殺したって悪いと思わない。殺し方も、残虐な殺し方、火をつけて殺したり、あるときには薬を飲ませたりというのもありましたね。刺す、絞め殺す、いろいろあります。非常に昔の殺し方に比べれば残虐で無機質ですね。こんなひどいことをして、これでも子どもか、これでも人間かなどと報道されていますが、残虐なことは全然問題じゃないんです、その子にとっては。自分がどうでもよければ人だってどうでもいいんですから、その邪魔なものはどうでもらうというだけの話で、殺し方なんて問題じゃない。もう人として共感する力を失っているわけですよ。そういう犯罪が70年代からぱらぱらと出だしまして、80年代、90年代、そして今世紀に入ってから、減るどころかどんどん広がっています。これはもう完全に教育の失敗であります。生きることをどうでもいいと思わせてしまふ、それは大人全体が作っている社会も含めてそこに責任がある。だから、自分がどうでもよくなるということは、つまり生きる力を完全に失ってしまうということ。あるいは失いかけている子どもが多いということ、これが今の社会の大きな問題だろうと思います。

「子どもたちのライフハザード」という、滝井さんという方が書かれているなかなかいい本が岩波から出ておりますけど、その中で、ある大阪の小学校の荒れる学級で、子どもたちに、あなたは自分のことが好きですかという問いを發して、すごく好きという人はこちら、大体好きと、まあ普通に好きという人はこちら、余り好きじゃないという子どもはこちらに、自分のことが嫌いという子はこちらというふうに四隅に分けてみたところ、嫌いなほうが多かった。これはその後、あちこちでそういう問いを出しているということをお聞きすると、もちろんクラスは違うんだけど、自分が嫌いな子どものほうが多いんです。これは恐るべきことですよ。幼稚園、保育園、小学校低学年、もう生きてることが楽しくて楽しくてしょうがない、じっとしてられない。皆さん方は子ども教室をやっておられ、元気な子ばかり扱っておられますから、私の言ってるようなことは信じられないかもしれません。実際にはあれができない、これができない、自分はだめだと思っている子どもが多いんです。

そういう子どもたちが集まれば、荒れる学級になるのはおかしなく、子どもたちは、言うことを聞かない、じっとしていない、邪魔をする。荒れる子どもたちが何人もいるわけですが、このテストをやって分かったことは、荒れる子どもたちは全員自分が嫌いなんです。こういってあましている子ども、昔は元気でやんちゃで生きる力むんむんの子どもだらけだったと思うんですが、その子たちは実は自分が嫌いなんです。聞いてみたら、自分はもうどうでもいいと。だからさっき言った、親殺し、無差別殺人と同じ発想ですよ。自分はもうしょうがない、悪い子なんだと、どうでもいい子なんだと。だから自分が嫌いなんだと、そういう返事です。それが荒れる行動に表れているんです。そういうことが分かってきている。

ですから、この一番基本のところ、自分が大好き、生きてることが楽しい、学校に行くことが楽しくてしょうがない、友達と遊ぶことも楽しい、勉強していろんなことを、知識を身につけることも楽しいという、その基本が崩れておる。それを無理矢理詰め込んでどうするんだという、そこが大きな課題だろうというふうに思います。

そこで2番目に大きな課題は、そういう主体性が失われている子どもたちに、どうやってその力を身につけさせるかということです。そういう子どもたちは、幸いにして何とか大学を出て会社に就職しても、自分で考える力がない、あるいは考えるようにすればあるんでしょうけれども、考えようしない、指示待ち人間ですね。これも社会の中で20年ぐらい

前から問題視されだしておりますが、少しも治らない。どんどんそういう指示待ち人間の若者が増えてきている。だから、君はどう考えるか、君はどうしたいんだ、君は何をしたいんだと、そういう問いを出しても答えが出てこない。それで、私は何をすればいいですか、指示は何ですかと、言われたことだけしかしない。しかもそれを考えてやらない。だからそういう姿勢になってしまってる。やっぱり一番の基本は、生きていることが楽しくてしょうがないという気持ちです。そういう生き方がそぎ取られていって、言われたことをやってればいいと、そういう人間になってしまっている。日本が経済成長で、アメリカ、ヨーロッパに追いつけ追い越せの時代、つまり 1970 年代ぐらいまでの時代、昭和で言えば 50 年代ぐらいまでの時代はそういう人間でよかったんですね。コンピューターもありませんでしたから、いろんなことを知っていて、いろんなことを覚えていて、アメリカ、ヨーロッパのやり方を早く理解して、それをさっと持ち込んで、さっさと日本に植え付けていけばよかった。そういうリーダーが日本をリードしていったのです。

ところが、70 年代に日本はそれらの国に追いつき、トップレベルに入った。これから先は、外国の技術や知識を持ち込むだけではやっていけない、そういう社会に変わってしまった。そういう社会を更に進めるために必要なのは、自分の目で問題を発見して、自分の目でこういうふうにしたらいいと考案すること。こういう製品を作ったらいい、こういう事業をやったらいい、こういうふうなものを作ったらいい、サービスしたらいい、たくさんあります。それを自分で発見して、自分でそれを作り出す、主体的に考える力をもった人間が必要です。企業は一生懸命そういう人間を取ろうとしていますが、企業人はぼやいておる。いつまでたつたってそういう人間が出てこない。自分で考えてくれない。どうなるんだろうと。昨今の進んだ企業は、学歴は全く関係なく、人物本位で採用をやってますよね。議論させたりして、自分の目で考える人間かどうかを確認して、その考える人間だということが分かれば採用するという、そういう採用の仕方が 10 年以上前から、発展している企業はそういうやり方をしておる。どの大学を出たかということは関係ない。どの大学を出たかということは、10 年たってみてその人物が伸びたか伸びてないかとは関係ない。そういうふうには、これは人作りについて熱心な企業人たちがおっしゃっているんですね。

今のような発言はひどい発言ですよ。人よりもいい大学に入ろうと偏差値に向けてものすごい努力をしたこと。そして学校の体系もね、偏差値の高いのがよいという体系が出来上がった。これを完全に否定するわけですから、いい、高い大学を出ても意味がないよということは、それは文部科学省にとって、または教育に携わっている方にとっては本当にひどい発言だと思うんですね。でも企業人はそう言う。そして、それでも偏差値、偏差値といって親が子どもを駆り立てる。これが子どもの生きる力を絶やすから、それは違うよということを言うために、私はこのことを言わざるを得ないんですね。非常に残念です。やっぱり教育を一生懸命やっている、頑張っている人間にとって、そこで育ったこの子どもたちは、社会にとってもいい仕事をしますよというふうには、社会と教育が結びついていかなきゃいけない。追いつけ追い越せの時代は結びついてたんですけどね。それが最近結びつかなくなっているということは、私は大問題ではなからうかと思っております。



そこで課題の提示をいたしました。かなり極端な言い方をしました。最近の教育は大分よくなっていると私は思っております。この放課後子ども教室で育ち、そこで生き生きと自分で考え、自分でリードして人と仲良くやっていた子どもたちが社会に出たころは、今のようなことを言わなくて済む社会になってるんじゃないかと強く期待しております。今、社会に出てる人たちについての問題点はそういうことなんですね。生きる力がまず弱いという、基本のところがない。だから文部科学省も生きる力ということ、ここ 20 年ほど一生懸命言ってるんだと思います。ここが最大の問題です。自分で考えて主体的に生きていこうと取り組む人たちが少なくなっている、ここが 2 番目の大きな課題であろうと思います。

そこで、この原因は何か、じゃあどうすればいいのかということが問題なわけで、この原因については私も忘れられないんですが、もう 10 年ぐらい前になりますけれども、文部省の、当時は文部省と言っておりましたが、生涯学習局長さん、何年か前の局長さんですけど、その局長さんが、生涯学習局ができて、これから根を広げていかなきゃいけないと、勉強会といいますか、懇談会を作られた。私もその勉強会のメンバーを依頼され加わりました。すると、今の子どもたちはやる気がない、どういうふうにしてそれを改善するかというテーマになったとき、大学の教育の専門家の人が、

「いや、今子どもたちがひどくなっているのは家庭が悪い。学校はきちんとやることはやってるんだけど、家庭が悪い」という発言をされました。これに対して、「何をおっしゃるか、家庭はちゃんとやってる、学校が悪い」と言った人たちもいました。私の右隣に野中ともよさんという方がおられました。元NHKのアナウンサーで三洋電機の社長さんをされた野中ともよさんです。それから、牟田悌三さん、この間亡くなられましたが、チャイルドラインを十何年もやってきている俳優さんです。牟田さんは何をおっしゃったかという、「やはりそれは学校が悪いんだ」ということで、ここで大論争になったんです。私はそのときはまだ高齢者を支えるボランティアのほうの仕組みづくりで、子どもの分野はやり出しておりましたが、まだあんまりよく分かってなかったんで、何も発言しませんでした。その後、高齢者から子どもまで、みんなを支えようというボランティアを広めていく中で、いろいろ現場を視察させていただいたり、いろいろ考えて、私の得ました結論は、学校が悪いとか家庭が悪いとかそういう問題じゃない。原因を求めるならば少子化であると。これが私の結論。少子化ですね。子どもの数が少なくなるということでもあります。少子化自体は当然の流れでありまして、人間が前のように死ななくなるということですから、これは人間の進歩であります。それ自体は進歩でありますけれども、少子化によって、子どもたちが育つ環境ががらりと変わってしまった。昔、つまり人間が産児制限ということを知らず自然にしていたときには、人間は動物としては10人子どもを生むのが平均でした。与謝野馨大臣のお祖母さん、与謝野晶子さんは11人人生んでおられます。結婚が割合遅かった。当時21か22ですけどね。鉄幹さんと結婚されて、11人、1人が若くして亡くなってるんですけど、平均数ですね。私の祖母も10人人生んでおります。大体10人人生んで。昔は幼いうち、七五三になるまでにかかなりの子どもが死にますよね。七五三、そりゃあよく生き残ってくれたということですよ、三歳、五歳、七歳。それ過ぎたら大丈夫かといえ、10代でも結構死んじゃう。20代でも死んじゃう。私の家系を調べてみましても、10代で死んだおばさんもいますし、私の母は20代で死にましたし、これが昔の姿ですね。そういうふうにして、兄弟が死ぬ中で育っている。これが自然現象的な人間の動物としての姿ですね。そんなにたくさん生んでたくさん死ぬというのはよろしくないから、少子化は基本的にはいいことなんです、やっぱりいいことばかりじゃなくて、それには副作用、マイナスがある。それが教育。



10人生まれでも、兄弟がどんどん死んでいく。最後は2人ぐらいになるのが平均です。そういう事態があると、命の尊さというのは文句なしです。自分の仲良くしておった大事な兄弟が死んでいくわけですから、これは生きてることの大切さ、しかしその難しさというのが、子どものころから肌身にしみて、全身で感じます。つまり、生きる力というふうなことは、全く言う必要がない。自然にそういう環境になってる。そして、それだけたくさんいますと、親がそんなに構えないんですよ、子どもたちに。これが大事なんですよ。親がそんなに構えない。構うことができないというのが大事ですね。親は農業で一生懸命両方共働いておる。その中で兄弟同士、上の子が下の子の面倒を見て、下の子も少しは上の子の役立つように家のことをやり、そうやって助け合い支え合うという、そういうことをこれまた幼いうちから嫌でも身につける。そうせざるを得ない生き方ですね。それから助け合いの前に一番の課題である生きる力が身につきます。私の場合は5人いて、私の年代としては平均なんですけど、5人兄弟がおりまして、例えばスイカが切って出てきますと、まず真っ先にどれが一番大きいかを見分ける洞察力ですね。これが大きいとなったら、これを何とか自分のところへ持ってくるために、兄貴と取引し、姉貴にうまく甘え、妹を丸め込み、弟を突き飛ばして自分のところへ持ってくる。課題の解決策ですよ。兄貴にはどうすればいい、妹にはどうすればいい、相手の立場、弱点を見抜いて交渉したり暴力をふるったりして、とにかくこれを自分のところに持ってくる。ぼやぼやしていたら食べられない。自分の分まで持っていかれたりしますからね。スイカが来たときから目をぎらぎらです。これは生きる力そのものです。そうして洞察し、交渉し、最後、弟が泣くところでほっとくと、親に聞こえたりするとあとで叱られますから、この場合は弟に上手に言って、たぶらかして丸め込んで、これが管理能力です。しっかり子どものときから社会で生きていく一番基本的な能力を身につけていないと生きていけない、おいしいものが当たらない、下手すると食べ損ねる。こういう事態になる。その毎日ですよ。毎日の食事、それから、親がこれしろあれしろと言ってきたときの、与えられた仕事の分担の仕方、人に対する回し方とかですね、日々、日常の中での生きる力と積極性ですね。そして、うまく仲間たちとやっていく共助の力と自

助の力。この二つが基本ですが、この二つとも身につく、たくさんの兄弟の中で。更には、近所の友達たちと遊び回ることによって、いろんな力を身につけてきた。そういう環境の中で育っておったんですね。

動物はすべて、それぞれの種に最も適した育て方を発明しておりました。それに沿わないと育たない。ある動物行動学者に教えてもらったんですけど、例えば、狐は4匹、狸は6匹ですか、子どもを生むそうです。それで、たまたま例えば6匹子どもを生む狸が1匹しか子どもが生まれなかった、狐が1匹しか子どもが生まれなかったとすると、本来6匹なり4匹の子どもの1匹しかいないわけですから、この子は愛情を一心に受けて、強い狐、狸になるかという、これはならない。死んでしまうそうですね。死んでしまう、1匹しか生まれなかった子どもは、親がちゃんと守るんじゃないかと当然考えますが、これは親のなめ過ぎによるものだと思います。子どもというのは外に飛び出して遊び回りながら成長するわけですが、その中でばい菌とかウイルスとかいろんなものをくっつけて巣に帰ってくる。これを親がなめ取ってやって、そして子どもが健全に育つ。だから、4匹子どもを生む場合は4匹分なめる。ところが、4匹なめる分を1匹に集中してなめると、これはなめすぎで、皮膚が弱ってしまって、かえって外に出たときにばい菌とか虫にやられて、それが原因で死んでしまうんだそうです。これは少子化現象ですね。どうもたくさん生んでた時代から子どもを減らしたときに、同じ少子化現象を人間も起こしてるのではなからうかと。だから私は少子化が原因だと、そういうふう思うに至ったんです。つまり、子どもは自分たちで育つ力をもっていますから、いろんな場面、おやつが出てきた場面、おかずの取り合い、ご飯の取り合い、仕事の分け合い、遊び、いろんな場面の中で何人も異年齢の兄弟がいて、あるいは仲間がいて、その中で自分の役割、自分を出しながら、しかし仲間とうまくやっていく、この自助と共助の力を、子ども同士で身につけていくという、それが主たる人間の育ち方、子どもが産児制限なしに生まれたときに人間が取っておった子どもの育ち方じゃなからうか。それがあから、子どもたちがしっかり頑張る力と仲間とうまくやる力を身につけて頑張って生きてきたんじゃないからうか。それを少子化という環境に生まれたそのときに、少子化はいいことなんです、そうするならば、元の環境をどうつくり出すか。つまり年齢の違う子どもたちが一緒に集まって同じ作業をやったり、同じ遊びをやったり、いろいろしながら、自分でどう遊べば楽しいのか、その遊びの中で自分はどういう役割を果たせばみんなも楽しく、そして仲間たちから認められるのか。これ認められないとおもしろくないですからね。あいつが入ってきたらドッジボールでチームが負けてしまうとか、あいつが入ってきたら野球負けちゃうとか、これじゃあおもしろくない。自分の力はこれぐらいだから、ここのところで貢献しようということを示せば、仲間も喜んでくれるし自分も楽しい。彼はここが素晴らしいから、彼にはこういう役割を果たしてもらおう。そういうことで仲間のいろんな違いを認め、仲間たちとうまくチームを組んで、共同して成果を上げて一緒に喜ぶ、そういう感動、生きる喜び、これが子どものころに一番楽しい事柄ですよ。そういう仲を通じて、ああ、生きてるのは楽しい、自分にもいろいろ役立つところがあるという自覚、仲間と上手くやっていくという自信、これを身につけていく。少子化することによって失われた教育環境をもう一度取り戻すのが、人間としての生きる力、幸せになる力をつけていくために最も必要なことではないのか。

そうとするならば、子どもたちは、御近所の年齢の違う子どもたちと一緒にいる期間をなるべく多く取って、そこで大人が仕切るんじゃないで、どうすればみんなが楽しくやれるかということ子ども同士で考えて、その楽しいやり方を覚え、身につけ、そして生きていくことが楽しい、そして頑張ることも大事だという感覚を自然に身につけていくという環境を作るべきなんです。これを怠っていました。

少子化する時代は資本主義がどんどん高度になる時代であり、競争社会です。助け合いの社会から競争する社会になる、お金をたくさん持っている人が幸せになれるという価値観が支配的になった、そういう時代ですから、その考え方に子どもたちを巻き込んでしまって、お勉強しなさい、あの人に負けちゃだめよ、もっといいところに行きなさいという、そういう教育になってしまって、仲間同士で遊ぶ環境を作らなかった。これが私は社会全体としての大きな教育上のマイナスだと思います、失敗だったというふうに思います。

だから、学校が悪いとか家庭が悪いとか、そういう問題じゃなくて、人間としての全体の子育ての仕方の問題であろうと私は思います。ということで、なぜ私がこんなことを話しておりますかがもう十分にお分かりいただけたと思います。原因は少子化であり、大人が仕切って子どもたちの自主性を損なっていることです。それをどう取り戻すか、これが課題だということになります。ならば、そういう環境を作ればいい。

だから、実は学校へ行く前の段階で、年齢の違う子どもたちの集まる場をいろいろ作っていく、こういうことが大切です。ここは学校、放課後の教室の問題でありますので、それもやりながら、学齢に達したら、学校の校庭を解放し、年齢の違う子どもたちが遊んで集まって一緒に作業をする場を作る、その中で自分の役割を見付け、自分の長所を見付け、自分の長所を生かすことの楽しみを体で覚えさせる。それと同時に、みんなで楽しくやるにはいろんな人と違うところを認め、その上で協力することの大切さを、これまた遊びや作業の中で身につけていく。こういう場を設けるということが一番適切な対策だということになる。

この放課後子ども教室というのは、正にそういう場を作ろうということで、日本の進展を見れば遅まきな、せめて 1950 年代ぐらいからやってほしかったなと思いますけれども、しかし遅すぎることではない。こういう場を作り、そういう場の中で子どもたちの自助の力と共助の力を育てていく。育てていくといっても、大人が仕切るから、仕切ることの弊害が出てきたわけですから、仕切っちゃいけない。大人は上手にリードするだけであって、どういふふうにやっていくかは、子ども自身に考えさせるということが非常に大切であろうというふうに思います。

そういうふうはこの放課後子ども教室の意味をとらえますと、幾つもの大切なことはありますが、最低限度2つ申し上げれば、その1つは年齢の異なる子どもたちのグループでの活動があるということ、これが極めて大切だろうと思います。

今日も、表彰を受けられました推薦理由として、年齢の異なる子どもたちの交流があるというふうに強調されているところがありました。皆さんはそのことの効果はもう十分子どもたちを見ながら感じておられると思います。私は 2 年ほど前ですかね、NHKの「課外授業ようこそ先輩」という番組に出演いたしました。私は京都出身なものですから、京都の洛中小学校、昔の乾小学校というところですね、京都の真ん中にある小学校なんですけど、ここで2日間、6年生を担当いたしました。2 日間で、いじめをなくす子ども憲法を作ろうというテーマで子どもたちにどんどんルールを提言してもらって、それをいいか悪いか、役立つかどうか検証してもらって、子どもたちの議論の中からは 130 以上提言が出ましたが、それを整理して、最後は 6 条にまとめてあげました。それは、校庭に大きく書いてずっと張り出してくれています。そういう子ども教室をやったんですが、その準備として、何がいちばん自慢できるかという問いを出したら、半分以上の子がある答えを書いてました。大多数と言っていいぐらい一緒にびっくりしたんですけど、それは、縦割りです。縦割りってお聞きになったことがありますでしょうか。自然発生的に全国に広がりつつありますが、これで自分は成長したというのです。要するに、近所で上級生と下級生のカップルが、面倒を見る見られるの関係をやって、この関係で、上級生が、近所の下級生の登校、下校時の面倒を見る。それから学校に出てきても、自分のカップルというか兄弟みたいなもんですね、下級生が掃除をするときには、上級生がそこに行って、させながら上手に指導するとか、休憩時間は遊んで面倒見るとか、そういう疑似兄弟みたいな関係ですね。

これが縦割りと言いまして、兄弟のような関係です。文部科学副大臣の池坊さんが主催されておる、文部科学省の 30 年後の教育を考える勉強会、これにも私は引っ張り出されましたが、子どもたちの成長に有用なのは縦割りであるということも池坊さんは知ってましたね。私もそう思うんです。この縦割りというのは学習指導要領にも書いてないし、文部科学省が全く関与せずに、自然発生的に広がりつつあるプログラムなんですよ。この活動が、子どもの成長に最も役立っていると子どもたちが評価していると、これはちょっと皮肉ですよ。その活動は、まず面倒を見る、見られる、それで子どもたち同士で一緒にやるという、さっき言った大きな課題、大人が仕切るんじゃなくて、子どもたちが自発的にこの関係を作るという、それが両方の成長に役立つという、そのことを如実に表しているんだと思うんです。それで、この縦割りの、更に大きく広く、これを面にし地域に拡大したのがこの放課後子ども教室ですね。

私どもはこの事業が始まる前からこういった異年齢の子どもたちと交わる事業をずっと推進してきましたし、その前の子どもの居場所事業も、これをやるための文部科学省の研究会というか委員会かな、そこでもいろいろ主張させていただきました。これは人類としての教育の仕方が一番沿った、人間性を作るのに一番役立つ方法です。今の社会に最も役に立つ人間を作り出す基本の事業であるというふうに思います。

ですから、この2つですね。異年齢でやる。そして、子どもたちがなるべく自発的に自分たちで考えてやる。そうなればなるほど、人間性育成の効果は大きいと私は信じておりますし、そういう2つの面をしっかり抑えられていたところが表彰されたということで、非常に嬉しいと思います。

このプログラムが出たときは、やっぱり文部科学省ですから、最初はやっぱりお勉強という匂いが強かったですよね。主眼がお勉強にあった。ええっ、放課後も勉強させるのかと思いました。だれか引っ張ってきて教えるという、そういうようなプログラムでしたよね。でも、そこを外したらやっぱり予算も取りにくいかもしれないし、私は、始まったら必ず地域の方々が今求められているような、先ほど私が言ったような教育のほうにもっていかざるを得ない、そう信じておりましたし、私ども財団もこういうやり方をしておるといふことは、地域の方々に対しては広めて参りました。それで、現にそういうところが多くなってきているし、そういうところほど続いているし、勢いがあるし、これはまだ証明されませんが、あと10年たったら、そういうところの子どもたちこそ生き生きとして勉強もよくできる、社会に出ても素晴らしい役立つ、自分も自分の人生を楽しむ、そういうことが証明されるであろうと私は信じております。ですから、この子ども教室、どんどん地域の方を引っ張り込んで、広げていってほしいと思います。ただし仕切らせないこと。そこだけはしっかり注意して、待つことが大事。待っていれば必ず素晴らしいものが出てくる。そのときにあなたはびっくりするだろうということをよく言って聞かせて、待ちながら、とにかく上手に支え、リードしながら、子どもたちの育つ力、生きる力、これを生かす。曲げない、そぎ取らない、元々生きる力をもっていますから、これをしっかりそのまま伸ばす、そういう姿勢でこの事業を進めていってほしい。

私どもは、少しでもその役に立てれば嬉しいと思いますし、そういうやり方が進めば、少々昼の授業時間でいじめられたりくじけそうな子がいっても、自分を失わず、無差別殺人などには走らず、引きこもりにもならず、自分の人生を楽しみながら学んでいこうと思います。

私が出ました京都市立堀川高校というのは、私の子ども時代は偏差値という意味ではだめな高校で、私はそういうだめな時代の人間ですが、ここ最近偏差値が上がって、進学率がすごくよくなって、東大とか京大とかに結構入るようになって、堀川の奇跡と言われているんですけど、東大、京大にたくさん入れることは全然自慢になりません。そんなことは問題じゃない。東大、京大だからといって就職がいいわけでもなさや、社会人としていいわけでもない。大事なことは、受験勉強させて覚え込ませて受かるようになったんじゃないということ。自分で選んで好きなテーマで頑張って勉強しろと、好きにやれという方式に切り替えたら、実はそれに相反するようであった進学率もぐんと上がった。ということは、進学してる子は、やる気で本気で勉強して、それが楽しくて勉強してるんです。ほかに自分の楽しいことを持っていて受かっているということですから、これは東大、京大でもいい、役に立つ東大、京大生になると思います。だから、成績を上げたいということに熱心であればあるほど、それこそこの子ども教室、しっかりとさっき言ったようにやってもらおうということが、かえって大きな力につながるんじゃないだろうか。一番基礎のところは勉強ではなく、こちらにあるんだということを、家庭にも、家庭の親たちにも伝えながら、このプログラムがどんどん広がり大きな成果を上げることを願っておりますし、そう信じております。

今日は御静聴どうもありがとうございました。



## 講義①

## 教育の可能性を広げるしくみづくり

## ～教育プラットフォームのあり方～

NPO スクール・アドバイス・ネットワーク理事

生重 幸恵 氏

1956年北海道生まれ

特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク理事長PTA会長時代から学校を支援する活動を積極的に行ない、その経験により、区内の他校PTA会長経験者とともに平成14年に同法人を設立した。

この法人は、「学校教育支援における地域活性化」を目的とする数少ない団体として、注目をされた活動を行なっている。出発時活動の中心は杉並区教育委員会との協働であり、杉並区とは現在も連携を持っている。



また、平成15年からは、東京都教育庁生涯学習審議会委員として東京都内各区の教育委員会とも連携したり、さらには全国各地での「学校支援」「地域活性化」のプロジェクトに参画したりして、活動の範囲を広げ、平成19年からは内閣府の地域活性化伝道師に任命された。

一方、企業の教育支援活動の推進にも助力し、社員研修やフォーラムなどを通して、教育貢献の必要性とその方法などについてアドバイスし、企業の持っているノウハウを学校授業に繋げるためのプログラム作成なども手がけている。

- 平成14年4月 杉並区学校教育コーディネーター（現在区内小・中学校5校担当）
- 平成14年7月 特定非営利活動法人スクール・アドバイス・ネットワーク設立
- 平成15年5月 第5期東京都生涯学習審議会委員就任
- 平成15年5月 （社）経済同友会「企業経営者による教育現場への積極的な参画」アドバイザリースタッフ就任
- 平成17年5月 第6期東京都生涯学習審議会委員就任
- 平成19年3月 内閣府地域活性化伝道師就任
- 平成19年4月 東京都立高等学校 学校支援コーディネーター（都立高校23校担当）
- 平成19年5月 第7期東京都生涯学習審議会委員就任
- 平成19年5月 第23期東京都社会教育委員会 副委員長就任
- 平成20年4月 平成20年度キャリア教育民間コーディネーター育成・評価システム開発事業 研修プログラム作成委員
- 平成20年9月 経済産業省 地域自立・広域型キャリア教育モデルの在り方研究委員

### 1. 東京都が目指す「地域教育」とは？

学社融合（平成8年国・生涯審答申）、「総合的な学習の時間」の導入（平成14年度）、中教審答申（平成15年3月）などの流れがあって、今現在、学校教育が社会教育に寄与していい状態になった。どちらにも“教育”という文字が入っていながら、互いに相容れないものであった時代が長く続いていた。社会教育が連携することを望んでいて、今までできなかったことが、やっとできるようになった。将来目指すべき方向は、学校教育と社会教育がボーダーレスで、地域の拠点は学校となること。社会教育に子どもたちが関わる原点、学びの原点があると感じた。学校がなくなった地域は、本当に寂しいものになっていく。やはり学校があって、若い世代がいて、その中で社会生活が営まれているからこそ、きちんとした地域が成立されていく。



地域教育というのは、学校内、学校外、教育課程内、教育課程外、放課後、すべてを通じて人々がつながって「安心・信頼・支えあいのネットワーク」を創り出していく。口で言うのは簡単だが、実際にどう展開していくか。地域づくりの担い手は、現在いろいろな意味で大変多様化していて、行政が関与しないと上手くいかない所と、地域の方々の思いや目や、手が入るといいうやり方、両方あると思っている。

今の子どもたちにとって自立するとは、社会といかに接点を持つか、ということにある。学校と家庭だけでは、多様な体験というところまでなかなか行き着かないが、それはやむを得ない。しかし、義務教育課程の中で学ばなければならない、時数が足りない、土曜がお休みだ、など様々な要因の中で、先生はモンスターペアレンツと言われるような親御さんにも対応して、そういうものを全て賄いながら、子どもに学びを提供していく環境に、全ての公立学校が置かれているかということ、私は少し首を傾げざるを得ない。親への対応も含めて、家庭の集合体が地域である訳だから、どう関係性を持たせながら互いに学びあうシステムを作っていくか、ということが、今後子どもたちが学ぶ場としての学校が、より有効にいきてくる方法で、子どもたちが自立する、地域の大人に関わってもらい、地域教育の基盤形成、これをプラットフォームと呼びましょうということ。教育を支援する、そういった地域づくりの拠点として、もう一度学校が中心となる。戦後様々な要因で、家庭教育、社会教育がいろんな変遷を経て、例えば学校に行く、協力する、先生と共に子どもを育てるという意識が、高度経済成長とともに生活が豊かになっていく過程で、除々に崩壊していった。それをもう一度取り戻す。私はNPO組織を立ち上げたときに、地域教育、学校教育のルネッサンス、再構築という言葉を使っていたが、まさしく今やろうとしていることはそういうことだ。

### 2. 「地域教育プラットフォーム」構想とは？

地域教育プラットフォーム構想とは、社会の多様な支援者・学習機会を、それぞれの地域の特性をどのようにかしなが、子どもたち、大人が相互に交流しあいながら、学びを展開していくか、ということ。プラットフォームとは、駅の起点。人、もの、お金、情報などすべてのものが行き交う場であると、私は捉えている。学校を支える社会貢献団体、また環境系や福祉系のNPOなどの組織が、どのように子どもたちの放課後や学校教育の中に関わっていくか。その多様な関わりを描いていくために、どういう仕組みが必要かということを考えていきたい。

子どもを中心に据えて、多様な社会資源、今いろいろなものを有機的に繋いでいくシステムが、縦割りだ

どうしても欠けざるを得ない。しかし、プラットフォーム、ネットワークという考え方を基にしたときには、そこにいる子どもたちにとっては、どこから予算が出ていようが、学びの活動への入り込み方としては、同じ子どもに同じ学校の中で関わっていく。それをどのように、これまで関わってくれていた自治会、町内会等の団体と共に、有機的に考えていくシステムを作っていくかということが、今後の、それぞれ行っているものが繋がっていったって、より有効に働き掛けていく仕組みづくりにつながっていくのだと思う。子どもが地域に関わる、社会に関わる、その公共性の高い所をどう接点を作っていくかというのは、プラットフォームという、情報を共有する場によって成立しやすくなる。

プラットフォーム構想における地域の捉え方について、自分の住んでいる地域が自転車で行ける範囲だけ、と認識することに対して私は疑問を持っている。例えば区市町村レベル、都レベル（県レベル）なども含めて、様々な人材が、プラットフォーム構想における協力者になっていくことで、層は厚くなっていく。私がおすすめているのは、都（県）が大きなネットワークを作り、各市区町村にそれぞれ小さなプラットフォームがある。県（行政、民間すべて）の情報全てが効果的に市区町村に降りてくる。もっと効果的に、子どもたちに、社会との繋がり場を広げていくシーンと、日常における地元の大切さ、愛着、愛情、アイデンティティなどを構築していくために、地域との繋がり、異世代交流などが関わってくるシステムづくりをしなければならない。

プラットフォームの中に、学校の学校支援地域本部がある。学校支援地域本部と放課後子ども教室の予算経路が異なるというのは行政的なもので、大人にとってこの2つの事業は違うというだけで、受け取る子どもの側からすると同じこと。重層的に「地域教育」のネットワークをつくるのは重要である。

### 3. 区市における地域教育プラットフォームの展開

ほとんどの場合、報告書などは市や県の職員の方がやっておられるのが現状だから、それもこれも全部やるのは無理だという発想にならざるを得ない。しかし、子どもにとっては、放課後も、学習も、生活の上でも、長期休暇のときも、朝も、夏休みも、土曜日でも必要ではないか。地域には、毎日無理でも、土曜日は空いている方もいる。月に1回お父さんに学校に来てもらって、こんなことをやってもらおう、などとコーディネートしていくことが、教育支援や学校支援、文部科学省の学校支援地域本部における地域のコーディネーターということになる。そのコーディネーターが1人で全てを行うことが無理ならば、コーディネーター'sでもかまわない。そのコーディネーター'sが、どんなところをお願いすると、より有効に様々なことが行われるか、と描くのがコーディネーター達の役割である。7年にわたってコーディネーターを杉並区でやってきて、現在33の地域支援本部がある。学校教育コーディネーターとして始めた人間は、現在、地域コーディネーターの研修や個別の相談にもものる仕組みになっていて、私どもがプラットフォームの役割を果たしている。いろいろな相談を受けて、答えを示していき、人材を紹介し、プログラムを提供していく。それは放課後のことも、学校教育内のこともある。この仕組みをどのように作っていくか。国の事業は3年程度で予算が切れる。しかし予算が切れたら子どもがいなくなるという訳ではない。では子どもたちにとって足りていないことを、自発的に自立的にやっていく環境をどのように整えていくか。予算があるかないかで実行するかどうかを決めていくものではないはず。少ない予算であっても、事務局費用を逆に県や市がもってくれることによって、1回500円でもよいから交通費を払って、ネットワーク協議会が存在して、様々なニーズが生まれてきて、団体や企業やNPOにお金を持ってきてもらう、という考え方があってもよいと思う。放課後のメンバーや学校支援地域本部のメンバー



が、それぞれのテリトリーを死守するだけではなく、同じテーブルの中で、子どもたちの体験の機会増加をどのように考えていくか。教育との連携をどのように果たしていくかということが、議論され実行されていくということが最も望ましい。予算の有無などとは関係ないところで、子どもの育ちを応援していく大人の、社会の中の仕組みづくりが、我々が今後考えていかななくてはならないことではないかと思う。

地域教育プラットフォームには、学校に関わる様々な活動、キャリア教育、ボランティア、文化スポーツ、子育て支援などがある。このプラットフォームが全てをうけて、同じテーブルで話し合っているようにすることで、例えば、赤ちゃんに関わり、子どもたちが自尊感情を育てながら、お兄さんおねえさんになっていく意識を育てていく。もう一度総合の中で、関わらせたいといったことをきちんとニーズマッチングさせていくことが、このプラットフォームの中ではできる。それを「学校支援活動」や「放課後、週末活動」にどうかするか。学校教育の中で行うことが難しいならば、放課後活動の中でやってみる。学校教育との連動の中で、いろいろなシーンで考えていくことができる。

子どもたちの学力の向上というのは、もう一度机の前に座りなおしをさせて、受験だと言ってお尻を叩くことではない。それは教育に近いところにいる我々はわかっているはずである。ものを語るときに、自分の体験無くしてきちんとした語りにはつながらない。同様に、きちんとした体験無くして、自信を持って子どもたちが発言して、自分自身の確認をしながら育っていくということにはならない。自分たちが一つのテーマをとことん突き詰めて追及していくところに、学習への意欲や気づきが一人一人の中に生まれていく。だから勉強しようという気になる。本来学びとは、自分たちが生きていくところに通じているから、そこに活かせるから学びなのである。社会が豊かになって子どもたちの遊びも変わった。静かに座って何かをやっている子どものほうが親にとっては楽だが、そこからは会話が生まれにくいから、コミュニケーション能力が落ちていく。コミュニケーション能力というのは、まず母親、父親がどう語りかけて一緒に話せるかどうか、一番最初の、人間のコミュニケーション能力である。その能力があって社会性が身に付き、安心して社会に出て、よそのおじさんやおばさんにかわいがってもらいながら、社会のルールを学び、よその人に挨拶をする。そういったことを、豊かになった社会、大人達がもしかしたら奪ってきたのかもしれない。噛む力を身につけさせること、裸足で歩いて地面を感じることを、そういった場をどう作るかを考えていくべきだと思う。いろいろな話をしてきたが、県レベルで情報を共有するネットワークをつくり、その情報が地区レベルのプラットフォームに落ちていき、学校レベルでは地域教育をどのように展開していくか、それぞれにコーディネーターの方がいて、地域の資源を学校の中に入れ、学校の教育にも、学校外の教育にも有機的に連携させていくことがとても重要。だから学校教育と社会教育は、地域の人間にとってみると、一体化することで地域の中で子どもを育てていくという環境につながる。有機的な資源、人材、様々なプログラムを作っていく可能性は、どの地域にもある。先生一人では行うにも限界がある。ならばその地域にチームがあって、支援できる体制があれば協力者を探す、連携するということ。

#### 4. 学校区レベルの「地域教育」具体的展開図

コーディネーターは、まず学校の先生と授業のねらいや流れ、話の内容や伝えたいメッセージなどについて、具体的な内容を確認する。さらには日時、時間数、使用予定の教室や、授業の形態などについても確認する。

次に行うのは講師探しであるので、授業内容と物理的な部分を確認したうえで、ネットワークを探してみる。コーディネーター自らのネットワークの他に、東京都ネットワーク協議会、行政機関や団体に問合せ、



といった方法がある。

講師が手配でき、講師と学校をつなげる際には、学校の先生との打ち合わせ通りに両方の講師の再調整をすることも含めて、具体的に調整していく。

学校教育と学校外教育、そして学校支援のサポーターさん達に必ず伝えていることは、次のようなことである。

- 学校の教育方針を尊重しましょう
- 児童・生徒には、わかりやすく話しましょう
- 児童・生徒には、公正な態度で接しましょう
- 一人一人の人格を尊重し、「ほめる」姿勢を持ちましょう
- 学校内で知り得た秘密事項は、固く守り、口外しないようにしましょう
- 学校へのクレームや苦情を言うのではなく、地域の子どもたちのために何ができるかを「提案」しましょう

コーディネーターが、年に1回こういうことに協力してください、という体制をひくだけで、可能になることがかなり出てくる。まとめのときには、関わってくださった地域の方も含めて、たくさんの大人の方に発表を見に来て頂いて、たくさんの拍手を子どもたちにあげてくださいと。そうすることで、子どもたちは人前で話すことに自信を持てるようになる。



## 5. ケース別活動実施例の紹介

### ①学習支援「朝先生」

先生が朝の準備をしている間の10分～15分に、地域の方が学習補助を担当する、「朝先生」というシステムを導入している。この活動の効果は、まず、先生が来たときには、生徒がビシッと授業を受ける態勢ができあがっている。生徒たちと教室で関わっていく中で、地域の方が接した子どもたちの活躍や成長を大変喜ばれる。道で出会っても朝先生の●●さん、と声をかける関係ができている。それは、子どもたちの通学路において、安心・安全を守ってくれる、見る目、たくさんの大人の目を増やしていくことにもつながっていく。

### ②学習支援「総合学習支援」

例えば伝統文化や、小学6年生で戦争体験を知る、中学年では戦争を題材とした本を学習する際に、地域の戦争の体験をされた方に来て頂いて、その時代のお話をして頂く。子どもたちが熱心に質問すると、来て頂いた地域の方もとても感心して、意気揚々とお帰りになる。自分の出身校を誇りに思ってくれて、子どもたちをかわいいと思ってくれる。そういう方たちを増やしていく。地域には多様な才能を持った方がおられる。そういう方たちが、放課後の活動の中でも関わる。授業では毎回できなくとも、出会いを演出して、それが継続的に好きな子どもによって、放課後に展開されていく。そして自信をつけたところで、公民館活動や敬老会活動などに参加して、お年寄りとの交流会などにも出る。自分たちも大人と一緒に発表する場をもつ。そのために、自分の好きなことを、自信を持ってできるような場をどのように提供するか、体制づくりが重要になってくる。

### ③学習支援「中学校の職場体験」

コーディネーターは常に関わり続けなければならない、ということではなくて、学校と地域の方が直接いい連携を保たれているならば、身を引いてもいい。例えば、中学校の職場体験でも、挨拶をなぜ笑顔で話しかけるかということ、サービス業に従事している方に具体的に教えてもらうことで、恥ずかしがり屋の中学生でも、何らかのきっかけですごく変わっていく。そういうことを学習の中で、いろいろ展開しようということ。

### ④サマースクール

夏休みに、子どもたちが地域の大人と一緒に、学びを展開していくというのは、なかなか一般家庭ではないことだと思う。朝先生に関わる地域の方、サマースクールに関わる方、多様な大人に関わってもらうことで、自分たちも自分の学校に寄与できている、地域の参加感、連帯感をつなげていく、いろんな大人に関わって頂くということは、大変重要なこと。

## ⑤親子教室

以前、日本生命の財団から異世代交流の展開に関する活動のお誘いを頂いて、地域の年配のお料理サークルの方々をお呼びして、放課後、土曜日に親子教室という形で、らっきょう、みそ、福神漬づくりをおこなった。らっきょうが苦手だった子どもも、自分で作ってみると、ちょっと苦手ではあるけれども食べてみたり、お母さん、お父さんが参加してくれるということが、次に自分の子どもが卒業したときに、何かできることがあれば（学校に）手伝ってほしいという気持ちをもった親たちを育てていくことにもなる。子どもと一緒に時間を共有し、異世代の方から様々な学びを展開することや、ものづくり教室で、企業の方に本格的なラジオづくり教室をやって頂いたりもした。その際には交渉して、企業の方に材料を提供して頂いたり、そういったことは、コーディネーターがどういろんなものを開拓してくるかによって、うちもやってもいいよ、という企業が結構出てくるもの。学校の教育課程に入れづらいものも、放課後、土曜日、夏休みは意外と親に承諾を得た形で、子どもたちに豊かな体験として、企業と連携したものは入れやすい。是非いろんな地域で展開して頂きたいと思う。

## ⑥幼小連携

これも地域の評判をとっているプログラムで、幼稚園、保育園の児童が小学校に体験をしに来る。放課後の体験も、授業の体験もできる。学校が開く説明会よりも、学校支援地域本部が開く説明会のほうが人が集まる。それは先生たちの連携も含めて、総じてトータルで描かれているコーディネーターの力なのだと思う。

## ⑦放課後の居場所活動

学校にゆとりの教室があるなら、「ただいま」と帰ってくる場を設ける。そこには赤ちゃんがいたり、3～4歳の子どもの放課後遊びに来たり、お兄ちゃんお姉ちゃんたちが遊んでいるところを見ることが出来る。タテの関係を、もしかすると学校の場でもう一度取り戻すことができるかもしれない。日常で難しくても、サマースクールならできるかもしれない。そういうことを一緒に考える仕組みをプラットフォームで、情報の提供をネットワークで、多様な人材にどう協力してもらうか。机上の空論で議論している会議体ならば、必要はない。実践して、自分の足で企業を訪ねるくらいの気持ちで、子どもたちと関わって、プログラムを作りませんか。そういうアクティブなネットワークを作りたいと思っている。待っていても何も起こらない。大人も自分の考えで、こういうものがあったら子どもは楽しいだろうとか、たまには中学生や高校生からも意見を聞いてみる。子どもたちはなかなか意見を言わないが、待てば自分の言いたい、やりたいことを言う。そこから意外と面白いアイデアが生まれてくる。そこで、子どもたちの力で実現するために、裏方として何を提供すればいいかということ、大人が考える。1年に1回くらいやらせると、子どもはものすごく成長する。こんなにいろんなことを考えていたのかとわかると、子どもたちと接することが大変面白く、感動につながる。

## 6. 地域の中のキーパーソンを見つけよう

学校に協力してくれる人は必ず居る。学校を理解してくれる人、先生方の相談相手になってくれる人、地域の状況をよく知った人、情報に耳を傾けそれを形にする力のある人、何よりも、信頼できる人。1人で無理ならばコーディネーター'sにして、放課後も学校の教育支援も、地域教育も全て一緒にやっ払いこう。



## 講義②

### 地域とつながるプログラムが子どもたちにもたらす価値とは？

上智大学総合人間科学部教育学科 教授

奈須 正裕 氏

1961年徳島県生まれ。徳島大学教育学部卒業、東京大学大学院修了。博士(教育学)。国立教育研究所室長、立教大学教授等を経て、現在、上智大学総合人間科学部教育学科教授を務める。専門は、教育方法学。楽しく、且つ力のつく授業づくりをテーマに、学校と共にカリキュラムや授業の開発研究を重ねる教育のスペシャリスト。具体的な事例を挙げながら行う講演は、強い説得力を持ち、教育現場においても高い信頼を得ている。他に、日本生活科・総合的学習教育学会常任理事を務める。



学校現場と共にカリキュラムや授業の開発を研究し、その中でも、子どもたちの暮らし、地域生活と直接関りのある、生活科・総合的学習の向上に力を注ぐ。子どもたちが地域生活現実と向き合い、その過程で教師と子どもたちが、共に必要な資質・能力を自然に身に付けられるように工夫を施す。体験・活動主義だけでなく、実践に即しながら理論化することで、生活科・総合的学習教育を、よりいっそう実のあるものにすべく尽力する。

#### 【おもな著書】

- ◇ 『子どもに確かな学力を育てる』（教育開発研究所）
- ◇ 『学ぶ意欲を育てる学校づくり』（教育開発研究所）
- ◇ 『学校を変える教師の発想と実践』（金子書房）
- ◇ 『学ぶこと・教えることー学校教育の心理学』（金子書房） 等

### 1. 学校はもともと地域のものであった

学校は実はわずか100数十年前にできたもので、学校のない時代は子どもは地域で育った。この時代は、農村において暮らすことと畑で生産する、働くことが一緒であるように、働くことと職住が分離していなかった。子どもたちもその中で、暮らしと同居した仕事の手伝いをし、生産活動に関与しながら学んで成長し、働く・暮らす・学ぶが一体であった。



また、明治時代の学校は、地域のお金で建てられた、近所の人が自由に出入りする「教育・文化センター」だったが、明治14年、「学校集会取締規則」が改訂になり、教育活動以外での学校の使用は禁止になった。地域で作ったものを政府が接収したのである。地域のものでありながら、子どもが人質にとられたようになり、現在の学校に対する違和感、疎外感につながった。

### 2. 学社融合：原点への回帰と新生

学社融合というのは新しいことではない。もともと学校は地域のもので、子どもは地域で育っていたから、学校と地域が結びつき、学校を場にして地域を取り持って子どもと一緒に育てていくというのは当たり前のことである。

近代の学校では暮らしの勉強と、学問、科学、芸術の勉強の2つをすることで、子どもはよりよく育つというねらいがあったが、現在は暮らしの学びのほうがなくなり、学問、科学、芸術の学びだけが残っている状態である。それがいろんな問題を生んでいる今、暮らしや働くことと一体となった学びを復権することが大事である。

また、子育てを考えると、多くの目、多くの手で子育てするというのは、ごく自然なこと。教師や親はどうしても権力関係にあるから、そうではない、近所のおじさんとかお婆さんなど、いろんな人に教えてもらったり褒めてもらったりする、そういう子育てが必要だ。

学校で学問や科学、芸術をするときには年齢で区切らなければならないが、異年齢集団で活動することは自然な状態。このような点で、学力と学校の意味を転換する時期にきている。

### 3. 村を捨てる学力、村を育てる学力

では、どのように転換していくべきなのか。それだけでは子どもがよく育たない、伝統的な受験学力を、「村を捨てる学力」と呼ぶ。それに対し、放課後子ども教室を含め、学校と融合して、子育てを総合的にやっけていく中で育つ学力というのは、「村を育てる学力」と呼ぶ。なぜなら、立身出世主義で中央に行けば出世できるという幻想があり、子どもたちに伝統的な受験学力がつけばつくほど、都市部に出て村から出ていってしまうからである。

また、学歴を積み上げるといい就職ができるという社会の仕組みができ、就学率が上がった。一生懸命お金や手間をかけると将来よいことがあると、投資として勉強をする。これは暮らすこと、学ぶことが一体となった学びとは全く質の違うものである。1980年代に雇用の制度が変わり、終身雇用、年功序列賃金体系がどんどんなくなり、この社会の仕組みは崩壊した。現在は3年以内に、約3割の大学生が離職して転職

しようとし、フリーター問題が起きている。

現在のニートやフリーターは、自分らしい生き方の探し方、進路選択能力がない。その改善のためには、働くこと、暮らすこと、学ぶことが一体となった教育環境に、もう一度再構成しなければならない。現在の環境でこれをするを、キャリア教育と呼んでいる。キャリア教育は、単なる職業教育ではなく、「職業的展望や将来的展望を、自分がどんな生き方をしていくかを考え、自分を見出し、そしてそれを実現できるような資質能力をつけていくもの」である。これは、学校がない時代の子育ての習俗に、ある種復権しようということとも言える。

#### 4. 改心し始めた学校教育を受けて

学校は、学問、科学、芸術をやる場所というのが出発点で、今もそれが中核ではあるが、学校で暮らしも教えよう、悩んで自分を切り拓くことを教えよう、となった。それが総合的な学習の時間であり、生活科である。暮らしは地域だから、地域社会が学びの対象になる。

<文部科学省による総合的な学習の学習対象例示>

- 1) 町づくりや地域活性化のために取り組んでいる人々や組織
- 2) 地域の伝統や文化とその継承に力を注ぐ人々
- 3) 商店街の再生に向けて努力する人々と地域社会
- 4) 防災のための安全な町づくりとその取組

これらを教材にするといっても、ただ教材にするのではなく、大人と子どもが一緒になって考えるということである。

よって、放課後の学習の「学校化」は時代への逆行であり、伝統的な意味でのお勉強、お稽古ごとも含めて、暮らしから離れた「教える」活動から脱却していく必要がある。体験・交流、昔遊びはまさに地域社会の暮らし。だが体験や交流だけでは弱い、もったいない。子どもたちが工夫して学び取っていけるようにプログラムを組んでほしい。教える、教えないの2極分解ではなくて、子どもが学びを実現するような、かつ教えないやり方をお願いしたい。

#### 5. 遊びの善導

望む暮らしを自力で創造するために遊ぶ中で学ぶということ。遊ぶ中で、ある種の意図的な学びが実現されるようにしたい。大人が仕向けないと、そういうふうにしらないので、みなさんには子どもが本気でしたいと思う遊びや活動を作ってほしい。遊ばせる中で、子どもが気づいたり学んだり、遊びを深めていけるように、教師の意図する方向に少し引っ張る。子どもが求めていることをみとり、出発点は必ず子どもが欲していることとして教師の願いをかけ、環境を作り、ひと工夫する。仕組まないと、やはり教育は深まらない。

#### 6. 子どもの求めとは～主体的な生き方更新の最前線～

子どもに聞いた、子どもがしたいことは、本当にしたいことではない。子どもの求めというのは、もっと自分になろうという志でもある。享乐的なものも山ほどあるが、そうではない、その子の志のようなものも



あるはずで、主体的な生き方更新の最前線と表現した。

また、夢、願いとともに、気がかりや不安が求めとして重要である。中学2・3年になると、夢や願いが気がかりになる。目の前の子どもたちはどんな夢、願い、気がかり、不安を持っているのか。

たとえば、私が関わっている農林水産省の教育ファーム事業で感じたことだが、子どもたちは自分で作ったものを食べたい、という願いを持っている。自分の手で育てたものを食べてみたい。彼らは消費者としてだけ、食べ物と向かい合っていることがおかしいと気づいているのだと思う。子どもに迎合したり、ただ言っていることをさせてやるということではなく、彼らの志を見ることが大切である。

## 7. 子どもの求めを扱うポイント

本当の求めというのは、自覚化、言語化できない。何をしたいの？と聞いて、言ったことが本当の求めとは限らない。だから、よく見取ったり、対話してあげることが必要。子どもの世界を見るんだという気持ちで対話してほしい。すると、子どもの願いや志が見えてきて、教材もこんな題材にしようとか、そういったものが見えてくる。子どものしたいことというのも、環境との相互作用で時々刻々変化する。指導者も環境であるので、こんなものはどう？と積極的な関わりをもってほしい。また、価値ある学びに結びつく見込みのあるものを選択的に取り上げることも重要。学びが深まってこそ、子どもも満足する。

## 8. 子どもが問題解決する

活動が上手く進むようにプログラムを組むのは間違い。気付くはずのことを、先生がみんな取り上げていることがある。上手く進むことを優先したプログラムだと、いくらやっても学びはゼロになる。つまり、活動が上手くいくと人は学ばない。できなかったことを、自分で乗り越えたときに成就感がある。今は周りの大人がおせっかいをしすぎだ。全て子どもにさせてほしい。子どもたちにやりたいことをやらせ、問題にぶつからせること。やりたいことなら、問題にぶつかっても自分たちで解決できる。また、全くできないことでもやめてしまうので、ちょっとうまくいかないくらいのハードルの調整をすると、子どもたちはどんどん自分で乗り越えていく。

## 9. 地域生活現実学びの宝庫

乗り越えさせるという意味で、本物を目指すというのが大事。そこそこのものだと、大したハードルにぶつかからない。本物に出合わせると、大人が抱えているいろんな問題にも子どもは直面して、こういうことではないか、といろいろ学びを深めていく。

- ・異年齢集団というアドバンテージ
- ・地域を本気で探検しよう
- ・地域の大人は何よりの教材
- ・お勉強やスポーツも、先生以外に教わるだけで気分一新

このようなポイントで、地域での生活や現実学びがいっぱいである。



## 10. 灯台もと暗し

地域を教材化しようとする、自然が豊かな地域だからこそ知らない自然の豊かさがあつたりするなど、子どもに教えてみて地域のよさに初めて気付く。何もないところなんてない。子どものことであれば、大人の複雑な利害を乗り越えられ、地域のコミュニティ形成にもつながると期待したい。



地域には教えたい人はたくさんいて、社会教育の授業をいくつかやったが、教えたい人のほうが多くて、学ぶ人が少なかった。暮らしの中で、働く中で学ぶのだと考えれば、真っ当に生きているすべての人が地域の指導有資格者である。科学や学問の勉強をするようになり、暮らしの勉強のほうが強くなってしまったことが今の問題。地域と組んで、暮らしの勉強を充実させていかねばならない。その1つの場として、放課後子ども教室は非常に有効。学問の勉強と暮らしの勉強が、学校場で一体になり、地域に学校が戻される形になる。学校教育は地域の勉強があつて初めて成り立つので、地域の活動によって、学校教育も良くなる。お互い学びあつて、いい形で進んでいきたい。

事前アンケートで得られた参加予定者の課題解決を目指した分科会により、個々の課題要因とその手立てを探っていきます。参加者のネットワークづくりと情報交流を核にしたワークショップを行いながら個々の課題解決のための具体策を策定します。

分科会で検討したいテーマ内容	人	構成率	
人材確保・育成方針について	16名	17.8%	→分科会①で対応
場所の確保について	4名	4.4%	
予算確保について	6名	6.7%	
地域資源の活用方針について	8名	8.9%	
学力向上方策としての活用について	5名	5.6%	→分科会③で対応
学校・地域・家庭が望む実施内容とは	9名	10.0%	→分科会③で対応
学校支援地域本部との連携について	20名	22.2%	→分科会②で対応
児童クラブとの連携について	9名	10.0%	
子ども・保護者が望むプログラムとは	10名	11.1%	→分科会③で対応
子どもへの対応について	3名	3.3%	
保護者への対応について	名	0.0%	
	90名		

分科会①
<p><b>人材確保（育成）について</b> [分科会のゴール]</p> <p>人材確保・育成に関する課題を整理し、他の情報を参考に具体的な人材確保・育成計画を策定する</p>
<p>アクティビティ① 『分科会のゴール設定と情報共有』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現在の状況確認</li> <li>・共有&amp;自己紹介</li> </ul> <p>アクティビティ② 『人材確保に関する現状を把握する』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現状の整理</li> <li>・確保手法について情報共有</li> </ul> <p>アクティビティ③ 『人材育成に現状を把握する』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・現状整理</li> <li>・育成手法について情報共有</li> </ul> <p>アクティビティ④ 『人材確保・人材育成計画を策定する』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的な計画立案</li> <li>・情報共有及び再考</li> </ul>

分科会②
<p><b>他事業との連携について</b> [分科会のゴール]</p> <p>他事業との連携を図るために各事業の関連性を整理し、他の情報を参考に具体的な連携策を策定する</p>
<p>アクティビティ① 『全体像を把握する』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・関連事業に関する洗い出し</li> <li>・グループで共有</li> </ul> <p>アクティビティ② 『放課後子ども教室の実情を把握する』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・運営組織について整理</li> <li>・放課後子ども教室の課題整理</li> <li>・関連がもてそうな事業洗い出し</li> </ul> <p>アクティビティ③ 『放課後子ども教室の充実発展のために』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・参考事例やアイデア収集</li> <li>・すぐに取り入れる他者のアイデア整理</li> </ul>

分科会③
<p><b>効果的なプログラムについて</b> [分科会のゴール]</p> <p>子どもにとって効果的なプログラムの要素を整理し、他者の情報を参考にプログラム情報を整理、導入計画を策定する</p>
<p>アクティビティ① 『プログラムは何故必要かを考える』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・児童の状況、現在のプログラム目的、実施状況確認</li> <li>・共有&amp;自己紹介</li> </ul> <p>アクティビティ② 『いろいろなプログラムから学ぶ』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・実施されているプログラム整理</li> <li>・放課後子ども教室で使うプログラムの課題</li> <li>・導入したいプログラム優先順位付け</li> </ul> <p>アクティビティ③ 『効果的なプログラムを策定する』</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の教室で導入したいプログラム整理（個人&amp;グループ）</li> </ul>

## 分科会① 「人材確保」について

### 【分科会の目的・目標】

本分科会では、人材の確保・育成をしていくために参加者が各地域、教室毎に必要な人材を明らかにすること、目的に応じた人材の確保・育成が必要であることを確認し、本分科会への参加者自身が「求める人材」や育成の方法について具体的に整理することを目的とする。そのための手法として、「個人ワーク」→「グループワーク」→「全体共有」という流れでワークショップを実施し、参加者同士が知恵の共有を図れるように意図した。

### 【分科会での結論】

効果的な人材確保のためには、

- ①各教室における活動指針や、活動計画を具体的にした上で、
  - ②必要な人員(いつ・どこに・何人)と
  - ③人材に求めるもの(能力・分野 等)を
  - ④具体的に外部に向けて提示、発信することが不可欠である
- ということを確認した。また、人材育成のためには、

- ①教室運営にあたっての目的や目標を具体的に提示し、
  - ②携わっている人たちが、実践すべき活動(行動)について、明確にする仕組みづくりが必要である
- ことについても確認した。



### 【今後の方向性】

社会教育と学校教育、相互に連携して人材募集広告的な情報(例えばチラシやポスターなど)を発信したり、体系立てた研修プログラムを開発して人材を育成することが求められる。

## ●分科会の展開

最初に参加者の意識を一定レベルまで引き上げた上で、テーマである「人材」の要素や確保の方法について参加者の情報共有を図る。さらには、「人材」の育成方法と課題について参加者が意見交換し、各々の課題解決へ向けての方法を探る。

### 【ステップ 1】

分科会のウォーミングアップとして、参加者がペアになって気づきと継続の困難さを体感するワークショップを実施。

続いて、参加者の相互理解が深まり、それぞれがどういう意識で分科会に臨んでいるのかを参加者全員が把握するため、1人ずつ自己紹介。

### 【ステップ 2】

教室運営に必要な人材と、その人材に求められる能力について話し合い、効果的な人材確保の方法についても情報を共有。

<アクティビティ①のワークシート>

### 【ステップ 3】

コーディネーターと学習ボランティア、それぞれの育成方法について話し合った。また、生重氏のアドバイスによっても情報を共有。

<アクティビティ②のワークシート>

## ●ステップ①：自己紹介を通しての人材確保・育成、課題の発表

分科会参加者の自己紹介とあわせて、参加者の感じる各地域、各教室の人材確保・育成に関する課題の共有を行った。参加者からは、課題として、「育成したくても人が集まらない」「子ども(地域)のニーズにあった人材の確保ができない」「人材の能力向上の方法がわからない」などが挙げられた。人材の確保・育成については、多くの地域で課題となっており、その課題の内容については共通したものが多いことを把握することができた。

## ●ステップ②：人材確保に関する現状の把握

まず、各地域において、教室を運営していく上で、必要な役割とその役割に求める能力について挙げるワークを実施した。

個人で、そのような人材を確保するために用いている手法について整理をし、次にグループになって、必要な役割と、その役割を担うことのできる人材を確保するために実施している手法について、参加者それぞれの立場(市職員、コーディネーター、指導員 等)で考え、共有した。

その後、各グループの代表者が意見をまとめ発表するという形で、全体共有を行った。参加者からは、必要な役割として、「コーディネーター」「学習ボランティア」「安全管理員」「指導員」「ジュニアリーダー」などがあがった。

次に、効果的な人材確保の方法について、具体的に整理するワークを実施した。

①自身が人的ネットワークを持っている、②プログラムの提案ができ、プログラムに必要な人材の確保ができる、③情報を持っている、必要な情報や情報を集める力がある、この3つの条件を満たしている人を「コーディネーター」、放課後子ども教室にて、「安全管理員」や「指導員」を含む子どもたちのサポートをする人を「学習ボランティア」と位置づけた上で、グループ毎により必要としている役割のどちらか一方を選び、その役割に適した人材を確保するための手法の整理を個人で行った後、それをもとに最も効果的だと思われる人材育成の手法についてグループでの共有を行った。

全体共有の場では、「コーディネーター」の確保のために、「現在のボランティアスタッフをコーディネーターとして育成する」、「他事業(例:学校地域支援本部事業)との連携(コーディネータの兼任)」などの手法が挙げられた。

生重氏からは、人材確保の方法として(学校の中に放課後子ども教室をつくっている場合は)、他事業(例:学校地域支援本部事業)との連携や、地域の人や学校にも地域にも信頼されている人(学校長や教育長などが推薦する人)を「一本釣り」して、地域がその人を中心にみんなで連携しながら活動ができるネットワークをつくる、という具体的なアドバイスがあった。

「学習ボランティア」の確保の手法としては、「保護者への協力要請」「多くの人が入るきっかけ 循環するきっかけをつくる」などが挙げられ、より多くの人々の参画を促すことができるような仕組みづくりをする必要性が挙げられた。

効果的な人材確保の手法

コーディネーター
・嘱託職員として公募
・現在のボランティアスタッフを育成する(スタッフから昇格)
・既存の地域人材バンクを活用
・OJTの実施[現場を体験してもらう]
・安全管理員が兼務し、育成する
・他事業(学校支援地域本部)との連携(コーディネーター共有)
・行政職員をコーディネーターとし、現場にて人材を探し育成する
・一人ではなく、複数の人で役割を分担する

効果的な人材確保の手法

学習ボランティア
・他事業(地域支援本部等)との連携
・求める人材に応じた広報活動の実施(若者一人式・学校)
・民間企業との連携
・保護者への協力要請
・学校・教委との連携
・有償での募集(謝礼は検討が必要)
・多くの人が入るきっかけ・循環するきっかけをつくる
・階層毎に情報をアウトプットする(情報の共有)

このワークを通じて、必要な人材を確保するためにどのような手法を  
実践しているのかについて共有することができただけでなく、各教室に  
おける人材確保の状況、確保の上での課題等の情報交換もおこなう  
ことができた。



### ●ステップ③：人材育成に関する現状の把握

人材確保のワークと同様に、まずは個人ワークで、「コーディネーター」「学習ボランティア」のどちらかの役割について、現在、各教室で実践している人材育成の手法について整理し、グループ内で共有をおこなった。

次に、「コーディネーター」「学習ボランティア」について、今後どのように育成していくべきか明らかにするために、人材育成の方法について各自で整理した手法をもとに、グループで最も効果的だと思われる育成方法について話し合った。

全体共有の場では、「コーディネーター」の具体的な育成方法として、「事例検討会の実施」「現場での研修会の実施」「人材育成を体系的におこなう仕組みをつくる」など、地域の状況にあった提案する力、具体的に人を動かす方法(人に気持ちよく動いてもらうための方法)について学ぶ機会を設ける必要性が挙げられた。

「学習ボランティア」の育成手法としては、「各教室のニーズに応じたスキルアップのための研修会の実施」「ジュニアリーダーの育成(子どもの頃から意識を育てる)」など、ボランティアが現場の中で求められる力について学び取る仕組みをつくるのが手法のひとつとして挙げられた。

また、「コーディネーター」「学習ボランティア」ともに、各教室で起こっている問題の共有と解決、スキルの向上、人材交流のための研修会や情報交換会などの開催の必要性についても確認することができた。

参加者から、人材確保と育成は切り離して考えるものではなく、  
目的に基づいて必要な人材を計画的に確保し、育成していくことが必要であるという意見が挙がり、人材育成のために「目的」と「計画」を持つことの必要性も明らかにすることができた。

生重氏からは、効果的な人材育成の手法として、「コーディネーター」「学習ボランティア」の両者ともに、まずは最初の段階(例えば「初任者研修」)で、地域がどんな子どもを育てたいと考えているのか、明確なビジョンや理念の共有をした上で、そこに参加するという認識を持ってもらうことが重要というアドバイスを頂いた。

「コーディネーター」については、具体的な状況に対する対処の方法を学ぶワークショップの実施、地域にあった例題をもとにして、具体的にどのように人を動かすか(だれに頼むか、何人に頼むのか、なにをするのか、等)について考える練習をするなどの提案があった。

また、「学習コーディネーター」については、募集する際に「どんな人材が必要なのか」をあらかじめ具体的に示し、参画してくれた人の居場所を確保した上で、他の活動にも参加して関わってもらえるよう促し、次の野ステップとして、子どもたちと関わる中で出てくる課題に対して対応するためのスキルについて学んでもらえるような仕組みをつくることの必要性が挙げられた。

**効果的な人材育成の手法**

**学習ボランティア**

- ・カリスマ指導者から学ぶ
- ・研修会開催(指導者から学ぶ機会を作る、ニーズに応じた研修、子供を守り育てるためのスキル(救急など)、定例会、子供だけの会議、)
- ・学生と子供がかかわる機会を作る(学生ボランティアになるきっかけをつくる)
- ・環境づくり(子どものころから他者を機にかける姿勢を育てる)
- ・PR活動の実施(活動内容、現状報告)
- ・地元大学との交流(プログラム開発)
- ・近隣教室同士での情報交換会、交流会の実施
- ・子どもの時からリーダー育成＝ジュニアリーダー

**効果的な人材育成の手法**

**コーディネーター**

- ・事例検討会 (子どもたちを参加させ、ニーズ・現状を的確に把握する)
- ・現場での研修会の実施 (課題に応じてアドバイスももらえる状態を作る)
- ・スタッフに役割を任せ、主体的な参加を促す
- ・人材育成を体系的に行う仕組みを作る(人材バンク等の活用・専門知識がある人を講師で招く)
- ・教室に向向き、ニーズに応じた研修を実施する
- ・コーディネーター同士の情報交換の機会をつくる
- ・説明会を開き、コーディネーターに事業内容を周知させる
- ・役割を伝える場をつくる＝育成の機会

## ●人材確保・人材確保育成のため

生重氏より、教室を運営していくにあたっては、

- ①地域との情報共有・連携が重要であり、子どもたちの実態や地域の状況に応じた人材の確保が必要である
- ②人材育成のためには、具体的な活動内容を提示した上で、それに対して協力してもらいたい役割を地域や周囲の人々に認識させ、できる役割を個々に担ってもらう  
が必要であるという指摘があった。

各自での具体的な人材確保・育成計画の立案には至らなかったものの、各自が自身の担当教室における人材確保・育成における課題を明確にし、整理することができた点、本分科会のアドバイザーである生重氏から、人材の確保・育成のための留意事項を具体的にご指導いただいた点などから、参加者が今後、人材確保・育成をおこなっていくに当たって課題を解決するための糸口を各自が持ち帰ることができたと思われる。

### 人材を確保・育成するために

#### コーディネーター研修

- ★理念の共有・・・地域で育てたい子どもの力、イメージを共有する  
(このような子供たちを育てるために必要なものはなんなのか?)
- ・人を動かすために準備することは何かを具体的に考える。(いつ、なにを、何人の人に)

#### 学習ボランティア

具体的なプログラム(年間計画)に対して、どんな準備(人・モノ)が必要なのか考えて実行する。

- ・人材に求めるもの(能力・分野 等)を具体的に提示する  
参画する人がどんなことをしたらいいのか、わかりやすく提示  
(得意なことから始める→敷居を低くする)
- ・各教室のニーズを明らかにし、発信することが、人材確保・育成のきっかけとなりえる

## 分科会② 「他事業との連携」について

### 【分科会の目的・目標】

本分科会は、

- ① 放課後子ども教室推進事業と関連する他事業について、参加者が理解を深めること
- ② 関連する他事業との効果的な連携方法について、参加者がその「鍵」を理解することを目標として開催された。

### 【分科会での結論】

①については、「学校支援地域本部事業」（文部科学省事業）や「子ども放課後環境教育プロジェクト」（環境省事業）など、子ども育成に関わる他事業について、ファシリテーターから説明がなされ、参加者は、多岐にわたる関連事業について改めて認識するとともに、各事業の特徴について一定の理解を得たといえる。

②については、取組主体（自治体や子ども教室自体）によって効果的な連携方法が異なるため、分科会において共通した答えを出すことはめざさなかった。しかしながら、参加者の事例紹介（連携が成功しているケース）を全体でいくつか共有する中で、効果的な連携を実現させる際に共通して重要となるのが、連携のための効果的な「情報収集と情報分析」及び連携する者同士の「認識共有」が不可欠であることが確認された。

### 【今後の方向性】

連携できる事業についての情報収集と、分析できるしくみを策定する必要がある。そのためには文部科学省による連携事業の紹介や、実践者同士が情報共有・交換できる場の設定が求められる。

## ●分科会の展開

まず個人の目的について、参加者の情報を共有。テーマである関連する他事業について参加者で意見交換、ファシリテーターが解説。次に課題について考察し、取り入れたいアイデア・事例を考え、効果的な連携を探る。※参加者同士の交流を促進し、主体的にワークに参加してもらうことを目的に、グループワークを基本とした進行を行った。

### 【ステップ 1】

分科会のウォーミングアップとして、参加者がペアになって気づきと継続の困難さを体感するワークショップを実施。  
分科会に臨む意識の共有。



<アクティビティ①のワークシート>

### 【ステップ 2】

放課後子ども教室の運営について把握し、関連する他事業について洗い出し、個人→全体で共有し理解を深める。次に現在の課題、課題を解決するための課題を挙げる



<アクティビティ②のワークシート>

### 【ステップ 3】

有効なアイデアや事例を参加者から発表してもらい共有し、今後取り入れたい内容を考える。  
最後に、効果的な連携についてまとめる。



<アクティビティ③のワークシート>

## ●ステップ①：自己紹介

参加者の相互理解が深まるよう、またそれぞれの参加者が何を期待して本分科会に参加しているのかの情報共有を目的に、一人1分以内で自己紹介をおこなった。

本分科会の参加者の大部分は、教育庁や教育委員会で社会教育や学校教育を担当している行政職の方であった。自己紹介の中では、「学校支援地域本部事業などの関連する事業について、その実態や放課後子ども教室推進事業との違いがよくわからないので教えてほしい」という率直な声や「限られた予算の中で事業を展開していくには、連携による工夫が不可欠」「連携の必要性は認識しているものの、そのグランドデザインが描けないので、ヒントを得たい」などといった、参加者が抱える具体的な課題も聞かれた。

また、実際に教室を運営している参加者からは、「学童クラブや児童館との連携がうまくいかずに困っているので、その打開策を得られれば」といった声が寄せられた。自己紹介を通じ、参加者のほとんどが、他事業との連携についての問題意識を持って分科会に臨んでいることがうかがえた。

## ●ステップ②：関連する他事業について理解する

ここでは、上述の目標「①放課後子ども教室推進事業と関連する他事業について、参加者が理解を深めること」を達成するためのワークとした。活動の流れとしては、①知っている他事業を列挙する（個人ワーク）②グループで意見を共有する③全体で意見を共有する④各事業の内容と相互の関連性について確認する（ファシリテーターより解説）の4ステップを踏んだ。

個人ワークやグループワークでは、「学校支援地域本部事業」や「地域ぐるみの学校安全体制整備推進事業」「スクールソーシャルワーカー活用事業」などの事業名が比較的多くの方から挙がっており、参加者の他事業についての認識の高さがうかがえた。しかしながら、自己紹介の際にも多くの意見にあったように、「事業の名前は知っていても実際の事業内容がわからない」「各関連事業は、放課後子ども教室推進事業と何がどう違うのか？」など、各事業の本質的な理解までは至っていない人が多いのが実情であった。この点についての理解を促進するため、ファシリテーターより、「文部科学省が推進する次の事業について、それぞれの特徴の解説を行った。中でも「学校支援地域本部事業」については、「放課後子ども教室推進事業」と特に関係が深いことから、その体制や活動内容について、詳細な解説を行った。

- ・ 放課後子ども教室推進事業
- ・ 学校支援地域本部事業
- ・ 地域ぐるみの学校安全体制整備推進事業
- ・ スクールソーシャルワーカー活用事業
- ・ スクールカウンセラー等活用事業
- ・ 家庭教育支援基盤形成事業

また、文部科学省以外が推進母体である「子ども放課後環境教育プロジェクト（環境省事業）」及び「放課後児童クラブ（厚生労働省）」について、放



課後子ども教室推進事業との関連性に触れながら紹介を行った。これらにより、代表的な関連事業である上記二事業と学校支援地域本部事業について、放課後子ども教室推進事業との関係性が可視化された。

本ワークの最後に、複数にまたがる事業を連携して取り組んでいる事例を参加者より情報共有いただき、他の参加者にとって、各事業の関連性について具体的なイメージを持つためのよい機会となった。

(大阪府教育委員会：府の独自事業や学校支援地域本部との連携等、  
三重県教育委員会：児童クラブと子ども教室が互いに連携)

## ●ステップ②：放課後子ども教室の実情を把握し、課題を洗い出す

ここでは、参加者が関与している放課後子ども教室推進事業の具体的な取組について、客観的に分析しながら課題を洗い出し、後の解決策を考え出すワークにつなげることを試みた。具体的には、①現時点での課題 ②課題を解決するための課題 の2点について、適宜グループのメンバーと相談しながら個人で考えてもらった後、全体で意見の共有を行った。

ここで出てきた意見としては、活動場所や人材確保、プログラムの充実、組織体制に関わるものなど、参加者が抱える課題は多岐に渡っていることが明らかになった。参加者より挙げた「課題」及び「課題を解決するための課題」は以下のとおりである。(課題は分野別に分類している。)

### <活動場所>

- ・活動場所が手狭になっている→新たな活動場所の開拓、確保 など

### <人材確保>

- ・ニーズの高まりに伴い、スタッフの確保が追いつかない  
→スタッフの増員、スタッフのスキルアップ など

### <プログラム>

- ・単に遊ばせるだけでなく、子どもたちの発達状況に応じたプログラムを開発する必要性が出てきている→新しいプログラム作り、プログラム開拓 など

### <組織体制>

- ・学童クラブとの折り合いの問題（有償である学童クラブと対立しやすい）  
→双方のよさを生かす方法を模索し、共存をめざす など



## ●ステップ③：今後取り入れたいアイデアや事例を考える

最後のワークとして、「先のワークで出た課題を解決するため、今後自らの取組にどういったアイデアや参考事例を取り込むとよいか」考えてもらった。その際、①ヒト ②プログラム ③しくみや体制の3領域に分け、それぞれに有効なアイデアを考えてもらうようにした。また、個人で考えさせつつも、限られた時間で参加者が多くのアイデアや参考事例を吸収できるよう、参加者

から先行事例を公表してもらい、それを共有することに重きを置いた。参加者から出た事例は次のとおりである。これらは解決策を模索中の参加者にとって、有益なヒントとなったのではないかと考えられる。

<ヒトの問題に対して>

- ・人材確保のため、PTA と連携をはかる
- ・人手不足を解消するため、大学生ボランティアを活用する（学校支援地域本部と連携し、いずれの事業にも同じ大学から人を派遣してもらえるようにする）

<プログラムの問題に対して>

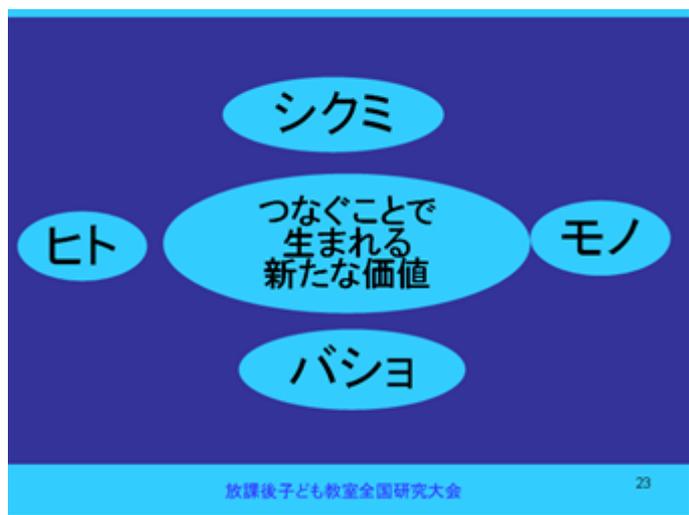
- ・夏期休暇や冬期休暇に実施するプログラムについては、児童クラブと合同で行うなどし、相互に切磋琢磨してプログラムを向上させていく

<しくみや体制問題に対して>

- ・スタッフ研修を「学童クラブ」と「放課後子ども教室」との合同で行い、日常の業務における問題や相談事を共有できる人的ネットワークとして機能させる

### ●ステップ③：総括

今次のワークのふりかえりを行い、次のとおり結論づけられることを確認した。



- 「連携ありき」ではなく、今ある課題を解決するために「連携」が最善の策と考えられる場合、あるいは連携することで新たな価値が生まれる場合に連携に取り組む
- 効果的な連携を行う上での鍵となるのは、「①情報収集と情報分析」と「②認識共有」であること

⇒「①情報収集と情報分析」

効果的な連携を行うためには、常にアンテナをはって他事業についての情報収集をする必要があるし、集めた情報の中から、どことどのように連携すれば新たな価値が生まれるか冷静に見極める必要がある

⇒「②認識共有」

連携によって価値が生まれる場合でも、担当者同士が連携の意義や方向性を共通認識していない限り、効果的な連携が実現しにくい。例えば実現してもそれは「かたち」だけのものになってしまう。



## 分科会③ 「効果的なプログラム」について

### 【分科会の目的・目標】

本分科会は、「放課後子ども教室」を企画・提供・実施する団体が、各地域での実践事例の共有を通して、「活動プログラム（実施内容）」の役割を認識し、各地域の地域資源や環境などの条件や課題に即した「効果的なプログラム」について、分析・開発・計画・実践するための「手法」を理解、検討する場とした。

### 【分科会での結論】

本分科会では、「放課後子ども教室」で企画・提供・実施する「効果的なプログラム」とは、運営・提供する団体側が活動の目的やねらい＝目標を明確に意識し、その目標に応じた活動そのものであることを確認した。またその活動は、各地域の条件や、子ども・保護者・学校・地域が望む実施内容（テーマ）にそって計画・開発・実践する必要があることもあわせて確認した。

### 【今後の方向性】

コーディネーター研修などによりプログラム実施者のレベルアップを図ると同時に、効果的なプログラムの認定・普及や、実践者同士が情報交換できるしくみの制定が求められる。

#### 本分科会の目標

プログラムの役割を認識し、  
現状にそくした  
『効果的なプログラム』について  
分析・開発・計画・実践するための  
手法を理解する

放課後子ども教室全国研究大会

#### 効果的なプログラムとは…

子ども達の実態や地域の状況に応じて  
活動の**目的やねらい＝目標**を決定し

目標に応じた  
テーマごとの活動そのものです

放課後子ども教室全国研究大会

## ●分科会の展開

最初に参加者の意識を一定レベルまで引き上げ、現在の活動や課題について、参加者の情報共有を図る。次に現在の活動プログラムのねらいを抽出し、テーマごとに分類した。さらに課題点を参加者全員で話し合い、必要な要素の共通認識をもった。

### 【ステップ 1】

分科会のウォーミングアップとして、参加者がペアになって気づきと継続の困難さを体感するワークショップを実施。

続いて、参加者の相互理解が深まり、それぞれがどういう意識で分科会に臨んでいるのかを参加者全員が把握するため、1人ずつ自己紹介。

また、全国の活動や課題の情報交換を行い、違いや特徴を共有した。

### 【ステップ 2】

現状の「プログラムの目的やねらい」を抽出し、テーマごとに分類し、グループ内で共有。



<アクティビティ①のワークシート>

### 【ステップ 3】

効果的課題なプログラムを提供するために、どのような点が課題かを参加者全員で話し合った。



<アクティビティ②のワークシート>

## ●ステップ①：自己紹介を通して各地域団体の活動現状の確認

本分科会に参加された各地域の方々の活動報告（発表）を聞き、他地域での活動や課題を、自地域での今後の展開に活かすため情報交換を行った。

活動形態や参加者の違いなど、とりまく環境がそれぞれに違う中での運営・実施の特徴などを共有し、全国での活動の現状や広がり把握することができた。

## ●ステップ②：活動プログラムのねらいの抽出

現在実施している各地域での活動をベースに、現状の「プログラムの目的やねらい」を抽出するワークを行った。プログラムの目的やねらいの抽出にあたっては、現在各地域で実施している具体的な活動を思い起こしてもらい、それらの活動が、どのような目的やねらいをもって実施されているのか、言語化・明確化することを重視した。それぞれの活動に対して“ねらい”



はあるものの、子どもたちの育成にどれだけ効果があるのかは不明であるという意見も聞かれた。また、事業に携わるスタッフ全員が同じ意識を持って活動しているかどうかについても、課題として挙げられた。

## ●ステップ②：活動プログラムの分類

プログラムのねらいを明確にしたところで、プログラムをテーマごとに分類し、それぞれのテーマについて、現在各地域で実践している活動をグループ内にて共有した。共有後、再度それぞれの活動にどのような“ねらい”があるのか確認した。現在のプログラムにどのような“ねらい”があるのかを明確にすることで、

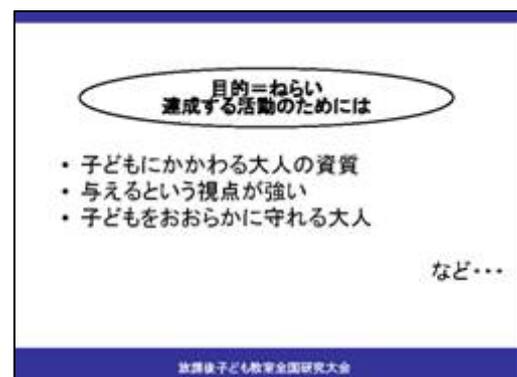


提供者側の意識の向上・変革が期待される。参加者からは「何気なく活動していたが、あらためて考えるきっかけになった」「そんな事を意識しないとダメなのか」「そうか、この活動にはそんな意味があったのか」などの意見も聞かれた。

## ●ステップ③：効果的なプログラム実践のための課題

放課後子ども教室に参加する子どもたちへ効果的なプログラム提供するために、どのような点が課題かを参加者全員で話し合った。

今回の分科会では「事業にかかわる大人の資質」についての課題が挙げられた。大人にはどうしても、



「やってあげるといふ与える視点」が強くなってしまい、子どもたちの主体性を引き出す活動ができていない、もっと大らかに子どもたちを見守ることのできる大人が求められるといったことなどが意見としてあげられた。

ざんねんながら時間の関係上、課題を解決するための具体的な手法についての話し合いには至らなかったが、数名から、やはり子どもたちの学びや育成につながる、活動の“ねらい”を明確にしたプログラムを意識し、スタッフ・保護者など、関わる大人全員がその意識を共有することが大切であることが述べられた。

この分科会を通して、【分科会での結論】にもあるように、効果的なプログラムを提供するためには、運営・提供する団体側が活動の目的やねらいを明確に意識し、各地域の地域資源や環境などの条件や子ども・保護者・学校・地域が望む実施内容をふまえた上で、重点化するテーマにそって開発・計画・実践しなければならないことを参加者全員の共通認識として持ち帰ることができた。

**活動の目的やねらい＝目標が  
不明確だと**

**プログラムの選定基準が不明確であり**

**実施後の評価が不明確になる**

放課後子ども教室全国研究大会

## 今、なぜ地域との連携が必要なのか

### ～公教育に求められるつなげる力～

前・杉並区立和田中学校校長      大阪府知事特別顧問      藤原 和博 氏

1955年生まれ。78年東京大学経済学部卒業後リクルート入社。

東京営業統括部長、新規事業担当部長などを歴任。93年からヨーロッパ駐在、96年から同社フェロー。03年4月から杉並区立和田中学校校長に、都内では義務教育初の民間人校長として就任。キャリア教育の本質を問う[よのなか]科が『ベネッセ賞』、新しい地域活性化手段として「和田中地域本部」が『博報賞』、給食や農業体験を核とした和田中の「食育」と「読書活動」が『文部科学大臣賞』をダブル受賞し一挙に四冠に。「私立を超えた公立校」を標榜して「45分週32コマ授業」を実践。「地域本部」という保護者と地域ボランティアによる学校支援組織を学内に立ち上げ、英検協会と提携した「英語アドベンチャーコース」や進学塾と連携した夜間塾「夜スペ」に取り組み話題に。



和田中をモデルとした「学校支援地域本部」の全国展開に文部科学省が50億円の予算をとったため、08年4月からは校長を退職して全国行脚へ。

橋下大阪府知事から教育分野の特別顧問を委託され、大阪の小中高の活性化と学力Upに力を貸す。

全著作並びに活動の紹介は「よのなかnet」<http://www.yononaka.net>に。

3児の父で3人の出産に立ち会い、うち末娘を自分でとり上げた貴重な経験を持つ。

#### 【おもな著書】

- ◇ 『「ピミョーな未来」をどう生きるか』『新しい道徳』（ちくまプリマー新書）
- ◇ 民間校長への応募を呼びかける『校長先生になろう！』（日経BP社）
- ◇ 『人生の教科書[よのなかのルール]』『公立校の逆襲』『誰が学校を変えるのか』（ちくま文庫）
- ◇ 『つなげる力』（文芸春秋）

### 【講演要約】

和田中学校の経営実践を元に、学校を取り巻く現状、なぜ地域との連携が必要なのか、人材を集める手法、[よのなか]科の実践を通しての魅力的なプログラム作りについてお話しいただいた。

20世紀は成長社会だったが、21世紀の現在は多様化、複雑化した成熟社会。社会の変化に伴う、一人ひとりの価値観の多様化により、子どもたちの状態も多様化していることから生徒を指導する先生の負担が格段に増加している。これを解消するために、先生の仕事を授業と生活指導に絞り、できない生徒の補習、できる生徒の引き上げなどの学習支援を土曜日や放課後の時間で大学生やボランティアという地域の人材に託すという、和田中の学校支援地域本部の活動内容からその意義と効果的な運用を具体例で提示。

学校の先生にすべて任せるのではなく、放課後子ども教室や学校支援地域本部という形で学校の中に作られた地域社会と職員室が協力する、ネットワーク型学校経営が必要であることを示唆。

また、和田中の例を通して、学校の緑や図書室の整備など学校が必要とするものについて、その経験を有する人やそれらに関心をもつ地域の大人が集まり、活動することでコミュニケーションが起これ、大人と子どもの関係が自然にできるなど、子どもは大人のコミュニケーションから学ぶことを具体的に説明。

独自に開発した大人と子どもがともに学ぶ[よのなか]科の特徴を具体的な事例で紹介。子どもにとって身近な社会のテーマや素材を題材に外部講師を招いたり、互いに議論することで参加する子どもと大人が共に学び合う。子どもにとって大人の学ぶ姿が最高の教材だからこそ、多様な大人を子どもたちのそばに招き入れるしくみ、つまり放課後子ども教室や学校支援地域本部が重要な役割を担うと強調。

最後に、「自己犠牲ではなく、楽しいと感じながら学ぶ大人が集まると、子どもたちの学力や思いやりは自然に高まる」と、参加者を激励するメッセージで締めくくられた。

## 【講演全文】



最初にこの数字を言うと皆さん驚かれると思いますが、今現在、和田中学校の学校支援地域本部は、公費、私費合わせまして、公費が恐らく200万から300万の間じゃないかと思いますが、私費をそれに合わせまして、年間で1700万円の予算を動かしています。1700万円の予算、これはPTA活動に詳しい方はお分かりだと思うんですが、300人から400人ぐらいの生徒の学校ですと、大体PTAの年間予算で、一人一家庭が3000円ぐらいと、年間ね。そうしますと、大体100万円から120万ぐらいの間だろうと思います、どこでも。分かりますね？その約15倍の予算を動かして子供たちの学びを豊かにするというをやっているわけです。

何をどういうふうにやっているか、それからその人材をどのようにして集めたかということについて、多分皆さんの共有課題としても、どうやって人材を確保するのかという、それが大きなテーマにあったと思いますので、それとの絡みで2番目にしっかりとその辺の話をしたいと思いますね。

それで最後に、魅力的なプログラム作りというのもこの課題としてテーマに上がっていたと思いますけれども、これは私が強烈に皆さんにお勧めしたい、私がずうっと学校の授業でやりました「よのなか科」のようなものを皆さんがもし仕掛けていくとしたらどういうやり方があるかですね。それによって、皆さん自身の、コーディネーター自身の、あるいは社会教育主事さん自身の人生を豊かにしていただける、その大きなきっかけになるんです。それは一体どういうことか。結論として申し上げたいのは、せっかく皆さんこの仕事をやるのに、なんか自己犠牲で、もうとにかくやらないかなあみたいな感じでですね、それは子供たちの未来のためには、あるいは子供たちの今を支えるには、本当に実はそういう面もありますよね。日本の家庭の約3割ぐらいは相当厳しい感じになっています。離婚も虐待も、もう私が校長をやっていた5年間でもどんどん増えていってますし、それから、例えば東京なんかでは児童相談所はもう満杯です。一時保護所がもう完全に満員になっていますので、予防的に、例えば虐待していると明らかに分かっているんですけど、家族から分離して一時保護所に子供たちを逃がすことができないんですね。だから、事件が起こるのを待つしかないというわけですね。そういう状態にまでなっているわけですね。

その中で、例えば3割ぐらい厳しいと今言いましたけれども、中でも1割ぐらいの家庭については、もう完全にその家庭でのフォローが効かないというような感じ。学校長としては、もう本当に家族から完全に分離して合宿させたいぐらいの気持ちですね。そういうふうになるような、そういう状況に今はなっています。

東京だけではなくて、全国で相当厳しい家庭が増えているんじゃないかと思うんですね、今日、今この瞬間にもですね。だから、それをフォローして何とか支えていこうという、これが非常に大事なところなんです、そこから一歩ちょっと踏み出して、ある仕掛けを皆さんが少し覚えていきますと、その仕掛けによって皆さん自身の人生が豊かになる。ネットワークが豊かになって、そこで起こる学習そのものが、例えば小学校の低学年とやる学習でも、あるいは高学年、あるいは中学生と一緒にやる学習でも、その学習そのものがエンターテイメントになるんですね。

私は学習エンターテイメントと遠慮なく言っています。そういう域に達しますと、多分やればやるほど皆さんの人生が豊かになっていくという方向になっていくと思います。そうしますと、先ほど生重さんの講演の最後にあったように、大人の笑顔が、やればやるほど大人が笑顔になる。それがまた子どもたちに返っていくという、そういう好循環が生まれるんじゃないかなというふうなふうに思うわけです。

そのことについて、最後にですね、この魅力的なプログラム、「よのなか科」の少し変形したようなものを皆さんがどうやってコーディネーターとして持ち込めばおもしろいことになるのかというのをお話ししたいと思います。そういう話の順番でよろしいでしょうか？

はい、1、2、3というのがありますね。では最初に、学校で今何が起きているかというようなことなんです。ここに昔と今というのをちょっと簡単に書いてみたいと思いますね。昔というのはどういう昔かという、20世紀の成長社会、もう経済がザーッと成長していった時代ですね。戦後50年ぐらい、もう無条件に、昨日より今日、今日より明日、豊かになるというふうに信じられている時代がありました。今、21世紀に入りまして、これが成熟社会になっています。成熟社会と

いうのは、何も老人が増えるという社会のことを言うんじゃないんです。それも一つの局面ですが、実際には、日本は戦後50年ぐらいかけてダブツと経済が底上げされまして、1億総中流という、もう非常に世界的に稀な、こんなことが起こったのは日本ぐらいいんですね。それは、例えばいろいろなラッキーがあったわけですけど、そういうガーツとかさ上げされて一億総中流となってきましたね、この時代ね。それが、一億総中流になりますと、今から15年ぐらい前からもう始まってんですが、この一群の中流だと思っていた人たち、私も皆さんも含めてですけれども、これが当然分化していきます。分かりますよね？多様化していくんですよ。それで、この縦にも割れていきます。このことを格差というふうに今言っちゃってるんですけど、縦だけじゃないんです。横にもものすごく多様に人の生き様が多様化しているわけですよ。例えば、この世代の方々だったら分かると思いますが、今から30年、40年ぐらい前、サッカーといたらもう国際的に通用するのは釜本しかいなかったんですよ。今はどうですか。20人、30人、海外で通用するサッカーの選手が出ています。野球もそうですね。30年前に信じられましたか、イチローの登場なんて。アメリカと試合をやって勝つなんてことはあり得なかったと思うんです。それぐらい多様化が起きています。あるいは、そうですね、ヨーロッパが源流である、例えばクラシックバレエとか、あるいはヴァイオリンとかピアノでも、日本人のほうでグランプリ取るという時代になっちゃったわけですね。ものすごく横にも多様化しています。だから、上下だけじゃなくて左右前後にもものすごく多様化している。これが成熟社会の本質ですね。多様化し、複雑化して、そして変化が激しいというのが、この21世紀の成熟社会の特徴なんですよ。いいでしょうか？

それで、一言で言えば、みんな一緒だった社会から、もうこれ15年ぐらい前から始まっているんですよ。でも、恐らく今年から5年ぐらいでもものすごくはっきりすることになります。それで、一部の人はもう気づいていますが、多分あと15年ぐらいすると、ほとんど町中を歩いている人みんなが気づく。そんなようになってきたんですよ。これがどういうふうに変わっているかという、それぞれ一人一人多様に複雑に分かれていく。分かりますか？価値観がどんどんどんどん多様化し複雑化して分かれていく。そういうのが社会の底流にある流れなんですよ。もう残念ながらみんな一緒に豊かになっちゃうとか、みんな一緒に今日より明日がよくなっちゃうとか、これはあり得ないですね。

分かります？これはいいですね。ここがはっきり分かってないと、なぜ教育改革しなきゃいけないとか、なぜ放課後子どもプランなのかとか、地域本部なのかというのが分からなくなります。みんな一緒からそれぞれ一人一人になっていく。この社会の底流の流れですね。

ここで今、学校は大変なチャレンジを受けています。昔の学校、例えば皆さんの前に30人でも40人でも子供たちがいるというふうに考えてください。ある学級、あるいはあるクラスね、中学で、例えば数学を教えようというときに、クラスに30人か40人いますよね。このときに、昔だと、例えば成績の評定が1、2、3、4、5段階だったとしますと、オール5なんていうすごい子、できる子もいたと思うんですけど、これは1、2、3、4、5ですね。それで、大体ここにできる子というのがいて、それでできない子というのがいて、ここに普通の子というのがいるわけです。こんな感じで、できる子とできない子と普通の子というのがいて、大体先生としてはこの3種類ぐらいに分けて把握していれば授業の進行ができたんですよ。例えばプリントをまきます。それで、ちょっとできないなという子をフォローしていきます、個別にね。それで、できる子、例えばお客さんになっちゃってる子ね、塾なんか行っちゃって、もう全然そんなの分かってるよとか、あるいは予習をばっちりしてきたよみたいな、そういう子にはより難しいプリントをやって、それをやりなさいって言ってチャレンジさせて、それをあとから回収するとか、そんなようなことを、大体こういう横に3種類ぐらいだというふうにつかんでいけば授業の進行ができたんです。あるいは学校のマネジメントができたんですよ。多分、ここにいらっしゃる60以上ぐらいのシニアの方々は、学校で大体こんな感じで、先生たちはつかんでいて、それでそれほど問題なかったと思います。

ところが、今日それがどうなっているかという話になるとね、これが変化をしたっていうんですよ、この20年、30年のうちに。ずうっと変化してきたんですが、もう今日、とてもこれを黙っているわけにはいかないぐらいの変化が現れてきました。これはどういうことかという、例えばこういうふうに、この一番下のできない子というのをちょっと注目していただきたいんですが、話を単純にするために、中学の数学ができない子ね、数学できない、こういう子がここにいたとしますよね。それで、これがこんなふうに一様にいないんですよ。ものすごく多様に分化しちゃってるわけですよ。ここが大事な

ことなんです。まず、算数ができない子、つまり中学の数学が不得意だという子のうち、私はこれ調査して分かったんですが、半分ぐらいは算数の履修ができていません。特に大事なものは、実は小学校の三、四年生なんです。三、四年生で何が始まるかというと、抽象的な概念が始まります。例えば5の3とか、5分の3と2分の1を足すととか、そういう話です。つまり、それまでは2個のリンゴと3個のミカンを足したら5個ですねみたいな、そういうことをやってるわけ。それで、これは実態とそぐから分かるんですよ。でも5分の3って、今子供たちの世界に登場しません。例えばこの中には、ちょっと手を上げてもらおうかな？ 試しに、5人以上の御兄弟がいらっしゃる方、御兄弟ね、5人以上いらっしゃる方は何人ぐらいいる？ ちょっと手を上げて。はい。でしょうね。その方々には昔家庭の中で、5人以上の兄弟に対して3つしかミカンがないとかあったと思うんですよ。じゃあどうやって分けるのと。これがその日常的な課題として問いかけて、それを例えば力でぶんどるのか、それとも交渉によるのか、末っ子だったらちょっと甘えたふりしてお兄ちゃんからたくさんもらおうって、そういう交渉が一杯あったわけですね。ところが今の子供たちは、2人や3人子供がいても、みんな一人っ子みたいに育ちやいますから、5分の3ということはないんですよ。ここはすごく大事なところなんです。分かります？ 自分が生きる世界に5分の3なんていう世界がないってことなんです。だから分からない。だから、5分の3と2分の1を足すなんてもっと分からないんですよ。分かりますか？ 数学は、例えば5分の3Xと2分の1Xを足してどうするみたいなね、これが例えば10だとXは幾つですかみたいなことを中学では方程式を習うでしょう。方程式の構造は完璧に分かっている子でも、完璧にね、つまり数学の先生としてはぴしっと、ちゃんと授業やって分かった子でも、5分の3と2分の1がすぐ足せないと、これは答えがないんですよ。分かりますよね？ これが不得意だと、例えば計算が遅かったりすると、もうそれだけでテストで点取れません。それで、何回かやって答えが分からないと嫌になっちゃうわけですね。そういう子が、三、四年できちっと履修してない子が、例えば大阪なんかはもう典型的なんです。五、六年で教室を荒らしに行きます。なんでかという、算数が分からないというのは本当に辛いんですよ、授業に出て。どこかでつまりますよね。そうするとね、小学校の算数、中学校の数学、それから中学校の英語、この3教科は、分からなくなった途端にあとの話が全部、例えば僕が今日これ以降全部ヒンズー語で講演やるようなもんなんです。そうでしょう？ だって分からなくなっちゃうから、一旦分からなくなっちゃったら。国語の授業はごまかしがきくんですよ、日本語で話されてるしね。そうでしょう？ 社会の授業だって日本語でやっていますからごまかしがききます。理科の実験に落ちこぼれはないんですよ、参加できるんだから。それで見た目で見られるんだからね。分かります？ 算数、数学でつまづかせるとどれほど地獄になるかというのをちょっとシュミレーションしてもらいたいです。ここから先のすべての言葉がヒンズー語だったら皆さんどうしますかね？ あと40分、恐らく寝るか、こうやって椅子を揺るか、出て行っちゃうかですよ。教室崩壊ですよ。そういうことなんです。分かります？ 日本の学校現場で起こっていることは。それで、この算数ができない子に数学を教えるってどういうことなんです。算数ができない子は、これ取り出してあげて、何としてでも、例えば中学生で算数ができない子、数学が不得意な子のうち半分はこれですから、こういう子はよけて、それで算数の補習をやってあげないとかわいそうですね。それを学校の先生に頼るんですかって、こういう話。いいですか？



ほかにもあります。算数は得意で、例えばお父さんお母さんが熱心で公文か何かに行かせて、算数はすごいできるのに、文章題になった途端にだめという子がおりますね。特に長文の文章題がだめ。これは日本語の理解が足りません。ですから、日本語の理解をきちっとさせることが必要で、むしろ、読書させたりですね、そういうことが必要なんです。じゃあ、読書させたりすることを数学の先生が教えられますか。ね？ やってらんないで

しょう。こういう話なんです。更に、この文章題になると不得意になる子のまた一部に軽度発達障害の子がいます。皆さんも様々なフォローをされているんじゃないかと思います。軽度発達障害の子も増えています。ちょっと前、6年ほど前に文科省で調査したとき、6点数パーセントというような数字でしたが、私が実はちょうどそのときに校長になりましたので、学校の先生たちがどんな方法で、この子はそういう軽度発達障害があるかなという、そういう診断をするのかを目の前で見えていましたが、相当遠慮の数字です。ですから、私の判断では1割は超えていますね、楽に。軽度発達障害の子ね。こういう子にはまた取り出して別の教え方をしないとかわいそうなんです。分からないんですよ、抽象概

念が。あるいは、今度は数学的なセンスがあるのに家庭で何か起こっちゃって、例えば離婚訴訟が起こっちゃってとかですね、大体中学ぐらいになりますと、3人に1人ぐらいはみんな家庭のいろんな問題を抱えています。

一人親である場合もちろんありますけど、親が両親そろっていてももめている場合、お父ちゃん帰って来ない場合、いろんな場合がありますね。そうすると、かなり家庭に喧嘩がある場合、数学なんかの成績に端的に表れてくるんですね。ほかの教科はごまかしがきくんですよ。だけど、数学ってやっぱり落ち着いて考えないとできませんでしょう。だから、家庭がもめていると数学の成績がぐっと落ちてきます。これはもうすぐ分かるんですね。そういう家庭の問題で数学ができない。でも数学のセンスはあるはずなんです。こいつはあったはずだし、算数はできたはずだよなど、こういう奴はなるべく学校から帰さないということが大切なんです。

例えば放課後も帰さない。それで図書室で自習させるとか、あるいは土曜日の学習機会に呼んで、土曜日も大学生を付けて勉強の面倒を見てやるとか、そういうことが必要ですね。それから、小学校のときから虐待受けちゃって、虐待受けちゃうと、多分皆さんもケース見ていると思いますけれども、基本的なところで忍耐力とかそういう人生に対する前向きな感覚にダメージといいますか、そうすると、一生懸命こちらがフォローしてあげても長続きしないんですね。これはもう本人のせいじゃないです。もう全くその外部的な要因で、小さいころ虐待を受けちゃうと、そういう生きるエネルギーというようなものが、あるいはエンジンそのものにダメージを受けちゃう。そういう子もいます。このように、同じ数学ができないということだけでも、昔は一樣にこうやって何となくできない子とらえたらよかったんだけど、今はそれがものすごく多様化しちゃったと。それで、同じことが成績のいい子にも起こっていますし、これは真ん中にはもちろん、こういうふうに縦にも割れてきちゃったよという、この理解、これが非常に大事なんです。こうなるとどういうふうになるかと言いますと、学校の先生はこういうときにはね、3つぐらいに分けて考えたらいいときには、ストライクゾーンは割と広いんですよ。これぐらいのストライクゾーンで授業ができるんですけど、こうなったらどうなりますか。自然にもっとストライクゾーンが狭くなりますね。分かりますよね？すごく細分化されちゃって、すごく多様化しちゃったから。これ、とてもこんなふうにはできないんですよ。もしこの感覚で今学校の先生から向かっていきますと、まず体を壊してしまいます。これだけ多様になっていますからね。いいですか？昔3種類ぐらいだと思って対応してればよかったのが、今は15種類にも30種類にもなっているかもしれない。

それに同じようにフォローしようとしたら、それは体壊しちゃいますよ。だから今、例えば日本中の小中学校の教頭先生ですね、副校長が今度は教頭先生で、これは余りオープンになってないんですが、10人に1人が精神的な病気ですよ。10人に1人と。すごいですよね。学校の先生も、本当に熱心な先生、頑張る先生ほど体壊しちゃったり、あるいは精神的なバランス崩しちゃったりしてるわけですよ。これを何とかしなきゃいけないんですよ。これは大問題なんですよ。だから和田中がどうしたかという、先生たちのストライクゾーンを絞ってもらいます。3の子を4に、次、2の子を3ぐらいに上げてもらう。次に4の子を5に上げてもらう感じですね。これがストライクゾーンですね。それで、ここに絞ってもらって、もっと子供たちの学習に集中してもらう。それで、ストライクゾーンに絞ってもらって、徹底的にこの授業と、小学校だったら放課後遊び、中学校だったら部活動を中心とした生活指導に仕事をどんどん絞ってもらうと。それで、この周りの部分、例えば算数のできない子に算数を教えるとか、あるいは放課後図書室で自習させるとか、あるいは土曜日呼び出して、土曜日に学習機会を設けて、大学生を寄せてきて、大学生に宿題ぐらいの内容を見てもらうとか、こういうところの下支えと、もう一つ、今度は英語をもっとやればもっとできるようになるのにということですね。

英語を、例えば週に3コマ土曜日に積み増せばもっとできるようになって、それも自分が是非やりたいという、女の子に多いんですけども、自分としては、だからスチューデントになりたいとか通訳になりたいとかそういうのがあるから、そういう夢を実現するために、英語だったらもっとやりたいっていう子に英語の勉強をさせてあげる。これを英語アドベンチャーコースっていうんです。更に、皆さん御存じの「夜スペ」というのは、この英語だけじゃなくて、国語も数学も、4や5の成績の子を6にまで引き上げるっていうんですね。そういう意欲をもった子で学習リーダーを作っていくというような、こういうことをすべて地域本部の仕事として始めたわけなんです。学校の先生はこのストライクゾーンに特化し、この下支えも、すごく極端な部分と、それから上から4や5の子をもっと引っ張り上げるんですね。このことを始めたのが、私の学校、地域本部なんですよ。大体分かっていただけでしたね。それで一つだけすごく大事なことをここで言いますけ

れども、皆さんの中にも誤解されている方がいると困るので注意しておきますが、例えば「夜स्प」の報道がありました。このときに、一方にもすごい賛成の声と、一方にもすごい批判の声があったんですね。その批判の声の中に、公立の学校が上の子を伸ばすなんて要らないっていうとんでもない意見があったんですね。更に言うと、上の子をそうやって引っ張り上げるなんて下の子がかわいそうだとかですね、下の子が損をするとかですね、そういう馬鹿な意見が一杯ありまして、私はこれはもう本当に怒り心頭に達したんですが、これね、学校で仕事していらっしゃるベテランの先生方はみんな分かるんですけど、上の子を伸ばすことが下の子の損にはならないんですよ、実際。それで、実際に和田中で土曜日に英語を3コマ積み増すコースというのをやりまして、英語アドベンチャーコース、これはもう3年、4年やってるんですけど、今度は5年目に入りますが、これやってみて何が起こったかと言いますと、英検の3級とか準2級という、そういう資格を取ってすごく喜ぶ、そういう生徒が増えたわけですね。もう倍々に増えて、今英検の準2級という子が和田中の二、三年生に40人以上いるんですけど、通常の中学校だと、英検の準2級というのは高校2年級以上なので、大体2人ぐらいしかいません。それが20倍ぐらいいるんですね、和田中ね。それで何が起こるかという、その子たちが資格取って嬉しいというだけでは終わらないんです。ここが大事なところなんです、人間って、すごい清浄感があると、それがゴルフでもテニスでも将棋でも料理でもそうだと思うんですが、教えたくなくなるじゃないですか。これは子供たちも一緒なんですね。教えなくなっちゃう。ぐっと伸ばしてあげる。言ってしまうと、4や5の子を6にまで引っ張り上げていくと、英語を教えなくなっちゃうので、その子たちが、つまり英語のリーダーたちが授業で、中、下位の子に教え始めるということが起こったんですね。その結果、平均の平均点が上がってしまいましたですね。それで、和田中は実はかなり厳しい場所に建っています。横は養護施設で、50人ぐらい小学校のときに大体虐待を受けた子がいるんですね。それで、10人ぐらいが和田中に来ています。20人が隣の和田小学校に来ています。それから立正佼成会発祥の地でもあり、母子寮とかもあるんですね。すごく貧富の差も、それから学力差も激しいところなんですね。だから英語の成績に一つこれが現れていたんです。23校中学校があるんです、杉並区に。23校中21位ぐらいをうろうろしていたんですね。それが今はどうなっているかという、全体の平均が上がったために、今1位か2位ですよ、杉並区で、英語については、こういうことが起こるわけですね。上を遠慮なく引っ張り上げることで、中、下位の子まで、つまり教えられるから、教え合っているからですね、だから引っ張り上げられる。なぜそういうことが起こるかという、子供たちは決して先生からだけ習っているわけじゃないからです。分かりましたよね？子供たちは学び合っているからこういうことが起こるんですね。これが学校のダイナミズムっていうやつなんですよ。それで、恐らくここにいらっしゃる方で、割とシニアな方は多分記憶にあると思うんですが、昔の学校はそんな感じでしたよ。本当に優秀な人はいいいと



もう突出して行って、その子に教わっちゃえよみたいなのがあったと思うんですね。そこからこの30年ぐらい、非常に変な平等感がはびこってまして、上の奴を引き下ろしちゃうみたいな、その伸ばす奴の足を引っ張るみたいなんですね。それで、例えば海外から帰国子女が帰ってきて、英語の時間にわざと発音を悪く言わないといじめられちゃうとか、下手すると先生にいじめられちゃうとか、そんな馬鹿なことが起こっていたわけです。

大阪はそういうのがものすごく蔓延していたんですね。だから、大阪でも橋下知事とかになって、とにかく上の奴を何人でも伸ばしましょうと、その子たちにまず英語のリーダーになってもらってほかの子を教えたら、先生たちも助かるんですよ。ということと同じように数学でも国語でもやりましょうというようなことで、大阪でも、「おおさか・まなび舎」という、放課後に学習教室が始まり、塾の講師がそこに入っていけることがもうスタートしました。また、「土曜寺子屋」を始めたところもありました。こういう、上の子も遠慮なく引っ張り上げると全体が底上げされる学習効果があるんですよということを頭の片隅に置いてもらえばと思います。

というようなわけで、こういう時代からこういう時代になったために、学校を学校の先生だけに任せて、学校の先生だけに押しつけて、学習はあなたの仕事でしょうっていう、それで学校で起こるいろんな問題について、何か悪いことが起こると学校が悪いとか先生が悪いというふうに言う。こういうふうにする、そういう不幸な時代を終えなきゃいけないわけです。終わらなきゃいけないわけです。どうしても学校の先生のストライクゾーンというのは絞られるわけですから、この

周りについて、「放課後子どもプラン」だったり学校支援地域本部だったり、そちらがうまくここを分業してくださって、学校というのを学校の先生だけのものにしなくて、学校の中に作られた地域社会と、それから学校の職員室との車の両輪ですね、車の両輪で経営す、これが非常に進んだ姿としての私はネットワーク型の学校経営と言ってるんですが、ネットワーク型の関係ね。職員室の先生だけで回さないということです。一方で地域社会の方々がガンガン入ってって、この両方の両輪で学校を運営することで子供たちを縦横に刺激していくと、これが必要になったわけです。学校の養成としても絶対に必要になったわけですね。

では、これを最初にお話ししまして、次ですね。あと30分なんですけど、次に地域本部、あるいは皆さんの「放課後子どもプラン」のコーディネーターのスタッフをどのように強化していくかという、こういう話をしたいと思うんですが、幾つか、これは5つぐらいに絞って、パバパバッと、これはちょっと早口でしゃべってしまいますね。それで、一番最後のこの「よのなか科」の話、こういう授業を仕掛けていくと皆さんの仲間も増えるし、かつ、皆さんの人生が豊かになりますよという、この話を20分ぐらいしたいので、今から私はどのように人をネットワークしていくかという話を5つ、その5つぐらい「よのなか科」の話なんで、4つですね、簡単にぱっとしていきたいと思います。

これは和田中の例を具体的にお話ししたほうがいいのかと思うので、まず一つきっかけになるのは、多分ここにいらっしゃる方々ももうこの手は使ってらっしゃるんじゃないかと思うんですが、学校には緑の資産がありますね。都市部でも3000坪から5000坪の敷地があるのが通常なほうです。そこに緑はあふれんばかりにあるわけですね。それで、もう特に都市部については、学校と寺社仏閣がこの緑を守らなければ、もう都会の都市化、あるいは住宅建設にはかなわないですね。大体その75坪とか80坪ぐらいあって、すごいいい屋敷が建ってて、そこに松とかが植わってても、それを例えば業者が取得しますと大体3つぐらいに分かれちゃって、20坪から25坪ぐらいに分けちゃって、その緑は全部どこかに捨てられちゃって、それでもう建て売りが建つみたいなの、こういうのに呼応しきれませんよね。都会の緑はね。だから、学校と寺社仏閣が緑を守らなければならない。それで、和田中ではこれを「グリーンキーパーズ」という組織を作りまして、とにかくそういう剪定ができるとか、緑のお手入れが、割と技術があるんですね、そういうおじいちゃん、おばあちゃんと、それからPTAというのは割とお父さんというのは結構出てきにくいですね。おやじの会みたいのをみっちり作っているといいんですが、お父さんって結構来ないんですが、でもお父さんの中にガーデニングが好きだっている人が結構いるんですよ。ガーデニング好きなお父さんね。これは、その緑でおびき寄せなきゃなんですよ。今から私がお話しすることは、学校の何のネタを使ってだれをおびき寄せるかという、こういう非常に現実的な話なんですけれども、なんでかという、団地なんかに住んでいる、マンションなんかに住んでいる人にとってみれば、ガーデニングが幾ら好きでも大体プランターでベランダでやるのが限界だと思うんですね。それに対して学校には、さっき言いました3000坪、5000坪の敷地がありますよね。それで、和田中では全然手つかずの荒地が東側にあったんです。それから花壇なんかも本当に、言ってしまえば、僕が行った当時は荒れていたんです。なので、それぞれ区画を分けてしましまして、そういうガーデニング好きなお父さんと、それから松の剪定なんかができるおじいちゃん、おばあちゃん、そういう人たちにもう思い切って任せてしまうようなことね。お父さんガーデニングするって聞いたんだけど、マンションのベランダで、なんか畳1畳ぐらいの感じで、あるいは1坪ぐらいの感じで緑やってらっしゃるより、学校で僕がこれをお任せしますから、20畳のこの花壇、あるいはもっと広がったのをしたんですけども、それをやりまして、実際には、例えばその荒地だったところに田んぼがまずできると。それと、僕は頼みもしないのに水車小屋が作られたんですね。それからそのあとハーブ園ができる、ブルーベリー園ができる。何か知らないけどほうれん草みたいなのが植わっちゃってそこから収穫までできるみたいなの、とにかく農業系が大好きな方に学校の敷地をお任せするという、こういう手法はあるんですよ。そうすると、緑が好きな人のネットワークができていき、緑が好きで、その緑にまつわるコミュニケーションがすごく豊かになっていくわけですね。

それで、僕が学校を核に地域社会を再生するということをずっと言ってるわけですけども、一番大事だと思っているのは、このように何か好きな人が学校に集ってきて、そのネタ、この今の「グリーンキーパーズ」であれば緑のネタについて、もうそろそろこういう花が咲くからこういう花を植えようとか、こういうのはこういう土に合うんだとか、そういうコミュニケーションを豊かに起こしてもらおうということがすごく大事なんです。このコミュニケーションは、大人同士のコミュニ

ケーションが子供たちに刺激を与えるんですね。分かりますよね？ここが非常に大事。よく子供たちの異世代間の交流が足りないから、子供たちの異世代間交流をさせようという話をしますけれども、実はそれよりも前に、大人同士の異世代間交流をして、大人同士が異世代間で、そういう縁なら縁、縁が好きっていう人たちがそのコミュニケーションを起こしてくれまして、それによって子供たちとの関係が自然にできていくんですね。子供は大人がどんなコミュニケーションをするかをよく見てますから、だから、実は教育再生会議ってありましたけれども、あれは本当は間違いで、教育再生会議って、教育を再生するんじゃないんですね。一番大事なのは、地域における大人たちがやるコミュニケーションですね。この量と質を再生する必要がありますよ。これが一番大事なんですね。コミュニケーションによって子供たちはもまれていくんですね。だから、地域におけるこのコミュニケーションの量と質がグーンと豊かになってくれば、まず間違いなく学力は上がりますし、志も情熱も、あるいは思いやりも、場合によっては愛国心みたいなものも上がっていくと思います。これを個別に、情熱が足りないから情熱教育とか、思いやりがないから思いやり教育と、こういうことをやるからおかしくなっちゃうんです。分かりますよね？地域におけるコミュニケーションの量と質が教育の質を決めると、はっきり今日頭に刻み込んでいただくとありがたいと思います。緑の例を言いました。次、あと学校にあるもののうちそういう大人がコミュニケーションを起こせるネタはほかにも一杯あるわけです。そのうちの非常に大事なのは図書室ですね。それで、和田中ではこの図書室、中学生は図書館に行かないとか言っちゃって、国語の先生が一日に何人ぐらい行ってるのって言ったら、五、六人ですって言うんですね。それで、先生、一番遠いところにあるから行かないんですよ。教室棟がありまして、その1階に職員室、校長室があつて、別の棟に特別教室があつて、その2階の一番奥に図書室があるんです。確かに遠いんですよ。渡り廊下行かないといけないんで。でもね、子供は遠いから行かないなんてことはないんです。そこに読みたいものがあれば必ず行くんですよ。というようなことで、小学校はまだましかもしれませんが、中学校の図書館は恐らく7割、8割方が今でも開かずの間だったり、大体一日に五、六人しか行かない図書室というのはどういことかという、図書委員の数が大体五、六人ですから、図書委員だけが行って貸出し体制を昼休みに取ってるんだけど、だれも借りに来ないと、こういう状況ですよ。これを大体10倍から100倍にするにはどうしたらいいかという、これは私の著書を読んでいただければ、大体図書室に何をやったかが書いてありますけれども、徹底的に9000冊の本を5000冊ぐらい捨てちゃって、もう要らない本が一杯あります。私は大阪でも、去年35市町村、55校回りまして、図書室も何校か見て回ったんですけど、全然だめですね。昔の文学全集なんかはまだあるわけですね。それで、文学全集ってね、1回寄贈してもらったり買ったりすると捨てられないんだよ、なかなかね、みんな勇気がなくて。でもね、見てくださいよ、文学全集ね、ぱっと取りますよね、それで大体一番後ろの貸出票ね、まず一人も借りてないわけですよ。更にどういのが一人も借りてないかという、大体上下二段のこんな細かい字のやつ、ルビも振ってない。読むわけがないじゃん、今の子が。今の子は「ジャンプ」で育っているんですよ。「ジャンプ」で育っていたら、絶対ルビ振ってなきゃ読めないんですよ。村上龍さんの「13歳のハローワーク」って素晴らしい本がありますよね。あれ百何十万部売れたんですよ。でも、だれが買ったかっていったら、みんなあれを子供に読ませたい大人が買ったんですよ。それで私は注意深く見てましたが、中学生であれを読みこなせる子はほとんどいません。相当ハイレベルの、大体1年に100冊以上の本を読む、そういう国語が得意な少女だけは読めるけど、読めないでしょう、あれは。なぜかという、ルビ振ってないから。だから眺めるにはいいんだけど、読んでないんです、子供たちは。分かります？だから図書室の本も、そういう本は本当はスペースが無駄なんで捨てなきゃいけないんですよ。それで、捨てるのが嫌だったら、皆さんね、僕のお薦めは、ブックオフでも何でも持っていっちゃうか取りに来てもらう。それで、価値があれば彼らは生かします。もう一回売ります。価値がなければ捨ててくれますよ。分かります？ということで、ドーンともう預けちゃうのがいいんですよ。捨てなければ新しいのは入りませんし、ガーッとスカスカになるほうがいいんです、図書室は。スカスカになったらどうするかという、通常の図書室はみんな背表紙にしていますが、背表紙だけでは読む気にならないんですよ。だから書店のように、面出っして行って本の顔を見せてあげる。そうすると、その本の顔が一杯並んでますと、あの本の顔は、表紙は、自分のことを読んでほしい、読んでほしいとプレゼンがされていますからね、だから読むようになるんで



すよ。特に自然科学系なんかはそういう工夫が非常に大事。面出しすることが大事なので、面出しするために、こういうイーゼルってあって、その面出した本を置くようになっている、ちょっと金具があるんですね。それが嫌だったら、100円ショップに本立てがあるでしょう。あれ何て言うんでしたっけ？ブックエンドだよ、それが100円で売ってますから、あれ一杯買ってきて、50個60個買ってきて、それに立てかけて面出しするといいいんですよ。

というようなことで、そういう改造を是非してもらいたいなと思うんです。そういうふうになると、当然その改造しようというふうに、我々としては4日間で120人ぐらいのボランティアを結集してやったんですが、そのうち10人ぐらい司書の方が集まってくれました。わざと金、土、日、月と入れます。それで全部一旦出して本棚を磨いてということをやするわけですけど、一旦出した本をもう一度収めるわけですけど、もう一度収めるときにやっぱり司書の力がいるんですよ。それで、ここはまた知恵なんです、月曜日、図書館って地方もそうだと思いますが、月曜日が休館日というようなところが多いですね。そうすると、司書の方は月曜日なら手伝いに来てくれる可能性があるんですね。分かります？ボランティアとして。というようなことで、金、土、日で全部片付けて、磨き込みもやって、それで新しい本と共に月曜日にそれを収納するということをやりますとうまくいくんですよ。

この辺は全て私の本にも書いてありますので、見ていただければ。図書室をそういう形でやりますよね。それで和田中で何が起こったかという、改造したあとに、結果論としては子供たちが10倍、50人、60人来るようになったんですね。それで、もちろん遠慮なく漫画も入れます。漫画も入れなきゃだめですよ。漫画は絶対に入れなきゃだめです。なぜかという、例えばバスケットに興味のある子にとっては、「スラムダンク」と「リアル」という漫画はもう神様みたいな存在の文学なんですよ。それで、この「スラムダンク」って読んだことある人ちょっと手を上げて。ああ、多いじゃないですか。あれを超える文学作品は今のところ出てません。例えば野球であれば、あさのあつこの「バッテリー」があるでしょう。ランニングであれば、森絵都だったり、あさのあつこだったり、結構最近書いてますけど、バスケットについては「スラムダンク」と「リアル」を超える文学はないんですよ、今のところ。小説で読めないんです、あれだけのクオリティのものは。

つまり、ちょっとシニアの方には何じゃって言われるかもしれませんがけれども、昔であれば太宰治や芥川龍之介になった奴が、今は漫画家になってることなんですよ。だから、そういうふうなのを置いとかなきゃいけないの。そういうことで、1000冊から1500冊、和田中では置いてあります。一部校長室にも置いてあるんですね。というようなことで、そういうことをやりますね。それで改造しますね。それでね、僕期待してなかったんだけど、そのボランティアをやった人で、地域の好きなおばちゃんがね、これはもったいないから、校長先生、4月から私たちが運営しましょうかって言い出しちゃったんですよ。僕はそれを期待して改造したわけじゃないんだけど、図書委員にやらせようと思っていたらそういうことをおっしゃるもんだから、そのまま任せてみたら、和田中では平日の3時から5時までずうっと図書室が空いてまして、そこに、部活にも行けない、かといって家に帰っても居場所がない子が集まってきて、それでおばちゃんがまたね、大阪弁の人だからまたいいんだな。なんとなくそういう子たちをネットワークしちゃって、それで半年の間に何が起こったかという、バーコード管理にあつという間になっちゃったんです。つまり、居場所のない子が放課後に集まりますね。和田中の図書室は第二の保健室というふうに言われちゃってたんだけど、その子たちに仕事を振って、子供たちに仕事を振って、バーコードを全部付けさせて、割と先生方からするとちょっとお手上げの子たちがそういう仕事をおばちゃんから頼まれて、よっしゃってやってたら、全部バーコード化になっちゃって、半年後に今度は先生呼んで、その子たちとおばちゃんがこの使用方法を教えるっていうんですね。だから上下の逆転が起こったわけですよ。分かります？ こういうのすごく大事なんですよ。

地域が学校の中に入ってきて、ただ単に学校の下請をしててもしょうがないですよ。一步そこへ出ていくとむしろ逆転して、先生たちに今度教えるということが起こる。上下の逆転ね。こういうモードの変更がどんどん起こるということが非常に大事なんですよ。それで、そこには当然本好きなお父さんお母さんのネットワークができるわけで、実際今和田中の図書室を今日も守ってくれている、そういう人はだれかといいますと、チンゼイさんという人とタケダさんという人なんです、このチンゼイさんという人は本当にPTAのはるか昔のOGなんですけれども、PTAのOGね、自分の娘が和田中を出たんですが、この人は本当に本が好きだから、昼間家で本読んでるって言うわけですよ。普段何やってる

んですかって聞くとね。だったら和田中の図書室に来て本読んでくれないかって、好きな本読んでくれたらいいからと。これは何が大きかって、子供って、さっきも言いましたけど、近くの大人がどのようなコミュニケーションをしているかで学ばんですね。つまり、大人が本を読んでいる姿を一杯見た奴が本読みになるんですよ。親が全然本読んでない子が突然本を読むようになることはないです。分かりますよね？すごく大事なことで、だから地域の人で本の好きな人がとにかく図書室に来て、小学校の図書室もいいじゃないですか。とにかく本を読んでくれているだけでもものすごく教育効果が高いんですよ。大人が、ああ、本とコミュニケーションしてるんだなって、そういうのいいなど。あるいは、今回のベストセラーのあれどう？とかね、「悼む人」って読んだ？みたいなね、直木賞どう？みたいな会話が起ることが大事なんです。そこに子供たちが居合わせることが大事なんです。教育というのは感染ですから、伝染ですから、うつるんですから、そういう本を通じたコミュニケーションを図書室を通じてやっていただきたいと、こういうような感じですね。あとは言わずと知れた、部活にコーチを送り込むみたいな話がありますよね。それから、土曜日とか放課後にその学習のサポートをする。そこに皆さんもいろいろ苦労されていると思いますが、これからは塾の先生だって遠慮なくネットワークして使う時代です。

和田中では、実はお金を生徒に払わせて、それを塾の先生に大体市価の3分の1ぐらいを払うというような形でやってますけれども、なぜ安くなるかというのは、学校の場所を使えばただだということと、宣伝する必要もないということと、それか何か事務員を雇う必要がないですからね。ボランティアで運営できますので、だから通常の、例えば英会話スクールよりも学校の中でやったほうが、圧倒的に安くなったわけですね。そういうことをやったわけですが、大阪ではもうこれは完全にボランティアになります。塾の先生たちも、もう普段の夜なんぼもうけてもいいから、週に1回ぐらいはボランティアしてくれますかと言えば、地元で長くやってる塾の塾頭にちゃんと話をすれば、それはやってくれますよ。やってくれます。そういうことを校長はやっぱこれからお願いをするんですね。外の塾の塾頭に頭下げても、子供たちのために、子供たちの学びが豊かになるんだったら、あるいはこういう子供たちがフォローできるんだったら、算数のフォローをやるとか、そういう。それだったら頭下げるべきなんです。これからはそうやって、地域社会、外に出て行って、自分のところで預かっている子供たちの、特に下を支えたり上を伸ばしたりする、そのために塾の塾頭とか大学の講師とか大学教授とかに頭下げて引っ張ってくる、そういうマネージメントが校長には望まれているんですね。そういう頭の柔らかい校長じゃなきゃだめですね、これからは。多分皆さんも、半分ぐらいはきつと頭の固い校長と一緒にやっていて苦労されてるんじゃないかと思いますが、どうですか。ちょっと今手を上げてもらおうかな。私は割と頭の柔らかい校長と組んでいるという人、ちょっと手を上げて？はい。

私のところは結構固いわ、いつも苦労しているわという人？はい。

いいよ、遠慮なく手を上げて。ただ、これぐらいの手が上がりましたね、一杯ね。はい。というようなことで、これからこの校長も一皮むけてもらわなきゃならないですね。では、最後に、「よのなか科」という授業がどんな授業かを、ちょっとまず4分ぐらいビデオで見てもらいたいと思うんです。これはもういいです。はい。

それで、こういう授業を皆さんがしたければ、皆さんの人生がもっともっと豊かになるし、皆さんが学びたいテーマを仕掛けていけばいいんですね。自分が知りたいことを調べていく。そこに自分が知り合いたいゲストも招いちゃうんですね。その子供たちと一緒にね。

皆さんは、こういう授業はコーディネーターがやるんだという立場で考えてください。

これは小学生でも全然問題ありません。小学生でも中学生でも問題ありません。100円ショップで買ってこれる道具を使ってまず導入を図ります。

これはね、新人のころの写真です。まだ髪の毛が十分にあったころね。

皆さんがしている腕時計も、夜光塗料はほぼ100パーセントこの会社の製品です。根本特殊化学ね。それがローレックスやオメガであったとしても、1キロ幾らぐらいすると思いますか、夜光塗料。1キロってこんなもんですよ。コシヒカリだと700円ぐらい。

金と同じ価値がするんですね。

はい、ここまででもう結構です。この生徒たちがウォーッと言ったでしょう。あれが教育的



瞬間です。それでこの授業の最大の特徴は、大人と子供と一緒に学んでいるってことなんですね。大人と子供と一緒に学んでるの。去年辺りから大体100人ぐらいの一学年の生徒に、30人から50人の大人がずっと入って、それが年間を通じて30回ぐらいの授業をやってるわけです。それを私はもう7年も続けてるんですけど、この中に皆さんが1人入って生徒と一緒に学んでいるという感覚でもし見ていただいたら、これは皆さんの人生を豊かにしますよね。ただ単に知識が得られてよかったという話じゃないですね。ある種の感動を子供たちと一緒に確認できますよね。ということで、皆さんがこの授業者をしてね、先生をやりなさいと言っているわけじゃない。それができる方はなかなか少ないんじゃないかと思うんですね。そうじゃなくて、こういうネタを仕込んできて、校長先生と語らって、どなたかの先生とタッグを組んでやれば、幾らでもこういう授業ができるわけですね。それで、これぐらいの会社、例えば子供たちに非常に身近な、この場合には夜光塗料でしたよね。でも、例えばセブンイレブンで売ってるものだったり、それから100円ショップで売ってるものだったり、ハンバーガーだったり、あるいはナイキのシューズだったり、Gショックだったり、なんでもいいんですよ、子供たちの興味のある物、BOOKOFFでもいいですし、何でもいいんですね、スタイルは。そういう子供たちの身近にあるものの背後で、その技術を提供していたり、そこに税金で提供していたり、そういう会社は一杯あるし、そこでものすごく付加価値の高い仕事をしている、そういう会社は一杯あります。それで不況不況とか言われているけれども、こういう会社に不況はないんですよ。ものすごく付加価値の高いことをやっているから。というようなことで、これぐらいのレベルで子供たちを感動させられる会社は、日本全国で探せば2000社や3000社はあります、絶対。皆さんのふるさとも絶対あります。例えばなんですが、大阪で門真市というところがあるんですが、門真市というところすごい学力大変なんですよ。厳しいです。例えば三百何十人の児童がいる小学校で、120人ぐらい毎日生ってって中国からの残留孤児の孫だったり、もう日本語が通じないわけ、100人ぐらい。それは学力的には厳しいですよ。生活も厳しいんですけど、みんな公営住宅に住んでいて、すごく厳しい。だけどそういうところでも、例えばフィギアって知ってますかね？聞いたことがありますよね、オタクが大好きなやつで、「うる星やつら」とか、そういうのに、こういう、ちょっとね、小さな模型ね。ゴジラの模型なんて昔あったでしょう。それからウルトラマンの模型とかですね。それで、最近ANAの、多分飛行機で来られた方もいらっしゃると思うんですけど、全日空のANAのフィギアを作りましたね。スチュワーデスとかね、そういうのを。それから最近では阿修羅展という、奈良の法隆寺の阿修羅展なんかで、その阿修羅の肖像ですね、このフィギア会社が作ったんですよ。この会社は実は門真市にある「海洋堂」という会社なんですけど、世界のオタクの、世界のアニメファン、漫画ファンにもう羨望の的の会社ですね。こういうのがあるわけですね。これ、子供たちが興味もたないわけじゃないですよ。これの社長でも営業部長でもだれでもいいんですけど、フィギアのかかわりで来てくれて、どうやってこれ作ってるんだって授業をやってくれたら、これはこの感じですよ、オーっですよ。違いますか？そうですよ。

幾らでもそういう仕組みはできるんですね。よろしいですか。それでせっかくだから、もう時間があと1分か2分なんですけど、ちょっと5分だけ延ばさせてもらって、一つ皆さんにちょっとネタを持って帰ってもらおうかと思うんです。帰ってから息子にでも孫にでもできるネタね。この授業のあとに何をやってるかっていう話なんだけど、ちょっとテレビで映せないことをやってたんです。何かというと、ちょっとですね、その「よのなか科」の続き。親と子の「よのなか科」という感じで、家でもできる「よのなか科」の知恵を皆さんに今から授けてしまいますので、そういうことを子供たちに仕掛けていくと、すごく子供たちの世界観も広がるし、あるいは将来の職業のイメージもすごく広がるし、皆さん自身の人生も広がりますよと、こういう話ですね。ネタとしては、ちょっと千円札出してほしいんだよね。千円じゃなくてもいいんですけど、ちょっと札を出してくれる？「よのなか科」の授業のこの続きで何をやってるかを、今からちょっと3分ぐらいでやっちゃいたいんですけど、バッグの奥底に鍵掛けてしまってる人はいいわ。さっと出る人ね。出なかった人は出した人を見て。それで、ちょっと上開いてお待ちください、こういう感じで。すみません、係の方集めてくれますか？というのは冗談なんですけど、見栄で1万円札出す必要はないんですよ、千円でいいんですよ。いいですか。それで、肖像が右側にありますよね。千円だと野口英世があつたりしますね。それで真ん中に透かしという部分がありますね。透かしの左下に判こが打ってありますね、判こ。これ、何と書いてありますか？だれの判こですかと、こういう質問です、まず、いいですか。自分一人でちょっと考えてみてもらえる？ヒント、左上は「の」です。左下は、ちょっとかしげるかも分からないけど、「い

ん」、「のいん」というふうに左に書いてあるんですが、当然右の漢字二文字の方の印ですね。じゃあ、だれの印かをちょっと想像していただき、だれというのをちょっと頭に浮かんだやつを大声で皆さんで眠気覚ましに叫ぶように言っていたかと思いますが。これはだれの印がお札なんかを押してあるのか。お札に判こを押せる人の印ですよ。どうですか。安倍ですか、福田ですか、麻生ですか。そんなわけないよね。総理の名前だとしたらね、日本なんか大変ですよ、これ。年間4回刷り変えなきゃならないですかみたいな。というようなことで、そうじゃないですね。じゃあだれの印でしょうと。いいですか？

思い浮かんだやつをバンと言って、これから子供たちを育てるのに、特に小学生はそうなんです、こういうときに、小学生も一、二年生ぐらいだとまだ無防備なんだけど、3年ぐらいから授業であんまり正解以外を言っちゃだめだという教育をされるんですよ。日本の学校では正解主義で教えられるんで、どんどんどんどん黙っちゃうわけですね。それで、正解が思い浮かばないと言わない、あるいは日本人の悪い癖で、周りに聞き耳立てていて、それに合わせて正解を言おうとする。だからこんな感じね、ワーワーみたいなのやつ。これはだめ。いきなりゴーンと、間違ってもいいから教えてください。何にも思い浮かばない人は自分の名前言ってくれればいいですから。では、これはだれの印でしょうか？どうぞ。

はい、そうですね。でかい声でいただきました。総理という方もいらっしゃると思うんですが、これは日本銀行総裁の意味ですね。それで裏の印鑑は、これは造幣局の印なんです。それで、よく見ていただくと、裏の印鑑とこの表の印鑑、色が違いますね。表の印鑑はちょっと赤紫っぽいんですね。これが特殊インクで刷られています。特殊インクは100パーセント、先ほどの根本特殊化学が提供しているんです。なぜこれは特殊インクで刷られているのでしょうか。いいですか。はい、では今から、恐縮ですが、「よのなか科」ではいつもやるんですが、コミュニケーションさせるんですよ、子供たち同士を。二、三人という感じで、横、あるいは前後で、とにかく一人で黙って考えるのはなし、3人寄れば文殊の知恵で、バツと相談してみる？30秒。はい、どうぞ。なんでこれ、特殊インクで刷られているの？

それでね、なんでこれ特殊インクで刷られているのかがもう大体分かったという人は、じゃあこれからどうなるわけ？特殊インクで刷られているものがどうなると何がどのように分かるの？ちょっと微妙な言い方をしてますね、今ね。はい、いいですね。では恐縮ですが、これ、何のためにやっているかを、やはり同じようにそれぞれにバーンと言ってください。前後左右の方が何と言おうと気にしない。ドーンと言うようにね。じゃあ、なんでこれ特殊インクで刷られているんですか？どうぞ。

そうですね、はい、偽造防止だとか偽札防止だとか。じゃあ、これはどうなるんですか？偽札だと。

はい、そうですね、そういう感じのことです。正確に申し上げますと、これ、実は紫外線を当ててるんですね。紫外線、ブラックライトに当てますと、これが橙色に光るんです。橙色に光らなければ偽札だということになるんです。それで、この授業ではこのあと真っ暗にしてまして、各班に根本特殊化学の方が持ってきていただいたブラックライト、これは携帯用なんです、それを回すんですよ。それで、当然大人が入っていますから、グループ全部にね。だから札が出るでしょう。それで、大人がこうやって持つてるでしょう。それで私がこう言うんです、真っ暗にしてからね、はい、これからブラックライトを当てて、オレンジ色に光ったらこれはオッケーよと、もし光らない札を出した大人がいたらすぐ捕まえなさいみたいな感じで。これは結構興奮なんです。さっき100万円でオーツと言ったでしょう、子供がね。今度は大人の方なんです。大人がね、それはもちろん、こんなNHKのカメラが入ってる場に刷ってるような奴は来ませんよ、当然。だけど、万が一、皆さん今でもそうですよね、アハハと言ってる方のお札が万が一もしかしたら混じっている可能性があるじゃないですか。だから今度は大人が悲鳴を上げるんです。ウーツとか言って、要するに橙色に光ると喜ぶ声もうそこに起こるといふ。こういう感動を与える素材をもった、いわば本当に教材のような会社とか、教材のようなサービスをしてたり商品を作っている会社が世の中に一杯あるんですよ。こういう人を是非引っ張ってきていただいて、その刺激で子供たちの頭の中をかき回してあげてほしいなと思うんですね。今の札なんかの話でいけば、これはもう小学校の低学年でも絶対喜ぶと思うんですね。もう光った瞬間にウーツですよ。わかりますよね？

だから、別にこの会社に限ったことじゃないです。海洋堂だっていいし、何だって、携帯のあのぐるぐるっていうモーター作っている会社、これは横浜にありますよね。そういう何か子供たちがオーツというものが一杯あるんで、それを是

非校長先生にも突っ込んでですね、この授業に登場させるのか、あるいは土曜日とか放課後に登場させるかですね、やってもらいたいと思います。

皆さん、そろそろこのお札とかをしまい始めていますが、出やすいところにしまっておいていただいて、あとで私の本なんか買っていただければいいんじゃないかなと思いますね。

それで、最後に一言だけ申し上げて終わりたいと思うんですが、教員の人というのは、大人が教えることで子供は学ぶというふうに思っているんですね。大人が教えることで子供が学ぶ、つまり大人が教える姿が子供にとっての一番の教材だというふうに思っているんですね。でも、これは反面正しいんですが、僕ずっと観察してまして、違うなと思うことが反面あるんです。大人が教えている姿よりもね、むしろ子供というのは、大人が学んでいる姿から学ぶんですよ。これが非常に大きいことですよ。子供にとって学んでいる大人の姿が最高の教材だっていうことですね。もう一回言いますよ。大人が学んでいる姿が最高の教材なんです。だから、皆さんがやっていることがものすごく価値があるんですね。分かりますよね。皆さんをコアにして、そういうふうに学ぶ大人、学ぼうとする大人、一緒にこういう授業で子供たちと学びたいという大人が学校にもっと集ってくだされば、その刺激で子供たちももっと学ぶようになります。つまり、学ぶという態度が感染していくんですね。このことを是非起こしていただければと思いますし、そのことが自己犠牲であってはならないですね。つまり、その学ぶことが楽しいと、本だけにかかわるんだったら楽しいとか、緑にかかわるんだったら楽しいとか、とにかくこういう学びで何かおもしろいネタがあったら楽しいという人が、一杯大人が寄ってきてくれれば、それがひとりでも子供たちに感染して子供たちの学力を高め、志を高め、思いやりを高めていくんだということを是非心に刻んで、明日からまた大変なお仕事がございますけれども、日本の子供たちの未来を開くためですから、それを期待したいと思います。私の話はこれで終わります。どうもありがとう。



## アンケート集計

- 実施日時 2009年2月25日(水) 13:00~17:50 /2009年2月26日(木) 9:30~15:30
- 会場 パナソニックセンター東京
- 参加者 25日(水)・・・149名 /26日(木)・・・105名
- アンケート 実施方法:アンケート用紙は受付時に配布。フォーラム終了後、出口にて回収。  
回収数:87枚(回収率58.4%)

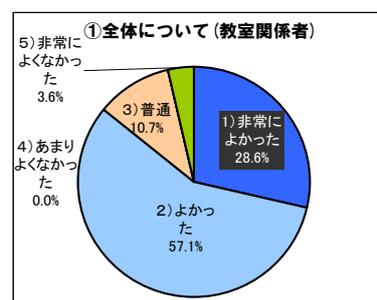
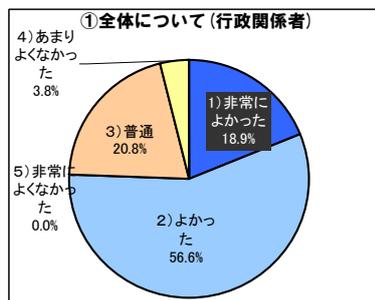
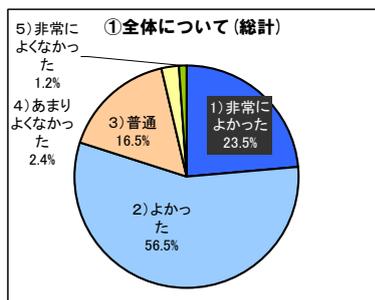
### ・回答者プロフィール

	人数	%
行政関係者	54	62.1%
教室関係者	28	32.2%
双方所属	1	1.1%
不明	4	4.6%
合計	87	100.0%

## 1. 放課後子ども教室全国研究大会のプログラム内容はいかがでしたか？

### ①全国研究大会全体について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常によかった	10	18.9%	8	28.6%	1	100.0%	1	33.3%	20	23.5%
2)よかった	30	56.6%	16	57.1%	0	0.0%	2	66.7%	48	56.5%
3)普通	11	20.8%	3	10.7%	0	0.0%	0	0.0%	14	16.5%
4)あまりよくなかった	2	3.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	2.4%
5)非常によくなかった	0	0.0%	1	3.6%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.2%
総計	53	100.0%	28	100.0%	1	100.0%	3	100.0%	85	100.0%
無記入、欠席	1		0		0		1		2	



### [自由記述件数]

(単位:人)

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
事例や情報を聞けた	6	3	2	11
講義や講演	3	1	0	4
貴重な機会	2	0	1	3
交流ができた	1	2	0	3
参考になった	3	0	0	3
要望	3	0	0	3
プログラム構成がよい	1	1	0	2
グループ討議	1	0	0	1
わかりやすい	1	0	0	1
その他	0	1	0	1

★上記①の設問に1)非常によかった、2)よかった と回答された方の自由記述より

#### 【行政関係者】

#### 事例や情報を聞けた(6人)

国内各地のさまざまな情報の共有。プログラムが充実
具体的な取組事例や分科会等で、他の市町の状況を知った
自分に必要な知識や情報が得られたから
全国レベルで放課後子ども教室についての考え方や情報を入手できたから
全国各地の情報を収集することができた
他の自治体の事例や、担当者との情報交換が参考になった

### 講義や講演(3人)

全国レベルで教育について熱い思いや貴重な経験を聞くことができた。特に堀田先生、藤原先生の講演が聞いてよかった

熱のある講義を聞いてよかった

講演がためになった。ワークショップも工夫されていた

### 参考になった(3人)

教育(子ども教室の中での)に求められているものが見つめたように思う

講演や講義がわかりやすく、参考になった

参考になった

### 貴重な機会(2人)

手探りで進めている自治体が多い中で、情報交換が図れ、考え方の整理ができる貴重な機会になったと思う

県、市町村、教室、それぞれのレベルの担当者が一同に会すのは、意義あることだと思います。

### グループ討議(1人)

グループ討議により貴重な情報交換ができた。他県の状況もわかりました

### プログラム(1人)

机がありメモが取れる体制だった。学ぶ点が多く実践してみたい。講演形式とワークショップ形式に分かれていたので、飽きず集中できるプログラムだった

### わかりやすい(1人)

講師がわかりやすく、課題へのヒントとなった

### 交流ができた(1人)

他地域との交流ができたこと

### 【教室関係者】

#### 事例や情報を聞いた(3人)

全国レベルでの話が聞いてよかった

自分の周りにはないタイプの事例だったので、興味深く聞いた。特に五ヶ瀬の発表は刺激になりました。

当市の取り組みに活用できる情報が得られた。

#### 交流ができた(2人)

全国の同じ活動をしている者が集い、話し合えたこと。

他の放課後子ども教室の活動を直接お伺いできてよかった。

#### プログラム(1人)

総論(理念)と各論(具体事例)がかみ合っていた

#### 講義や講演(1人)

事例発表、堀田先生の講演、奈須先生の講義、すべてが大変参考になりよかった

#### その他(1人)

特に身につくものがなかったが、全体としてはまあまあかなと思います。

### 【双方所属・その他の所属】

#### 事例や情報を聞いた(2人)

表彰が励みとなるとともに、情報をシェアする場として大変有意義であった。

他地域の情報が収集できた。

**貴重な機会(1人)**

平成19年にスタートした子ども教室。地域の実状に合わせて実施しているが、指導マニュアルがあるわけでもなく、この大会のような勉強会、情報交換は新しい可能性を感じた

**★上記①の設問に3)普通 と回答された方の自由記述より**

**【行政関係者】**

**要望(2人)**

研究大会の内容については、いろいろな立場からの講演がありよかったと思うが、日程のプログラムに余裕を持たせてほしい

講演は良かったです。ワークショップについては消化不良。地域の‘しゃべりたい大人’との短時間での合意形成は難しいですね。今日のメンバーでこのワークは厳しかったと思います(内容レベルではなく量レベル)。1日かけてやれば効果的だったと思います(分科会③)

**★上記①の設問に4)あまりよくなかった と回答された方の自由記述より**

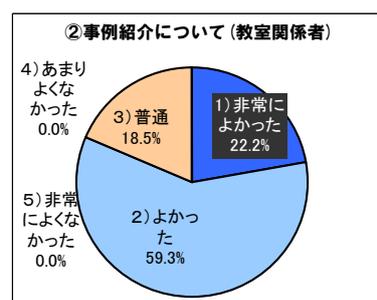
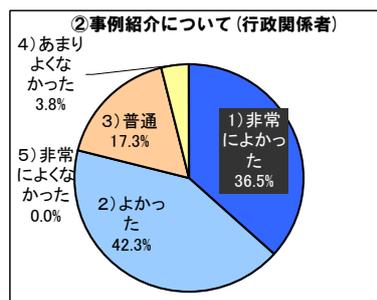
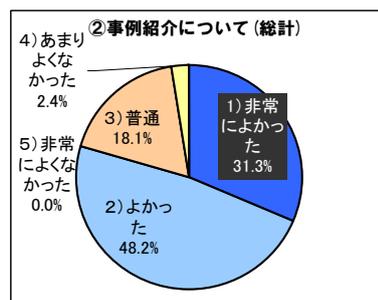
**【行政関係者】**

**要望(1人)**

初めての大会でありやむを得ない面もあるが、運営面での課題が多かった。①表彰者以外の集合時間が不案内 ②受付は時間通りに開始してほしい ③2日間での実施であれば表彰を午前中に行い、2日目は午前中で終了する方がよいと思う

**②事例紹介について**

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常によかった	19	36.5%	6	22.2%	1	100.0%	0	0.0%	26	31.3%
2)よかった	22	42.3%	16	59.3%	0	0.0%	2	66.7%	40	48.2%
3)普通	9	17.3%	5	18.5%	0	0.0%	1	33.3%	15	18.1%
4)あまりよくなかった	2	3.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	2.4%
5)非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	52	100.0%	27	100.0%	1	100.0%	3	100.0%	83	100.0%
無記入、欠席	2		1		0		1		4	



**[自由記述件数]**

(単位: 人)

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
参考になった	5	5	0	10
都市型と周辺地域に分けた事例	7	0	2	9
要望	4	1	0	5
感想	4	0	0	4
具体的	3	0	0	3
わかりやすい	0	2	0	2
疑問	1	1	0	2
時間が短い	2	0	0	2
その他	0	1	0	1

★上記②の設問に1)非常によかった、2)よかった と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

都市型と周辺地域に分けた事例(6人)

異なる特徴の地域の先進的、モデル的な事例が参考になった
大きいところ、小規模のところと、身近に感じられる取組みを聞かせてもらった
都市型、地方型の2つの事例紹介があり、それぞれ実情がよくわかった
都市型・地方型、それぞれの典型的な例を知ることができた。この事業の趣旨である「地域の実情に応じた」を体現した取組が参考になった
都市型と周辺地域に分けての事例は良かったです。県内においても両面の地域があるので
都市型と地方型に分けた発表はいろいろな視点からとらえることができ、今後の参考になった

感想(4人)

それぞれの立場で、自信を持って取り組まれておられ、1つの目標を持つことができた
宮崎の方の発表、情熱が伝わってきた
子どもを育てる熱意を感じた
地方型は、自分が考えている理想だった

参考になった(5人)

どちらもたいへん積極的な取組みで、参考になる点が多くあった
今後の教室運営に参考としたい内容の話が聞けました。
参考になった
実際にやっておられることが知りたかったので、参考になりました。
異なった方法での活動事例であったので参考になった。教育OB・NPO、いろいろな方法があると感じた

具体的(3人)

具体的な事例を通して、基本的な課題を把握できた
具体的であり、参考になるところが多くあった。問題点についても共通の部分があり、後のワークショップでは共有できた
具体的な事例、先進的な事例が聞いてよかった

時間が短い(1人)

発表は良かったが、時間が短かったのが残念であった。質問等により内容を深めることが必要ではないか
---

疑問(1人)

五ヶ瀬町の活動はインパクトはあるが、どうしても代表の人の御苦労、がんばりが前面に出てしまう。功罪半ば。すべての市町村でできるのでしょうか
--

【教室関係者】

参考になった(5人)

お話をきけて、参考になりました。
自分たちのやっていることと比較できた。
大阪の例：学校の先生が中心に活動。五ヶ瀬の例は、毎日ライフワークとして活動している。大変参考になった。
地方の部分で活動しているので、宮崎県の事例が参考となった。
本年度から山奥で始まった教室で手探りの状態から目指す方向が見えた。

わかりやすい(2人)

とても分かりやすく、問題提起やこれからの活動に向けて必要な大切なことなど、納得できるお話でした。気持ち、心のこもったお話でした。
より分かりやすかったと思います。他の教室の実態を知ることができたので勉強になりました。

**【双方所属・その他の所属】**

**都市型と周辺地域に分けた事例(2人)**

大都市と地方と両方の事例で非常に参考になった

都市型、地方型両方の実践事例であったため、比較しながらメリット、デメリットを把握することができた。

**★上記①の設問に3)普通 と回答された方の自由記述より**

**【行政関係者】**

**要望(2人)**

活動の紹介であると、どこも似たりよったり。困っているところをどう解決したか、あたりの取組はききたい

個人の資質によらない、事業の進め方がわかるとよかった

**都市型と周辺地域に分けた事例(1人)**

都市型と地方型、両方見れて良かったです。地方型の発表が、地域課題の解決に向けた取組みをしていることに共感しました。

**時間が短い(1人)**

短くて、もう少し深いところまで聞きたかった

**【教室関係者】**

**要望(1人)**

特殊事例があればよかった。

**疑問(1人)**

全児童対策であるといいながらも、登録制でプログラムありきであるところ。そこからもれている子どもに、実は気になる最も支援を必要とするケースが潜んでいる。

**その他(1人)**

特別ユニークなものではないから(子どもの自主性をあまり感じられない)

**★上記①の設問に4)あまりよくなかった と回答された方の自由記述より**

**【行政関係者】**

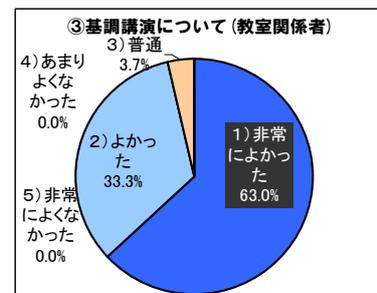
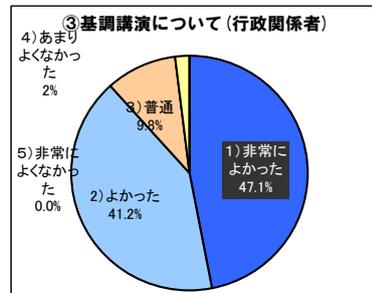
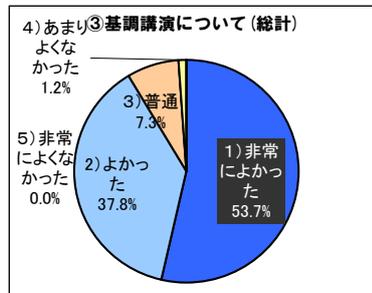
**要望(2人)**

観点をもう少ししぼって、発表してほしいかった

事例自体は素晴らしいが、行政として知りたい話が聞けなかった。それぞれの事例における予算の話が聞きたかった。大阪市の事例については、児童クラブとの兼ね合いはどうなっているのだろうか？宮崎も同じ

③ 基調講演について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常に良かった	24	47.1%	17	63.0%	0	0.0%	3	100.0%	44	53.7%
2) よかった	21	41.2%	9	33.3%	1	100.0%	0	0.0%	31	37.8%
3) 普通	5	9.8%	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	6	7.3%
4) あまりよくなかった	1	2.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.2%
5) 非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	51	100.0%	27	100.0%	1	100.0%	3	100.0%	82	100.0%
無記入、欠席	3		1		0		1		5	



[自由記述件数]

(単位:人)

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
わかりやすかった	9	2	1	12
事業主旨を再確認できた	9	0	2	11
認識	1	5	0	6
意欲	0	3	0	3
参考になった	2	1	0	3
課題	2	0	0	2
感想	2	0	0	2
要望	2	0	0	2
ここがよい	1	0	0	1
その他	1	0	0	1

★上記③の設問に1)非常に良かった、2)よかった と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

わかりやすかった(9人)

わかりやすい講義だった
わかりやすく、また、視野が広がった
わかりやすく、具体的で、よく理解できた
わかりやすく、とても参考になった。子ども教室の運営の心構えの参考にしたいと思いました。
課題→原因→解決策が明確に理解できた
課題を明確にして、解を導いていただきました。これまでの実践を見直してみたいと強く感じました
起承転結のきちんとした話でよかった
教育の課題、その対策、子ども教室のあり方について、わかりやすく具体的な内容でよかった
明快だった

事業主旨を再確認できた(9人)

この事業の趣旨を再確認できるよい機会となった
なぜ放課後子ども教室、地域が果たす役割、社会教育の重要性を再認識しました
子ども教室を推進する意義をわかりやすく説明いただけた。少子化対策として進められがちだが、子どもをどう育成するかということが明確になった
事業の方向性を示していただいた
悩んでいた考え方に整理をつけるいいヒントになった
放課後の方向性がはっきり見えました。
放課後子ども教室の趣旨を再確認できたから
放課後子ども教室の重要性がわかった
歴史的な経緯もふまえ、こうした取組が必要となってきた現状について理解できた

### 課題(2人)

課題と原因がよくわかった。今後どのように具体的に展開するか  
社会的な課題が、少子化が原因であり、その対策等が明確になったから

### 感想(2人)

堀田先生のお話は楽しく、社会教育(子ども教室)に携わる者として元気になりました  
堀田先生のお話を初めて聞きましたが、大変感銘を受けました。論理性と倫理性あいまったすばらしいお話でした

### 参考になった(2人)

自分がやっていくことの指針になりました  
弁護士としていろいろな犯罪を通じての観点から今後の教育のあり方がよくわかった

### ここがよい(1人)

今まで聞いた方と切り口がちがいが、目新しい話であった

### 認識(1人)

「大人に仕切らせないこと」大人の居場所づくりメインにはないことを伝えていただきました

### 要望(1人)

内容はとてもよかったが、質問の時間を取るべきだと思う。講師の方も、何か聞いてほしいと言っていたし

### 【教室関係者】

#### 認識(5人)

38年間工業高校で教員をやってきて、文部科学省の方針の分析が私の見方と似ており、中学校までで落ちこぼれた子どもほど得意方面を認めれば、ものづくりでは伸びて創造的な面で伸びる  
子どもたちと直接活動をしているので、サポーターが子どもたちに対して「待つ心」のことが大事であるということ。  
子どもたちのやる気を起こさせるプログラムにする・・・失敗や困難の中にこそ学びがある・・・等、改めて接し方を考えさせられました。  
真に自立した人間として、子どもたちを社会に送り出す大切さを分かりやすく示唆した。  
生きる力(異年齢の子どもが一緒に遊ぶ、子どもたちが自発的にやる)待つことが大切。

#### 意欲(3人)

現場でもいかせていけるように頑張っていきたいです。  
今、わたしたちが活動していることの勇気づけになったから  
大人の役割で生きる力など、私たちのやっていること(子ども教室)につながり、考えさせられ、頑張ろうと思いました。

#### わかりやすかった(2人)

ご自身が実践家で抽象的でなかったから。話の組み立てがよくわかりやすかった  
堀田 力さん、分かりやすくよかった。

#### 参考になった(1人)

堀田先生、奈須先生のお話がとても今後の活動に生かせます

### 【双方所属・その他の所属】

#### 事業主旨を再確認できた(2人)

我々の子ども教室は、子どもの自由度を重視していたので、それを証明して下さって大変納得できた。大人主体の考えはやはり、子どものためにならない  
現在の教育課題の具体例を示していただいたため、説得力があり、自分に取り組むべきことが明確になった。

#### わかりやすかった(1人)

分かりやすく、ためになった。

★上記③の設問に3)普通 と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

要望(1人)

昔と今が違う現状については、興味深く聞けた。しかしながら現在の現状の中でどのようにしていかという話が聞きたい

★上記③の設問に4)あまりよくなかった と回答された方の自由記述より

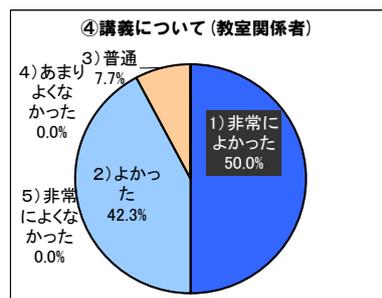
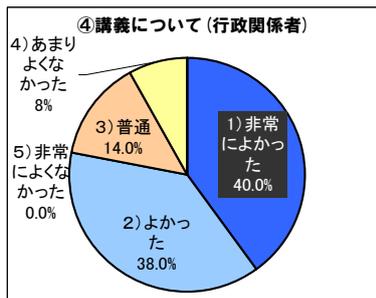
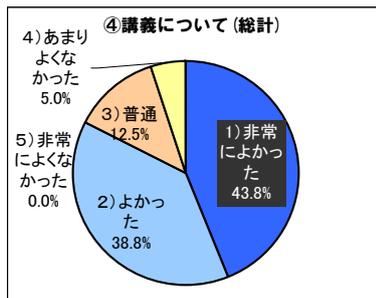
【行政関係者】

その他(1人)

あまりにも当然すぎて…

④ 講義について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常によかった	20	40.0%	13	50.0%	0	0.0%	2	66.7%	35	43.8%
2)よかった	19	38.0%	11	42.3%	1	100.0%	0	0.0%	31	38.8%
3)普通	7	14.0%	2	7.7%	0	0.0%	1	33.3%	10	12.5%
4)あまりよくなかった	4	8.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	4	5.0%
5)非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	50	100.0%	26	100.0%	1	100.0%	3	100.0%	80	100.0%
無記入、欠席	4		2		0		1		7	

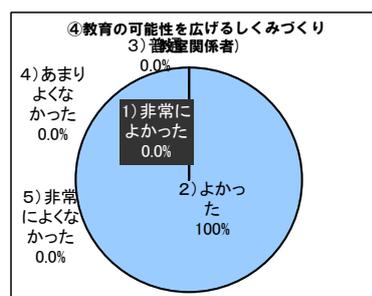
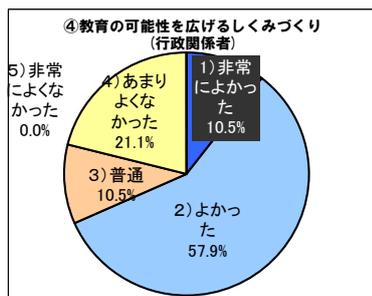
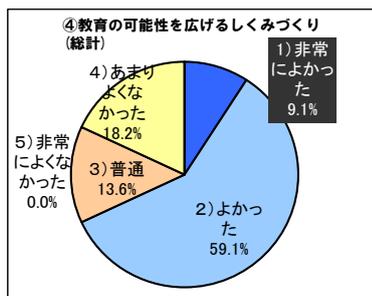


講義タイトル	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
教育の可能性を広げるしくみづくり～教育プラットフォームのあり方～	19	38.0%	2	8.0%	0	0.0%	1	33.3%	22	27.8%
地域とつながるプログラムが子どもたちにもたらす価値	30	60.0%	22	88.0%	1	100.0%	2	66.7%	55	69.6%
講義には参加していない	1	2.0%	1	4.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	2.5%
総計	50	100.0%	25	100.0%	1	100.0%	3	100.0%	79	100.0%
無記入、欠席	4		3		0		1		8	

1. プログラム内容の満足度 ④ 講義について

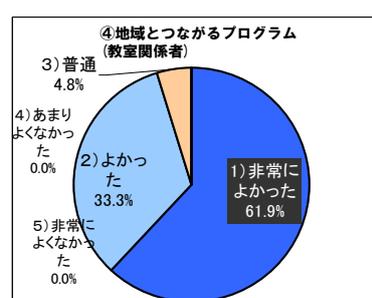
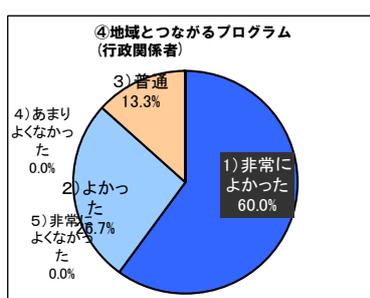
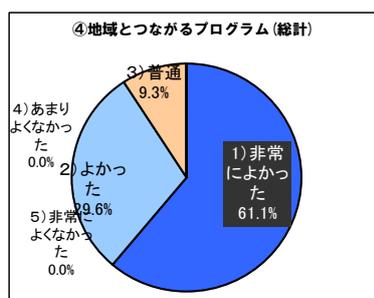
●教育の可能性を広げるしくみづくり～教育プラットフォームのあり方～

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常によかった	2	10.5%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	9.1%
2)よかった	11	57.9%	2	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	13	59.1%
3)普通	2	10.5%	0	0.0%	0	0.0%	1	100.0%	3	13.6%
4)あまりよくなかった	4	21.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	4	18.2%
5)非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	19	100.0%	2	100.0%	0	0.0%	1	100.0%	22	100.0%
無記入、欠席	0		0		0		0		0	



●地域とつながるプログラムが子どもたちにもたらす価値

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常に良かった	18	60.0%	13	61.9%	0	0.0%	2	100.0%	33	61.1%
2) よかった	8	26.7%	7	33.3%	1	100.0%	0	0.0%	16	29.6%
3) 普通	4	13.3%	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	5	9.3%
4) あまりよくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5) 非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	30	100.0%	21	100.0%	1	100.0%	2	100.0%	54	100.0%
無記入、欠席	0		1		0		0		1	



●教育の可能性を広げるしくみづくり～教育プラットフォームのあり方～

[自由記述件数]

(単位:人)

	行政関係者	教室関係者	双方・行政教室以外	総計
コーディネーターに関すること	3	1	0	4
具体的な話	2	0	1	3
熱意を感じた	2	0	0	2
ここがよくない	1	0	0	1
意欲	1	0	0	1
現実難しい	1	0	0	1
参考になった	0	0	1	1
その他	1	0	0	1

★上記④の設問に1)非常に良かった、2)よかった と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

コーディネーターに関すること(3人)

カリスマコーディネーターの話が、直接聞けたのはよかった
バイタリティー、アクティブのあるお話だった。ネットワークとその共有化の必要性、重要性を確認しました。さまざまな意味からコーディネーターの役割やあり方を確認できた。家庭教育にも生かせるお話しでした
学校、地域、保護者がうまく連携していると思う。コーディネーターとなる人をいかにして見つけるかが課題かと感じた

熱意を感じた(2人)

熱のある、汗を流しての、エネルギッシュな話でよかった
熱意はしっかり伝わってきた。考え方にも共感できることが多い

具体的な話(2人)

実体験をもとに具体的に話されていたため、納得できた
たくさん事例をご紹介いただいた

意欲(1人)

「地域教育プラットフォーム」の考え方がよく理解できたつもりです。プラットフォームを基に働きかけが効果的にできるような基盤づくりをせねばと考えます
--

【教室関係者】

コーディネーターに関すること(1人)

プラットフォームの創造。私にもできるかな。
-----------------------

★上記④の設問に3)普通 と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

ここがよくない(1人)

東京都あるいは杉並区としての取組や、それに対する熱意はよくわかったが、内容的にやや多く、具体的な部分がわかりにくい面があった
--

【双方所属・その他の所属】

参考になった(1人)

親・学校・社会教育担当者それぞれの役割を明確にしてもらった。子どもへのアプローチ方法を再検討したい。
--

★上記④の設問に4)あまりよくなかった と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

現実難しい(1人)

理想論中心の講義であったので、現実問題として不可能なことだと思う
----------------------------------

その他(1人)

事例紹介みたいでした
------------

●地域とつながるプログラムが子どもたちにもたらす価値

【自由記述件数】

(単位:人)

	行政関係者	教室関係者	双方・行政教室以外	総計
学校教育と社会教育の視点	2	3	0	5
認識	3	0	0	3
参考になった	1	2	0	3
事業主旨を再確認できた	2	0	0	2
考えを整理できた	2	0	0	2
具体的な話	0	1	0	1
その他	1	0	0	1
ここがよい	1	0	0	1
感想	0	1	0	1
時間が短い	1	0	0	1

★上記④の設問に1)非常によかった、2)よかった と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

認識(3人)

キーワードとして、参加になるものが上げられていました。「明治に学校は国に接収された」「子どもに学力がつくほど地域が荒れ果てていく」など

子どもたちが主体的に学ぶしくみを大人が設定することが大切なことがわかったから

受験学力主義からの脱却の誘導

事業主旨を再確認できた(2人)

なぜ放課後子ども教室、地域が果たす役割、社会教育の重要性を再認識しました

子どもをめぐる環境、子ども教室の必要性の背景がよくわかった

考えを整理できた(2人)

すこし、口調が早かったので、わかりにくい点があったが、歴史的考えを整理できた

悩んでいた考え方に整理をつけるいいヒントになった

学校教育と社会教育の視点でとらえた(2人)

学校教育との関連の中で、広い見地から教育について考えることができたから

具体例を織り交ぜながら、学校教育と社会教育の両者の視点から本事業をとらえることができた

ここがよい(1人)

体系的でよかった

時間が短い(1人)

話は素晴らしく良かったが、時間が足りなかった

【教室関係者】

学校教育と社会教育の視点で(3人)

うまくいかないことが子どもにとって学ぶこととなる意味が分かった。

学校教育と地域の教育のちがいが歴史的に語られ、面白かった。

今までのこの類の教授の講義では得られなかった新しい視点での話が聞けた。

参考になった(2人)

(子ども塾)子どもと向き合う毎日なので、今後の活動の上で、とても参考になった

大切にすること(子どもに関わることで)がよく分かりました。

具体的な話(1人)

具体例が適切でよくわかった。子どもの活動と学びの接点関係が理解できた

感想(1人)

もう少し回りを見直してみたいと思いました

★上記④の設問に3)普通 と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

参考になった(1人)

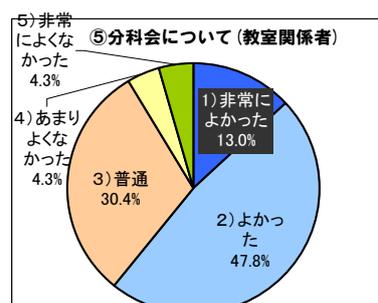
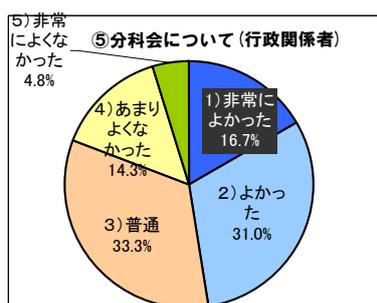
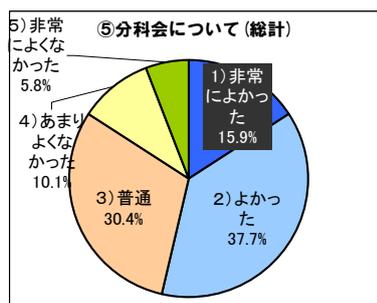
いろいろヒントをもらったと思う

その他(1人)

ただし話ばかりでわかりにくい部分もありました

⑤ 分科会について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常に良かった	7	16.7%	3	13.0%	0	0.0%	1	33.3%	11	15.9%
2) やかった	13	31.0%	11	47.8%	1	100.0%	1	33.3%	26	37.7%
3) 普通	14	33.3%	7	30.4%	0	0.0%	0	0.0%	21	30.4%
4) あまりよくなかった	6	14.3%	1	4.3%	0	0.0%	0	0.0%	7	10.1%
5) 非常によくなかった	2	4.8%	1	4.3%	0	0.0%	1	33.3%	4	5.8%
総計	42	100.0%	23	100.0%	1	100.0%	3	100.0%	69	100.0%
無記入、欠席	12		5		0		1		18	

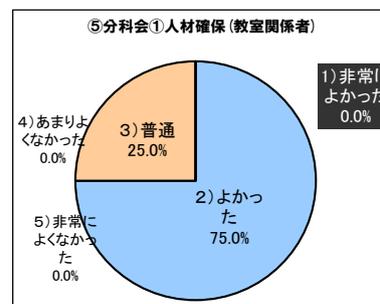
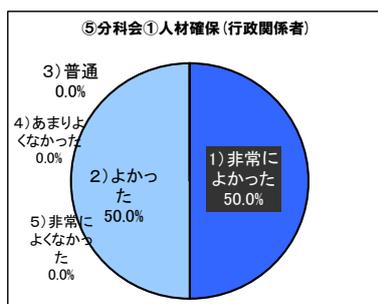
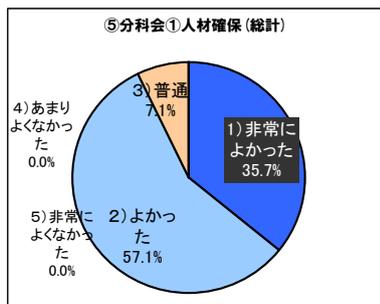


講義タイトル	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
分科会① 人材確保について	10	23.8%	4	17.4%	0	0.0%	0	0.0%	14	20.3%
分科会② 他事業との連携について	22	52.4%	4	17.4%	0	0.0%	2	66.7%	28	40.6%
分科会③ 効果的なプログラムについて	10	23.8%	15	65.2%	1	100.0%	1	33.3%	27	39.1%
総計	42	100.0%	23	100.0%	1	100.0%	3	100.0%	69	100.0%
無記入、欠席	12		5		0		1		18	

1. プログラム内容の満足度 ⑤分科会について

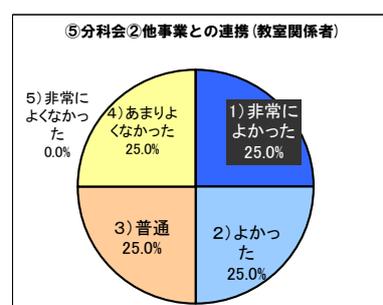
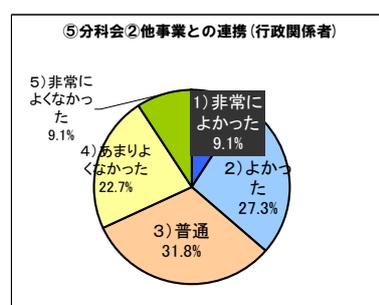
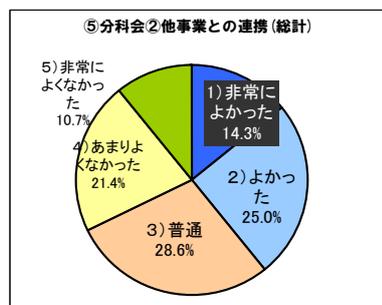
●分科会① 人材確保について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常に良かった	5	50.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	5	35.7%
2) やかった	5	50.0%	3	75.0%	0	0.0%	0	0.0%	8	57.1%
3) 普通	0	0.0%	1	25.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	7.1%
4) あまりよくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5) 非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	10	100.0%	4	100.0%	0	0.0%	0	0.0%	14	100.0%
無記入、欠席	0		0		0		0		0	



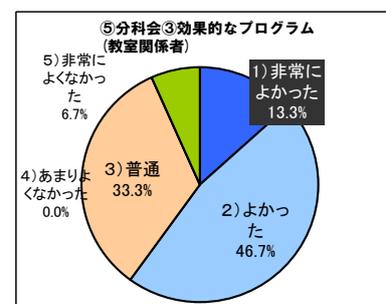
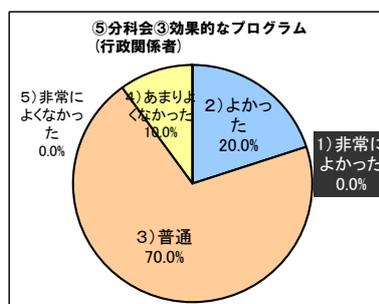
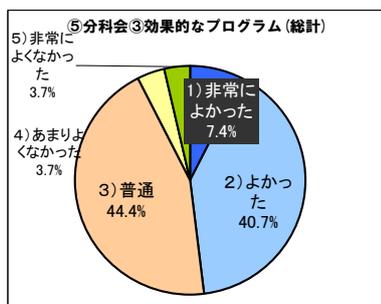
●分科会② 他事業との連携について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常に良かった	2	9.1%	1	25.0%	0	0.0%	1	50.0%	4	14.3%
2) よかった	6	27.3%	1	25.0%	0	0.0%	0	0.0%	7	25.0%
3) 普通	7	31.8%	1	25.0%	0	0.0%	0	0.0%	8	28.6%
4) あまりよくなかった	5	22.7%	1	25.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	21.4%
5) 非常によくなかった	2	9.1%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%	3	10.7%
総計	22	100.0%	4	100.0%	0	0.0%	2	100.0%	28	100.0%
無記入、欠席	0		0		0		0		0	



●分科会③ 効果的なプログラムについて

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常に良かった	0	0.0%	2	13.3%	0	0.0%	0	0.0%	2	7.4%
2) よかった	2	20.0%	7	46.7%	1	100.0%	1	100.0%	11	40.7%
3) 普通	7	70.0%	5	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	12	44.4%
4) あまりよくなかった	1	10.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%
5) 非常によくなかった	0	0.0%	1	6.7%	0	0.0%	0	0.0%	1	3.7%
総計	10	100.0%	15	100.0%	1	100.0%	1	100.0%	27	100.0%
無記入、欠席	0		0		0		0		0	



●分科会① 人材確保について

[自由記述件数]

(単位:人)

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
情報交換できた	2	1	0	3
情報を得られた	1	0	0	1
人材育成・確保について	1	0	0	1

★上記⑤の設問に1)非常によかった、2)よかった と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

情報交換できた(2人)

ワークショップ形式でじっくり情報の交換ができたため
現場での生の情報が交換できてよかった

情報を得られた(1人)

情報収集ができ、自分の自治体の施策を見つめなおすよい機会となった
----------------------------------

人材育成・確保について(1人)

人材確保、人材育成について様々な方法が学べた
------------------------

【教室関係者】

情報交換できた(1人)

色々な立場、取り組みを知れた。自身の活動を見つめ直した。
------------------------------

●分科会② 他事業との連携について

[自由記述件数]

(単位:人)

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
要望など	9	2	1	12
情報交換できた	3		1	4
ワークショップ形式	2		0	2
疑問	1		0	1
参考になった	1		0	1

★上記⑤の設問に1)非常によかった、2)よかった と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

情報交換できた(3人)

グループ討議により貴重な情報交換ができた。他県の状況もよくわかりました
他県の状況を知ることができ、意見交換の場となった
様々な立場の意見が聞けた。アイデアも…

ワークショップ形式(1人)

ワークショップ形式だったので
----------------

参考になった(1人)

事業の連携について、検討するきっかけとなった。
-------------------------

要望など(1人)

いろんな取り組み事例が参考になった。児童館や学童クラブ事業との連携についてもう少し深く話ができればさらによかった
--

【双方所属・その他の所属】

情報交換できた(1人)

同じ悩みをもつ全国の仲間と情報を共有することで、新しいアイデアをたくさん吸収することができた。
---

★上記⑤の設問に3)普通 と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

要望など(4人)

アイスブレイク、2対2で変わっていた3点を当てるとするのは面白かった。内容として、学校支援地域本部との連携が強すぎたのが残念。ポジシントークなので仕方ないですが、児童クラブとの連携を取り上げるべき
テーマとしては具体的な事例がほしかった
もっと時間がほしかった
初心者向けという印象、確認的な内容が多かった。発展的な内容を望む

ワークショップ形式(1人)

ワークショップ型の分科会で、生の声が聞けたから
-------------------------

【教室関係者】

要望など(1人)

②に出席したがコーディネーターとしては、「サルが星を見る」様な感じ
-----------------------------------

★上記⑤の設問に4)あまりよくなかった、5)非常によくなかった と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

要望など(4人)

グループに分かれて座っていたのに、グループでの話し合う時間がほとんどなくて残念だった
ポイントをもっとしぼってほしかった。司会者が話しすぎていた感じ
意図的に連携を図るという前提が最後のまとめで出されたから
参加者の情報交換ができず、内容もずれていてとても残念。進め方にも問題があるように感じました
自己紹介に時間をかけすぎ、内容が深まらなかった。連携そのものの意味を共有せずに、単に事業の説明ではもの足りない
同じ行政の規模の方とグループ討議をしたかった

疑問(1人)

主催は文科省で進行は株式会社キャリアリンク…。キャリアリンクさんがどのように地域や行政、文科省等と関わっているのかよくわからず、失礼なのですが、参加者＝現場との温度差があったように思います。
---

【教室関係者】

要望など(1人)

初級編だったように思う
-------------

【双方所属・その他の所属】

要望など(1人)

事業内容についての理解度が様々(進行している人も含む)で、期待はずれだった
---------------------------------------

●分科会③ 効果的なプログラムについて

[自由記述件数]

(単位:人)

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
要望など	7	3	0	10
情報を得られた	0	0	1	1
いろんな立場の意見を聞いた	0	1	0	1
ここがよい	1	0	0	1

★上記⑤の設問に1)非常によかった、2)よかった と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

ここがよい(1人)

体験と理論がかみ合っているのが楽しくもち帰って活用できる
------------------------------

【教室関係者】

いろんな立場の意見を聞いた(1人)

他県での活動をしることができて参考にさせていただきました
------------------------------

【双方所属・その他の所属】

情報を得られた(1人)

他地域の情報が収集できた

★上記⑤の設問に3)普通 と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

要望など(6人)

とてもよかったのですが、全員の自己紹介には時間がかかり過ぎたと思います

ワークショップの組み立てはよかったが、会場に応じた内容でできていないように思えた。できない部分はいいとして、このワークショップが消化不良的な感が残るところがコーディネートの上では？ ありがとうございます。全国の人と交流できるところはよかった。共通認識ができた

ワークショップをするには時間が短い。することが多かった。いろいろな想いの方が集まっているので話が広がる。

活動メニューはどの教室も大体似通っていた。議論するテーマとしては、プログラムの企画実施の課題、理念にしばってもっと十分話し合っただけだった。自己紹介の時間が長くて、グループワークの時間が短すぎたと思う。参加者のいろいろな意見を聞き、共通認識が持ててよかったと思う。

時間をかけてやりたかったです。1日目の講義と連動させて実施する。例えば、その時にグループ分けしてコミュニケーションがとれるようにする

分科会としてのねらいが明確でない。自己紹介の時間が長すぎて、その他議論する時間がない

【教室関係者】

要望など(3人)

私は直接子供たちと接し又、事務局も担当しているのでサポーターの参加の人の意見とか話をもっと出来ればと思った

時間的にムリがあった。もっと詰めて話しをしたかった。短い時間で知りたいことが充分知り得なかった。残念！

自分の課題の解決に役に立たなかった

★上記⑤の設問に4)あまりよくなかった、5)非常によくなかった と回答された方の自由記述より

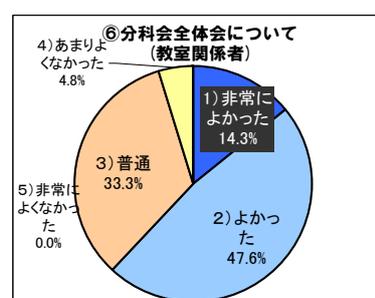
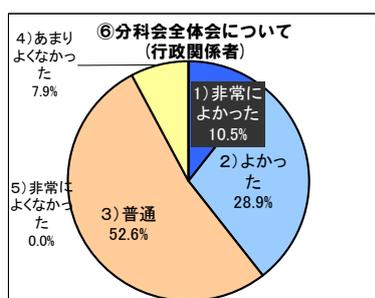
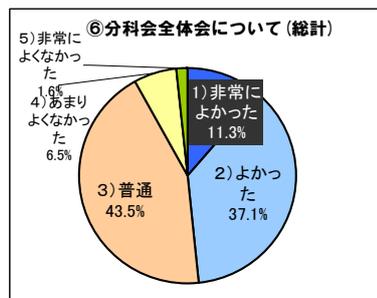
【教室関係者】

要望など(1人)

初めに「結論有り」ではない。立場がそれぞれ違い、方法もそれぞれ違う立場の者(地域)の考えをひとつにまとめることはできない。形(型)にはめたワークショップは必要ない。参加者の双方向性の「生」の意見を大切にしたい。「教室」のとらえ方がそれぞれ違い「何でも有り」の状態。主旨に合った方向に修正すべきでは？また、「何でも有り」でもよしとするのか？

⑥ 分科会全体会について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常に良かった	4	10.5%	3	14.3%	0	0.0%	0	0.0%	7	11.3%
2)よかった	11	28.9%	10	47.6%	1	100.0%	1	50.0%	23	37.1%
3)普通	20	52.6%	7	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	27	43.5%
4)あまりよくなかった	3	7.9%	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	4	6.5%
5)非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	50.0%	1	1.6%
総計	38	100.0%	21	100.0%	1	100.0%	2	100.0%	62	100.0%
無記入、欠席	16		7		0		2		25	



[自由記述件数]

(単位:人)

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
要望	9	2	1	12
プレゼン	2	0	0	2
情報の共有	1	0	0	1
情報整理	0	1	0	1
人材に関して	1	0	0	1
認識	1	0	0	1
理解できた	0	1	0	1

★上記⑥の設問に1)非常に良かった、2)よかった と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

要望(3人)

まとめの資料をいただきたい
各分科会の様子を知ることができた。できれば、各分科会の資料を提供してもらいたい
説明に使われたパワーポイントを紙でもらいたい

プレゼン(1人)

パワーポイントを作成したのはよかった
--------------------

情報の共有(1人)

分科会のそれぞれの情報が共有できた
-------------------

人材に関して(1人)

人材確保の発表がとても参考になった
-------------------

【教室関係者】

理解できた(1人)

全体像がつかめたと同時に、私の抱いていた課題が解決できたから
--------------------------------

【双方所属・その他の所属】

要望(1人)

それぞれの分科会テーマが広く、深い。時間さえあれば、どの分科会にも参加したかった。
---

★上記⑥の設問に3)普通 と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

要望(4人)

ファシリテーターがあらすじを説明するので、発表者を立てる必要性がわからない。単なる感想の発表？ どちらか1つでいいのでは？
もう少し時間があると良いかと思います。せつかく分科会で話し合った内容なので
もっと時間がほしかった
説明内容が少しわかりにくかった。機器の調子もあまりよくなかったように思う

プレゼン(1人)

パワーポイントの発表はわかりやすかった
---------------------

認識(1人)

各分科会の発表を聞いて、人材確保プログラムにしても、「地域の実状に応じた目的・ねらいを明確にして、新しい視点で活動することが大事」といった点がうきでたことがよかった
--

【教室関係者】

情報整理(1人)

すでに得ている情報の整理をした。
------------------

要望(1人)

時間が少ないようであった。他の状況を十分に聞いたり、報告しあう時間。参加者はコーディネーター等役職者が多く、直接子どもたちと接触している人の参加が少ないようであるが、現場の人の参加がもっとあればよいと思った。
--

★上記⑤の設問に4)あまりよくなかった と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

要望(2人)

他の分科会のものについて、消化しきれない部分が多くあった。詳しく知りたかった
内容が多すぎる。活動ごとの時間が短すぎる

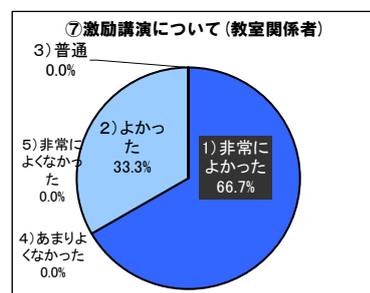
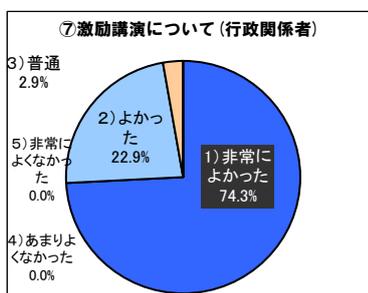
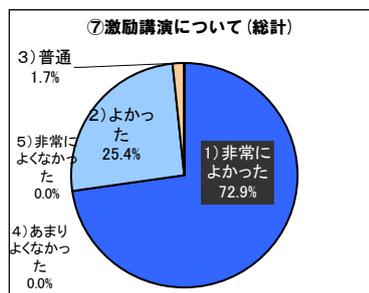
【教室関係者】

要望(1人)

「まとめ」をプリントアウトして配布してもらえないだろうか。時間調整の感。
--------------------------------------

⑦ 激励講演について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常によかった	26	74.3%	14	66.7%	1	100.0%	2	100.0%	43	72.9%
2)よかった	8	22.9%	7	33.3%	0	0.0%	0	0.0%	15	25.4%
3)普通	1	2.9%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.7%
4)あまりよくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
5)非常によくなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	35	100.0%	21	100.0%	1	100.0%	2	100.0%	59	100.0%
無記入、欠席	54		28		1		4		87	



【自由記述件数】

(単位:人)

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
わかりやすい・ためになった	5	1	0	6
理解できた	2	2	0	4
元気が出た	3	0	0	3
現場の声	1	2	0	3
要望	2	1	0	3
具体的	0	2	0	2
意欲	2	0	0	2
新鮮	0	0	2	2
豊かな発想	1	0	0	1

★上記⑦の設問に1)非常によかった、2)よかった と回答された方の自由記述より

【行政関係者】

わかりやすい・ためになった(5人 合計6件)

エンパワーメントされた
ためになった。是非試してみたい
わかりやすい講演でよかった
学校の現状となぜ地域の支援が必要なのか、わかりやすかった
具体的な例に沿ってわかりやすかった

元気が出た(3人 合計3件)

元気が出ました
元気になりました!
聞いていて今後の力となるものであった

意欲(2人 合計2件)

ダイナミズムを意識できるようになりたいと思いました
意欲がわいて、具体的な方策が浮かんだ

要望(2人 合計3件)

もっと聞きたいです
全国すべての教育関係者に聞いてほしい

理解できた(2人 合計4件)

共感できました
現在の学校教育の実態がわかり、今何をすべきか考えさせられた。大変面白い講演でよかった

現場の声(1人 合計3件)

これまでの経験から出てくるさまざまな事例が今後のヒントとなった
---------------------------------

豊かな発想(1人 合計11件)

発想が豊かだから
----------

【教室関係者】

具体的(2人 合計3件)

具体的でよかった。
具体例を交えて、パワー・エネルギーをもらいました。ありがとうございました。

現場の声(2人 合計3件)

本大会のメインであったもやもやが解消された。今なぜ放課後が大切かまでわかってきた。本当に現場を知っている人の話は、やはり的を得ているので分かりやすい。机上論の理想を求めた話より大切です。
民間企業人が教育界の閉鎖性を打開した実践家としての話に説得力があった

理解できた(2人 合計4件)

一日目は違った視点で事業の意図、大切さを知ることができた。
自分の課題の全てが解決したような気持ちになった。自分たちの進捗が正しいことを再確認した。

**わかりやすい・ためになった(1人 合計6件)**

話にメリハリがあり、参考となる部分も多くあった。

**要望(1人 合計3件)**

質問をさせてほしい。現状分析はわかったが、根っこのなぜか分析がほしい

**【双方所属・その他の所属】**

**新鮮(2人 合計2件)**

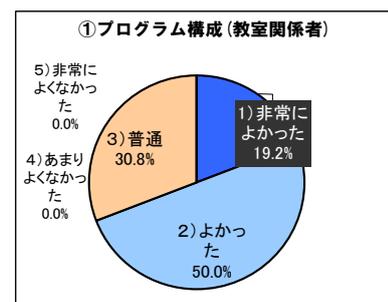
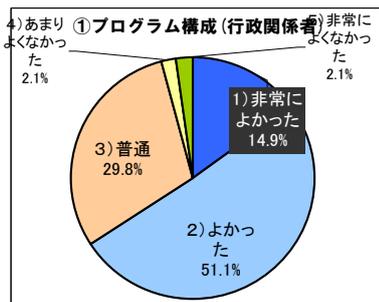
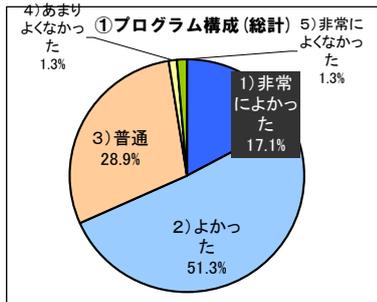
行政には思いつかない活動、すばらしい取り組み

すべてが新鮮で、おどろきと発見の連続でした。ありがとうございました。

## 2. 研究大会の開催形態はいかがでしたか？

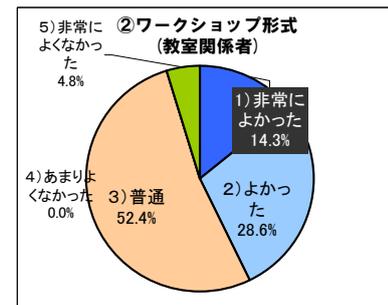
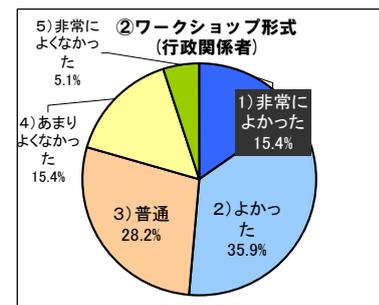
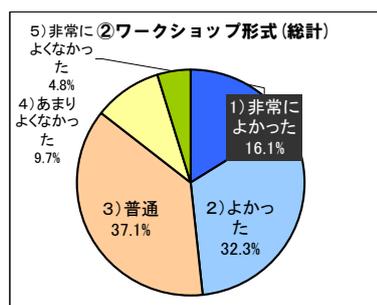
### ①プログラム構成について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常に良かった	7	14.9%	5	19.2%	0	0.0%	1	50.0%	13	17.1%
2) やかった	24	51.1%	13	50.0%	1	100.0%	1	50.0%	39	51.3%
3) 普通	14	29.8%	8	30.8%	0	0.0%	0	0.0%	22	28.9%
4) あまりよくなかった	1	2.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.3%
5) 非常によくなかった	1	2.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.3%
総計	47	100.0%	26	100.0%	1	100.0%	2	100.0%	76	100.0%
無記入、欠席	7		2		0		2		11	



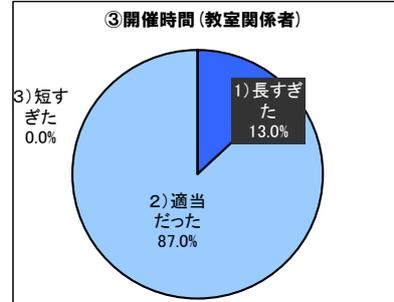
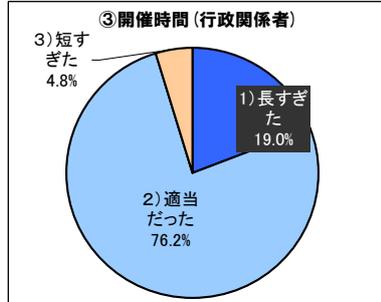
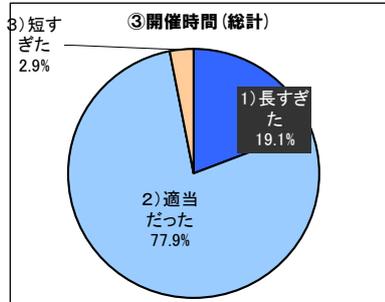
### ②ワークショップ形式について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常に良かった	6	15.4%	3	14.3%	0	0.0%	1	100.0%	10	16.1%
2) やかった	14	35.9%	6	28.6%	0	0.0%	0	0.0%	20	32.3%
3) 普通	11	28.2%	11	52.4%	1	100.0%	0	0.0%	23	37.1%
4) あまりよくなかった	6	15.4%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	9.7%
5) 非常によくなかった	2	5.1%	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	3	4.8%
総計	39	100.0%	21	100.0%	1	100.0%	1	100.0%	62	100.0%
無記入、欠席	15		7		0		3		25	



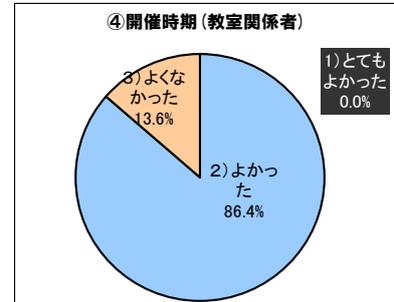
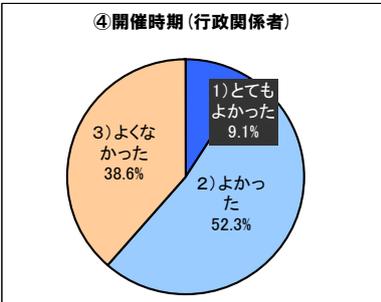
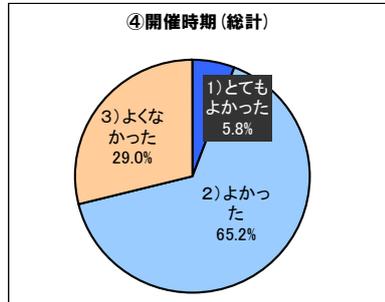
### ③開催時間について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)長すぎた	8	19.0%	3	13.0%	1	100.0%	1	50.0%	13	19.1%
2)適当だった	32	76.2%	20	87.0%	0	0.0%	1	50.0%	53	77.9%
3)短すぎた	2	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	2	2.9%
総計	42	100.0%	23	100.0%	1	100.0%	2	100.0%	68	100.0%
無記入、欠席	12		5		0		2		19	



### ④開催時期について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)とてもよかった	4	9.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	4	5.8%
2)よかった	23	52.3%	19	86.4%	1	100.0%	2	100.0%	45	65.2%
3)よくなかった	17	38.6%	3	13.6%	0	0.0%	0	0.0%	20	29.0%
総計	44	100.0%	22	100.0%	1	100.0%	2	100.0%	69	100.0%
無記入、欠席	10		6		0		2		18	



★上記④の設問に1)とてもよかった、2)よかった と回答された方の希望時期

#### 【行政関係者】

年度当初もよいかもしれませんが
年度末なので、もう少し早い時期が良い(12月前後)
県等の予算がかたまる前であれば、学んだことを組み込みやすいのかも。この時期はすでに議会も最中、もしくは終了

#### 【教室関係者】

10月ごろ
-------

#### 【双方所属・その他の所属】

1月下旬
------

★上記④の設問に3)よくなかった と回答された方の希望時期

【行政関係者】

議会の開会中は避けてほしい(4人)

2月議会の開会中は避けてほしい
議会開会中でない方がよい
議会と重複
議会中

もう少し早い時期(4人)

もう少し早い時期でもよい
早い時期に実施。表彰もありますか？
1月下旬
年度始め

年度のなかば(3人)

年度なかば、7～8月くらい。年度末はやめてほしい
年度の中頃がよかった(表彰とセットならば仕方ないですが)
8月ごろ

年度末は避けてほしい(2人)

年度末は実施してほしくない
年度末より、ゆとりのある時期に

秋頃(2人)

10～11月頃
秋頃、年度末は業務が多忙なため

【教室関係者】

10～11月
年度末は問題がある
両日平日ではなく、土日のどちらかをはさんでほしかった。

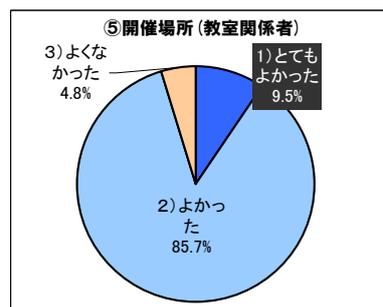
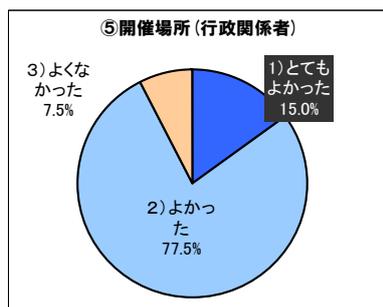
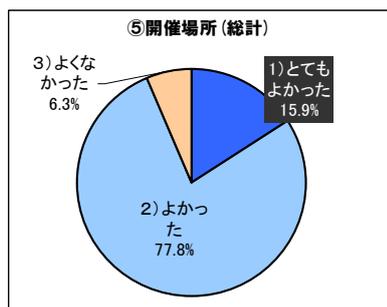
★上記④の設問において、無記入、欠席された方の希望時期

【行政関係者】

6月くらいがよい。前年度の授賞式、予算時期の前
-------------------------

⑤開催場所

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)とてもよかった	6	15.0%	2	9.5%	1	100.0%	1	100.0%	10	15.9%
2)よかった	31	77.5%	18	85.7%	0	0.0%	0	0.0%	49	77.8%
3)よくなかった	3	7.5%	1	4.8%	0	0.0%	0	0.0%	4	6.3%
総計	40	100.0%	21	100.0%	1	100.0%	1	100.0%	63	100.0%
無記入、欠席	14		7		0		3		24	



★上記⑤の設問に1)とてもよかった、2)よかった と回答された方の希望時期

【行政関係者】

文科省やオリンピックセンター、教室担当者の方たちのモチベーションのためには、表彰式は儀礼的な場所がよいのでは
--

都心であればよいのでは
-------------

都心にも近く、アクセスもよい
----------------

★上記⑤の設問に3)よくなかった と回答された方の希望時期

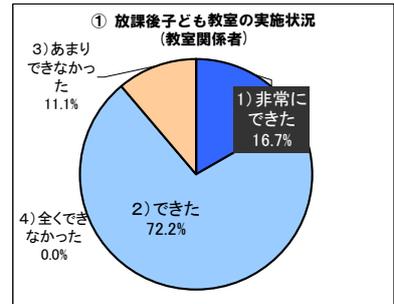
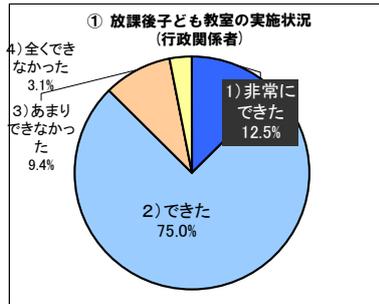
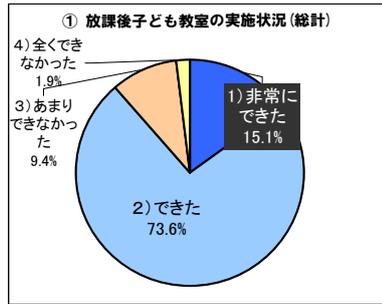
【行政関係者】

会場近くに宿泊する施設が少ないため、都心がよい
-------------------------

### 3. 研究大会を終えて、事業(もしくは教室)運営のための有益な情報収集ができましたか？

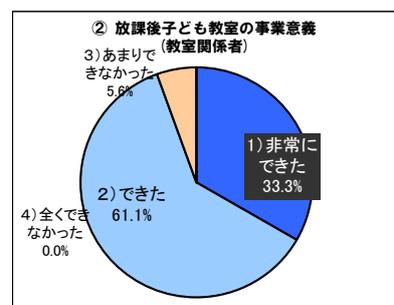
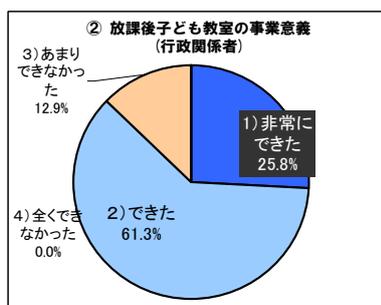
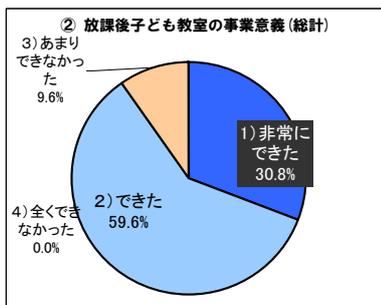
#### ① 放課後子ども教室の実施状況について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常にできた	4	12.5%	3	16.7%	1	100.0%	0	0.0%	8	15.1%
2)できた	24	75.0%	13	72.2%	0	0.0%	2	100.0%	39	73.6%
3)あまりできなかった	3	9.4%	2	11.1%	0	0.0%	0	0.0%	5	9.4%
4)全くできなかった	1	3.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	1.9%
総計	32	100.0%	18	100.0%	1	100.0%	2	100.0%	53	100.0%
無記入、欠席	22		10		0		2		34	



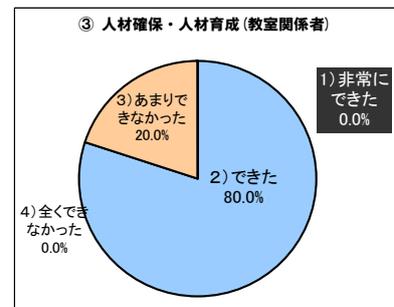
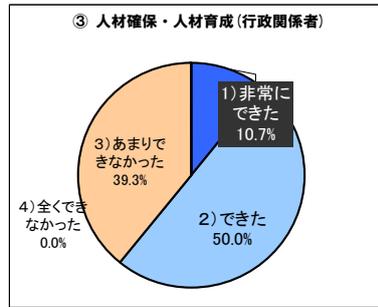
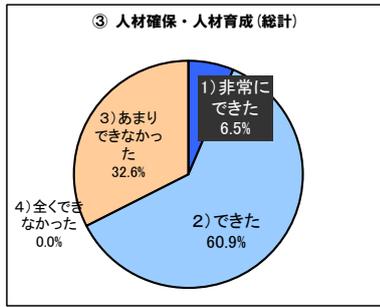
#### ② 放課後子ども教室の事業意義について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常にできた	8	25.8%	6	33.3%	1	100.0%	1	50.0%	16	30.8%
2)できた	19	61.3%	11	61.1%	0	0.0%	1	50.0%	31	59.6%
3)あまりできなかった	4	12.9%	1	5.6%	0	0.0%	0	0.0%	5	9.6%
4)全くできなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	31	100.0%	18	100.0%	1	100.0%	2	100.0%	52	100.0%
無記入、欠席	23		10		0		2		35	



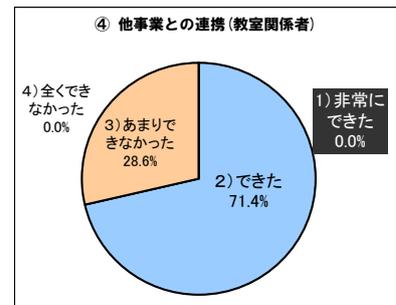
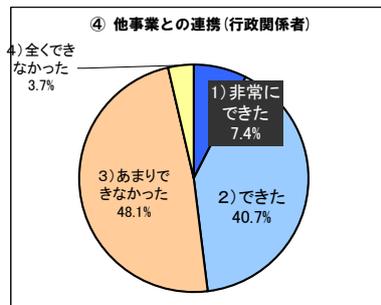
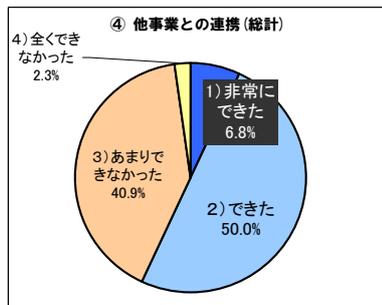
#### ③ 人材確保・人材育成について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1)非常にできた	3	10.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	3	6.5%
2)できた	14	50.0%	12	80.0%	0	0.0%	2	100.0%	28	60.9%
3)あまりできなかった	11	39.3%	3	20.0%	1	100.0%	0	0.0%	15	32.6%
4)全くできなかった	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
総計	28	100.0%	15	100.0%	1	100.0%	2	100.0%	46	100.0%
無記入、欠席	26		13		0		2		41	



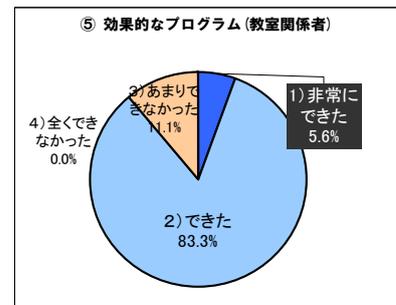
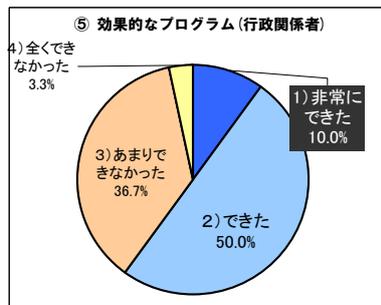
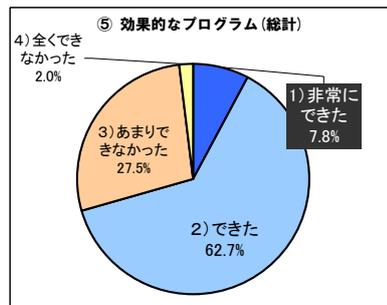
#### ④ 他事業との連携について

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常にできた	2	7.4%	0	0.0%	1	100.0%	0	0.0%	3	6.8%
2) できた	11	40.7%	10	71.4%	0	0.0%	1	50.0%	22	50.0%
3) あまりできなかった	13	48.1%	4	28.6%	0	0.0%	1	50.0%	18	40.9%
4) 全くできなかった	1	3.7%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	2.3%
総計	27	100.0%	14	100.0%	1	100.0%	2	100.0%	44	100.0%
無記入、欠席	27		14		0		2		43	



#### ⑤ 効果的なプログラムについて

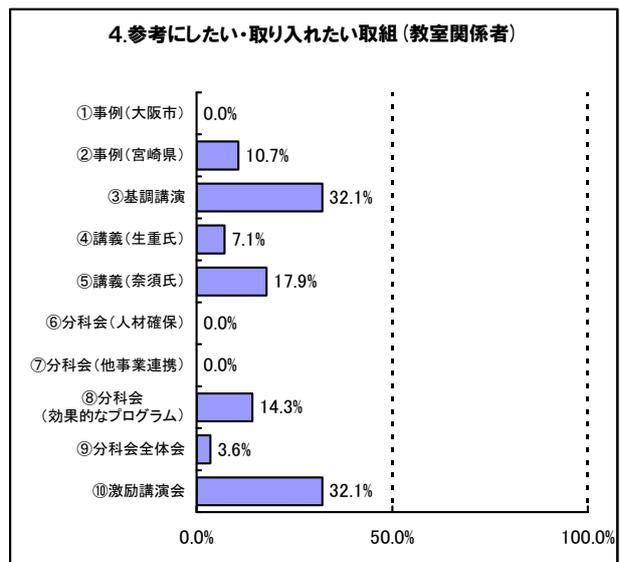
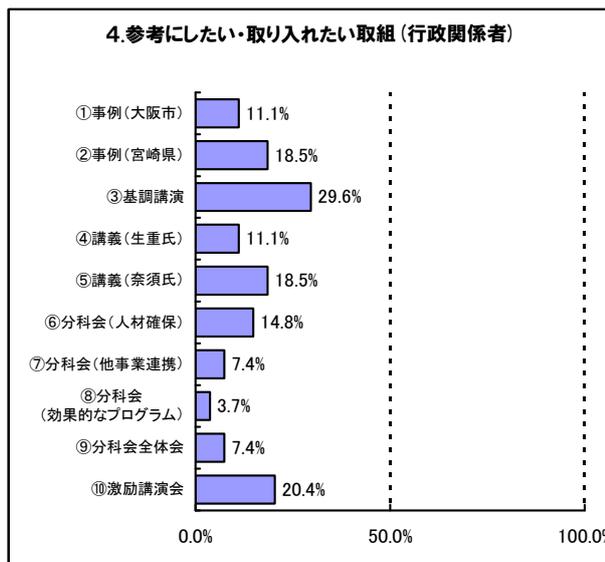
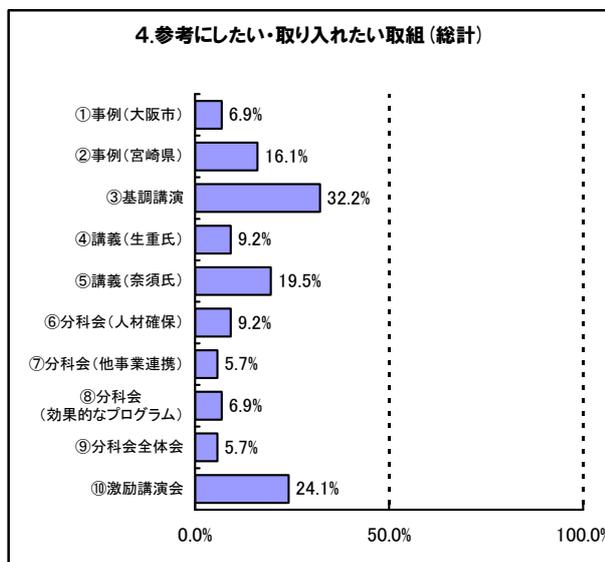
	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
1) 非常にできた	3	10.0%	1	5.6%	0	0.0%	0	0.0%	4	7.8%
2) できた	15	50.0%	15	83.3%	1	100.0%	1	50.0%	32	62.7%
3) あまりできなかった	11	36.7%	2	11.1%	0	0.0%	1	50.0%	14	27.5%
4) 全くできなかった	1	3.3%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	1	2.0%
総計	30	100.0%	18	100.0%	1	100.0%	2	100.0%	51	100.0%
無記入、欠席	24		10		0		2		36	



4. 本研究大会のなかで各自治体の参考にしたい取組又は研修に取り入れたい(取り入れて欲しい)プログラムはありましたか？※複数回答あり

※有効回答数に対する%

	行政関係者		教室関係者		双方所属		不明		総計	
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%
①事例紹介(大阪市立粉浜小学校)	6	11.1%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	6	6.9%
②事例紹介(宮崎県五ヶ瀬町風の子自然学校)	10	18.5%	3	10.7%	1	100.0%	0	0.0%	14	16.1%
③基調講演	16	29.6%	9	32.1%	1	100.0%	2	50.0%	28	32.2%
④講義(教育の可能性を広げるプラットフォームづくり)	6	11.1%	2	7.1%	0	0.0%	0	0.0%	8	9.2%
⑤講義(地域とつながるプログラムが子どもたちに)	10	18.5%	5	17.9%	1	100.0%	1	25.0%	17	19.5%
⑥分科会(人材確保について)	8	14.8%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	8	9.2%
⑦分科会(他事業との連携について)	4	7.4%	0	0.0%	0	0.0%	1	25.0%	5	5.7%
⑧分科会(効果的なプログラムとは)について	2	3.7%	4	14.3%	0	0.0%	0	0.0%	6	6.9%
⑨分科会全体会	4	7.4%	1	3.6%	0	0.0%	0	0.0%	5	5.7%
⑩激励講演会	11	20.4%	9	32.1%	0	0.0%	1	25.0%	21	24.1%
総計	77		33		3		5		118	



★上記4の設問に回答された方の自由記述より

【行政関係者】

④講義は、放課後子ども教室と学校支援地域本部事業との連携を検討するうえで、大変大きなヒントとなりそうです。その他の内容もとても充実したものでした。

コーディネーターに直接聞かせたい内容であった

基調講演は事業の本質的な部分を確認できたし、講義では学校教育サイドから放課後子ども教室のあり方を確認することができたから

【教室関係者】

取り組んでいる中での問題点として、いかに大人が「待つ」＝忍耐力を持ち合わせていないか、があります。大人の生きる力の弱さ、大人のコミュニケーション不足などの抱える問題が子どもたちの育みに、大きな影響をもたらしていると感じている中、堀田・藤原両先生の講演は非常に心強く、また、その方向に勇気をもらえました。ありがとうございました。

【双方所属・その他の所属】

すべてにおいて大人は、上からの視点で子どもたちを制するのではなく、子ども主体で教室を運営することを広めたい

5. 研究大会を受講してのご意見・ご質問等ございましたら自由にご記入ください。

【自由記述件数】

(単位:人)

	行政関係者	教室関係者	双方/行政教室以外	総計
要望	7	2	0	9
感想	3	1	1	5
来年も実施を希望	2	0	0	2

【行政関係者】

要望(7人)

・参加者の名簿がいただけると、今後の情報を得るのに参考になるかと思うので、今後の研修会でお願ひしたいです。  
 ・県レベルと市レベルでは状況が異なるので、県・市町村それぞれの情報交換の場、分科会があるとさらに参加する意義があると思う。

①開催時期…できれば11月頃にお願ひしたい  
 ②内容…基調講演は「子どもプランのめざすもの」についてきちんと理論的に説明できる人が望ましい。分科会は、ワークショップ形式はよいが、きれいにまとめるよりも、お互いの情報をきちんと出せるものがよい。講義は、熱意はよくわかる。県内でも紹介したい。  
 ③情報交換会…これが一番大切。各地の取組みの概要がわかる資料があれば、もっと深まると思う。全体的に、少し日程的に窮屈でした。盛りだくさんののですが…。休憩も大切な情報交換の時間です。

キャリアリンクの運営を注視していたのですが、運営のベースの面で弱いところがあるのではと感じました。スタッフのスキルアップを期待します。文科省の政策にのっとった内容でイベントを開催できる団体、営利企業という意味ではまあまあです。学校支援地域本部事業に力を入れ、打ち出していくためには、パワーが必要なのでしょうが、そのパワーのために引いていく存在をどうするのが課題。  
 文部科学省には、放課後子ども教室を児童クラブに吸収されるような方向性を期待します。方向性や意義は、2つの事業は違うという建前、文科省の存在意義がなくなるとは思いますが、ベースとできるのは児童クラブです。文科省の面子を捨てて、実を取ってください。認定子ども園にもいえることですが。  
 児童クラブのオプションとして教室を位置づける。幹は児童クラブ、教室は枝葉とする。学童にアレルギーが住民にあるという言葉がちょっとひっかかりました。

スムーズな受付を。表示は、入って見えるように高い位置とかに掲示する。受付の区分(地区)も同様に並んでも見えるように。あとは、よい会場で丁寧な対応でよかったです。分科会報告資料がプリントアウトでいただけるとうれしかったのですが…。

講義・講演の後に質疑の時間を確保し、さらに内容を深めることができるとよかったです。

参加者の中には文科省の思いや制度等、さまざまな不安や悩みを少しでも解消できればいいと思っている方もいました。そこで、進行等は委託するにしても、同じテーブルで意見交換(文科省の担当の方)できるといいなと思います。地域も行政も文科省も、共に汗をかくスタンスが必要ではないでしょうか。進める側と受ける側の感が否めませんでした。社会教育の特性「相互学習」をもって、皆が一体となって「参加してよかった」「参加できてよかった」研修会となるよう、今後に期待致します。大変お世話になりました。

全体に大会の運営にまともがない。対象別にしぼってやった方がよい。会場が寒い。

感想(3人)

たいへんお世話になりました。ありがとうございました。

講演講師の人は見事です。堀田さん、藤原さん、素晴らしいと思います。放課後子どもプランとしていながら、厚生労働省の児童クラブの関係が見えない。担当者もいらしていたのだとは思いますが、いわゆる顔の見えない状態。その点、環境省の姿勢は素晴らしい。

都合により事例紹介までの参加になってしまいましたが、参考になりました。放課後子ども教室を実施する上で、いろいろと悩みもありますが、今回の表彰はとてもはげみになります。ありがとうございました。

来年も実施を希望(2人)

事業の関係者が一同に会する機会として、たいへん意味のある大会だと思います。来年度も実施していただきたいと思います。

是非、来年度もこのような機会をつくっていただければ

**【教室関係者】**

**要望(2人)**

地域で実践している中での問題提起がほしい。行政主導で行政がどうすればよいのかという問題ばかりで、実践の中での問題を取り上げてもらえれば(教育委員会用の研修になりすぎているのでは?)。行政マンがもっとローカルに出て情報収集していたら、もっと親近感を感じていたかも。しかし藤原先生の話ですべて解決!!

分科会は同じ立場の者同志で行えるものがよい。事例発表をもっと多く入れてほしかった。

**感想(1人)**

自分自身の子育ての勉強にもなりました。ありがとうございました。

**【双方所属・その他の所属】**

**感想(1人)**

全国からの参加は、たくさんの魅力的な人材、事例に出会えることを再認識いたしました。お世話くださった関係者の皆様に深く感謝いたします。



---

平成 20 年度 文部科学省委託事業  
総合的な放課後対策推進のための調査研究

受託者:株式会社キャリアリンク  
〒542-0083 大阪府中央区東心斎橋 1-14-15  
TEL:06-6251-6001  
<http://www.lab-warp.ne.jp/>

---